

# 神戸学院大学心理学研究

第 4 卷 第 1 号

**Kobe Gakuin University Journal of Psychology**

2021 年 12 月 発行

神戸学院大学心理学部

# 神戸学院大学心理学研究 第4巻 第1号 目次

## 原著論文

- 記憶検査の成績予測の正確度と時間的展望の関係  
－改訂版ウェクスラー記憶検査（WMS-R）と時間的展望尺度（ZTPI）による検討－  
神戸学院大学心理学部 清水 寛之 ..... 1
- 高齢者の忘却に関する認識の特徴－半構造化面接による検討－  
神戸学院大学心理学部 堤 聖月 ..... 13
- The relationship between temperament of conformity, the belief in a just world, and the practice of COVID-19 countermeasures in Japan  
Department of psychology, Kobe Gakuin University Kazuhisa NAGAYA ..... 23
- 中国の在留邦人における文化適応課題の検討－日中文化の相違点の認識に関する調査から－  
神戸学院大学心理学部 毛 新華 ..... 31  
神戸学院大学心理学部 清水 寛之  
神戸女学院大学人間科学部 木村 昌紀

## 研究報告

- 攻撃性が自己嫌悪に結びつく要因の検討  
神戸学院大学心理学研究科心理学専攻 夏目 瑞希 ..... 41  
近畿大学総合社会学部 本岡 寛子  
神戸学院大学心理学部 道城 裕貴  
神戸学院大学心理学部 村井 佳比子

## 心理学部学術講演会／2021年度第1回心理学部学術講演会

- 障害当事者のものがたりを聴く～人生七転び八起き～  
京都頸髄損傷者連絡会相談役  
エイブル・パフォーマンス集団「ガラ(柄)」代表 木村 善男 ..... 47  
編集／京都光華女子大学健康科学部心理学科 大谷 多加志

# 記憶検査の成績予測の正確度と時間的展望の関係 —改訂版ウェクスラー記憶検査 (WMS-R) と 時間的展望尺度 (ZTPI) による検討—<sup>1</sup>

清水 寛之 神戸学院大学心理学部

**Relationships between accuracy of prediction for memory test performance and time perspective:  
Using the Wechsler Memory Scale-Revised (WMS-R)  
and the Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI)**

**Hiroyuki Shimizu** (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

The purpose of the present study was to elucidate the relationship between accuracy of prediction for memory test performance in a laboratory and time perspective in everyday life using the Wechsler Memory Scale-Revised (WMS-R) and the Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI). A hundred and twenty-two undergraduate and graduate students (18-26 years old) participated in the study, and the standardized memory test and the questionnaires were successively administered to each of the participants. The participants were asked to rate 56 items of the ZTPI (5 factors) on both 5-points scales from “not true at all” to “very true”. Subsequently they were also instructed to perform the WMS-R in a formal fashion, except predicting the delayed performance in four subtests (logical memory, visual paired association, verbal paired association and visual reproduction) after performing each immediate test. The results indicated statistically significant positive or negative correlation between the prediction of delayed performance in the four subtests of the WMS-R and the ratings of the factors in ZTPI, but there was no other significant correlation. The results were discussed in terms of the meaningful interpretations for the positive or negative relation between the subtests predictions and time perspectives.

**Key words:**metamemory, memory prediction, time perspective, Wechsler Memory Scale-Revised (WMS-R), Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI)

Kobe Gakuin University Journal of Psychology  
2021, Vol.4, No.1, pp.1-12

人は何らかの課題遂行にあたって、その課題成績の高低や達成の成否を予測することができる。そうした予測は、課題に取り組む際のさまざまな心的構えや判断、課題遂行のための活動の実行・調整などとも関係している。とくに記憶・学習に関する課題の場合、その課題の難易度や、記憶・想起に与えられた制約条件などに基づいて、全体の学習時間をどの

ような記銘材料に振り向けるのか、さまざまな記憶方略を用いるのかどうかといった記憶活動の展開に影響が及ぶ。その際、自らの予測や期待のとおり記憶活動が実行され、有効に機能することもあれば、自己の記憶活動による結果が予測や期待とは異なるものになることもある。

もともと個人特性として、事前の期待や予測を確実に正確に評価する者もいれば、過大評価または過小評価を行う者もいるだろう。そのため、課題場面での事前予測の正確さと、日常生活場面における比較的安定した自己認知や行動傾向との関係はきわめて重要な意味をもっていると考えられる。たとえ

1 本研究は、JSPS 科研費 22530803, 25380992, 17K04510 の助成を受けたものである。本研究の一部は、日本心理学会第 85 回大会 (2021 年 9 月 1 ~ 8 日) において発表された。

ば、清水 (2018b) が指摘するように、セルフハンディキャッピング (self-handicapping) や自己充足的予言 (self-fulfilling prophecy) などは、その好例であるといえる。セルフハンディキャッピングとは、自分の何らかの特性が評価の対象となる可能性があり、そこで高い評価を受けられるかどうか確信がもてない場合に、遂行を妨害するハンディキャップがあることを他者に主張したり、自らハンディキャップを作り出したりする行為をいう (安藤, 1990; Jones & Berglas, 1978)。また、自己充足的予言とは、このようになるのではないかといった予期が、暗黙のうちに特定の行動に人を向かわせ、結果として予言された状況を現実化してしまうプロセスを指す (Merton, 1957 森・森・金沢・中島訳 1961)。

これらはいずれも、個人がこれまでの経験や現時点でのさまざまな課題状況の認知に基づいて将来の自らの行動の結果を予測する際に生じる一種のバイアスと捉えることができる。言い換えれば、認知課題の遂行に先立って行われる予測には、個人の自己認知や行動傾向に関する全般的な捉え方が何らかのかたちで反映されている可能性が考えられる。したがって、課題成績の事前予測における過大評価や過小評価は、個人の自己の認知能力に関する認識や信念、態度といったものとの関連で議論する必要がある。

本研究は、こうした議論を進めるための基礎資料を得るために、特定の課題状況におけるメタ記憶と時間的展望の関係を調べることを目的としている。ここでのメタ記憶とは、個人や他者の記憶にかかわる個人の認識や知識、理解、思考、経験、活動などを含む広い概念である (Nelson & Narens, 1990; 清水, 2013)。メタ記憶には、特定の記憶課題において記憶方略を使用できることに気づくことや、記憶課題の学習容易性、記憶する個人の状態や能力、使用できる記憶方略の有効性などに関連した事柄についての広範な知識が含まれている。そうした知識だけでなく、自己の記憶行動を監視したり記憶成績を予測したりする能力や、自己の記憶行動のプランニングやコントロール、調整、修正などにかかわる諸能力もメタ記憶のなかに含めて考えることができる。メタ記憶は、実験室場面において記銘や保持、想起、忘却に関連するさまざまな予測や判断を調べる方法が数多く考案されてきた (e.g., 清水, 2012)。

一方、時間的展望とは、「ある一定の時点における個人の心理的過去と未来についての見解の総体」であるとされている (Lewin, 1951 猪股訳 1979)。時間的展望は、個人の心理的な過去や現在、未来に関する認識であると言い換えることができる。時間的展望に関する有用な測定尺度の一つに、Zimbardo & Boyd (1999) によって開発されたジンバルドー時間的展望尺度 (Zimbardo Time Perspective Inventory, ZTPI) がある。この質問紙もまた、数多くの研究で

広範囲に使用されており (Boniwell, Osin, Linley, & Ivanchenko, 2010; Boniwell & Zimbardo, 2004; Drake, Duncan, Sutherland, Abernethy, & Henry, 2008)、下島・佐藤・越智 (2012) によって日本版 ZTPI (以下では単に ZTPI とよぶ) が開発されている。

本研究では、標準化された記憶検査課題における予測の正確さと日常生活場面における時間的展望との関係を検討する。筆者はこれまで引き続いて、各種のメタ記憶質問紙 (metamemory questionnaire) と ZTPI を用いて日常生活場面におけるメタ記憶と時間的展望の関係について検討してきた (清水, 2018a, 2018b, 2020)。たとえば、清水 (2018a) は、大学生を対象に日常記憶質問紙 (Everyday Memory Questionnaire, EMQ; Sunderland, Harris, & Baddeley, 1983, 1984; 清水・高橋・齋藤, 2006, 2007)、成人メタ記憶尺度 (Metamemory in Adulthood questionnaire, MIA; Dixon & Hulsch, 1983; Dixon, Hultsch, & Hertzog, 1988; 金城・井出・石原, 2013) および ZTPI を用いた質問紙調査を実施し、これらの質問紙を構成する因子間の相関関係を検討した。その結果、日常的に記憶に関する失敗や困難の経験が多いと認識している人ほど、記憶能力に自信がもてず、内的な記憶方略を用いて積極的に努力を傾けることもなく、時間的展望においても総じて過去を否定的に捉えがちで、自らの努力の価値を低く見積もっている可能性があることを示した。続いて清水 (2018b) は、認知的失敗質問紙 (Cognitive Failure Questionnaire, CFQ; Broadbent, Cooper, FitzGerald, & Parkes, 1982; 清水・高橋・齋藤, 2006, 2007) と ZTPI を用い、日常生活における認知的失敗の経験と時間的展望の関係を検討した。その結果、自己の一貫性や連続性における否定的な側面は日常生活のさまざまな回想記憶や展望記憶に関連した失敗経験に基づいている反面、自己の一貫性・連続性における肯定的側面は日常場面での認知的失敗の自己評価とは結びついていない可能性があることを明らかにした。さらに清水 (2020) は、記憶能力質問紙 (Memory Ability Questionnaire, MAQ; 楠見, 1991) と ZTPI を用いて記憶能力の自己評価と時間的展望の関係を検討したところ、自己の一貫性や連続性における否定的な側面、および宿命論に由来する無力感を伴う態度は、日常生活のさまざまな回想記憶や展望記憶に関する記憶能力の乏しさの自覚に基づいていることが示唆された。

このように、筆者はこれまでメタ記憶と時間的展望の関係を検討してきたが、いずれも各種のメタ記憶質問紙と ZTPI を用いて、日常生活場面での両者の関係を捉えようとしていた。しかしながら、メタ記憶質問紙の場合、調査参加者によって想定される日常場面での記憶課題状況がさまざまであり、言語指示によって方向づけるにしても、その多様性は大きく、想定される課題状況を限定するのがむずかしい。たとえば、MAQ では「買う予定であった物を思



い出せないことがある」という記述文に対して「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5件法で回答が求められる。あるいは、CFQでは「人の名前が思い出せない」ことが過去6ヶ月の間で「まったくない」から「非常によくある」までの5件法で回答が求められる。こうしたメタ記憶質問紙は、たしかに日常生活場面での自己の記憶能力や記憶特性に関するメタ記憶を調べるという点では有効であるが、課題状況がより限定したかたちで設定され、諸種の記憶能力が測定される場合のメタ記憶に関する実験データの収集が望まれる。

前述のように、実験室場面でのメタ記憶はこれまで、記銘や保持、想起、忘却に関連するさまざまな判断や予測を調べる方法が数多く開発されてきた。しかしながら、それらの多くは特定の記銘材料に対する再生や再認、再学習といった個別的な課題状況に限られており、複数の記銘材料や課題状況が設定されることはほとんどなかった。そこで、本研究は、標準化された記憶検査に着目し、実験参加者ごとに記憶検査の成績及びその予測に関するデータと時間的展望に関する調査データを収集することで、検査成績の予測の正確度と時間的展望の関係を明らかにする。

本研究が用いる記憶検査は、改訂版ウエクスラー記憶検査 (Wechsler Memory Scale-Revised, WMS-R) である。この記憶検査は、オリジナル版が米国で1945年に開発され、その後、1987年、1997年、2009年に改訂され (e.g., Wechsler, 1945, 1987)、現在はWMS-IV (第4版) が米国 Pearson 社から刊行されている。日本では、1987年のWMS-R (第2版) の日本版が日本文化科学社から2001年に刊行されている (Wechsler & 杉下, 2001; 以下ではこの日本版をWMS-Rとよぶ)。WMS-Rは、現在、臨床場面で記憶に問題があると疑われる人たちを対象に実施される代表的な個別式記憶検査である。適用範囲は16～74歳で、認知症をはじめとする種々の疾患の記憶障害を評価するのに広く用いられている。13の下位検査 (「1. 情報と見当識」, 「2. 精神統制」, 「3. 図形の記憶」, 「4. 論理的記憶I」, 「5. 視覚性対連合I」, 「6. 言語性対連合I」, 「7. 視覚性再生I」, 「8. 数唱」, 「9. 視覚性記憶範囲」, 「10. 論理的記憶II」, 「11. 視覚性対連合II」, 「12. 言語性対連合II」, 「13. 視覚性再生II」) の得点に基づいて5つの指標 (「一般的記憶」, 「言語性記憶」, 「視覚性記憶」, 「注意/集中力」, 「遅延再生」) が算出される。そのうち「遅延再生」については、「論理的記憶」, 「視覚性対連合」, 「言語性対連合」, 「視覚性再生」のIが直後検査を、IIが遅延検査を表している。「論理的記憶」では、検査者が読み上げる2つの短い物語 (それぞれ120字程度) を聞き、そのあと内容を口頭での再生が求められる。「視覚性対連合」では、図形 (抽象的線画) と色が結びつけられた6つの対を見て、そのあとに図形だけ

が呈示され、それと対になっていた色を6色のなかから指さすことが求められる。「言語性対連合」では、8つの単語対 (やさしい連合の4対とむずかしい連合の4対) が読み上げられ、そのあとに単語対の一方の単語だけを聞いて、対になっていたもう一方の単語を答えることが求められる。「視覚性再生」では、全部で4つの幾何学図形が一つずつ、それぞれ10秒間呈示され、図形ごとに描画再生が求められる。

通常の検査手続きでは、直後検査のあと遅延検査が約30分後に行われることが予告される。本実験では、その遅延検査の予告とともに、遅延成績の予測を実験参加者に求めることにする。

ZTPIは、56項目から構成され、次の5つの因子が抽出されている (下島他, 2012)。すなわち、(a)「過去否定 (Past Negative)」 (自己の一貫性における否定的な側面と関連する)、(b)「未来 (Future)」 (将来の目標や見返りのために努力する態度と関連する)、(c)「過去肯定 (Past Positive)」 (自己の一貫性における肯定的な側面と関連する)、(d)「現在快楽 (Present Hedonistic)」 (快楽的で危険を好み、向こう見ずな態度と関連する)、(e)「現在運命 (Present Fatalistic)」 (人生は運命で決まっているなどの無力感を伴った態度と関連する) である。

本研究は、メタ記憶と時間的展望との関係を探る総合的研究の一環として、代表的な記憶検査であるWMS-Rにおける遅延検査成績の予測に関するデータを個別的に収集するとともに、時間的展望を測定するZTPIを同一の大学生に与えて回答を求める。それらのデータをもとに、記憶検査の下位検査ごとの成績予測の正確度とZTPIを構成する因子との間の相関関係を明らかにすることで、実験室場面での記憶成績に関する自己評価と時間的展望との関係を検討する。

## 方法

### 実験参加者

近畿地方の4年制大学1校に在籍する学部学生と大学院学生、合わせて122名が本実験に参加した。そのうち、男性が58名、女性が64名であった。実験参加者全体の年齢は、平均20.29歳 (標準偏差1.22, 範囲18 - 26歳) であった。

### 実験期間

実験は、2012年3月から同年8月にかけて行われた。

### 実験場所

実験は、当該大学構内にある認知心理学実験室で行われた。

## 記憶検査

個人の記憶能力を調べるための代表的な個別式記憶検査として、日本語版の改訂版ウエクスラー記憶検査 (Wechsler & 杉下, 2001) が用いられた。この検査は次の 13 の下位検査から構成されている。「1. 情報と見当識」, 「2. 精神統制」, 「3. 図形の記憶」, 「4. 論理的記憶 I」, 「5. 視覚性対連合 I」, 「6. 言語性対連合 I」, 「7. 視覚性再生 I」, 「8. 数唱」, 「9. 視覚性記憶範囲」, 「10. 論理的記憶 II」, 「11. 視覚性対連合 II」, 「12. 言語性対連合 II」, 「13. 視覚性再生 II」。このうち「1. 情報と見当識」については、実験参加者が健常大学生であり、あとの指標得点の算出には用いられないことから、質問の一部（「今日は何曜日ですか？」など）の実施が割愛された。これらの下位検査の得点に基づいて 5 つの指標（「一般的記憶」, 「言語性記憶」, 「視覚性記憶」, 「注意／集中力」, 「遅延再生」）が算出される。このなかの遅延再生にかかわる検査項目について直後検査の時点で遅延検査の成績を予測するのに利用した。

## 質問紙

日常生活場面における時間的展望を測定するための質問紙として ZTPI が用いられた。ZTPI は、個人の時間的展望に関する記述文（全 43 項目）に対して「全くあてはまらない」, 「あてはまらない」, 「どちらともいえない」, 「あてはまる」, 「よくあてはまる」の 5 段階で評定することが求められた。

前述のように、下島他 (2012) は Zimbardo & Boyd (1999) の研究結果を参考に、ZTPI が次の 5 因子から構成されるという結果を示している。すなわち、第 1 因子「過去否定」、第 2 因子「未来」、第 3 因子「過去肯定」、第 4 因子「現在快樂」、第 5 因子「現在運命」である (Table 3 参照)。

## 実験手続き

記憶検査と質問紙調査は、総合的なメタ記憶に関する研究の一環として、他の実験や検査、別の質問紙調査とともに、同一の実験参加者に対して個別に行われた。実験参加者は、最初に全体的説明を受け、本研究への参加に関する同意書への署名が求められた。次に、実験・検査・調査が行われ、そのあとに参加協力への謝金の支払いに関する事務手続きが行われた。実験参加者がすべての調査に対して落ち着いて取り組めるように配慮がなされた。どの実験参加者に対しても、ZTPI が与えられたあと、10～15 分程度の休憩時間を置いてから WMS-R が実施された。

WMS-R は、記憶検査や知能検査の実施経験の豊富な実験者及び実験補助者によって、検査マニュアル『日本版ウエクスラー記憶検査法』(Wechsler & 杉下, 2001; 以下、単にマニュアルと呼ぶ) に従って行わ

れた。ただし、13 の下位検査のうち「4. 論理的記憶 I」, 「5. 視覚性対連合 I」, 「6. 言語性対連合 I」, 「7. 視覚性再生 I」については、それぞれの下位検査のあとに、後続のそれぞれの遅延検査（「10. 論理的記憶 II」, 「11. 視覚性対連合 II」, 「12. 言語性対連合 II」, 「13. 視覚性再生 II」）が約 30 分後に行われることが予告され、さらに、その遅延検査において完全正答を 100% とした場合に、およそ何% くらいの成績をあげることができるのかの予測が求められた。この記憶検査に要する時間は、約 45 分であった。

ZTPI は自己ペースで回答することが求められた。この調査に要する時間は 5 分程度であった。

## 分析方法

本研究におけるすべてのデータは、表計算ソフトウェア Microsoft Office Excel 2019 によって集計・整理され、統計的分析は統計解析ソフトウェア IBM SPSS Statistics 26 によって行われた。

WMS-R では、専用の記録用紙 (Wechsler & 杉下, 2001) に 13 の下位検査ごとの反応を記録し、マニュアルに従って粗点が算出された。下位検査ごとの粗点は所定の重みづけがなされ、それらの重みづけられた粗点をいくつか組み合わせて合成得点を算出した。その合成得点から、年齢群別の指標得点への換算表に基づいて「一般的記憶」, 「言語性記憶」, 「視覚性記憶」, 「注意／集中力」, 「遅延再生」という 5 つの指標得点が算出された。「一般的記憶」の指標得点は、「言語性記憶」と「視覚性記憶」の各合成得点を加算した得点に基づいて算出された。「言語性記憶」は「4. 論理的記憶 I」と「6. 言語性対連合 I」の 2 つの下位検査の粗点に、「視覚性記憶」は「3. 図形の記憶」, 「5. 視覚性対連合 I」, 「7. 視覚性再生 I」の 3 つの下位検査の粗点をもとに合成得点が算出された。「注意／集中力」は、「2. 精神統制」, 「8. 数唱」, 「9. 視覚性記憶範囲」の 3 つの下位検査の粗点をもとに合成得点が算出された。「遅延再生」では、「10. 論理的記憶 II」, 「11. 視覚性対連合 II」, 「12. 言語性対連合 II」, 「13. 視覚性再生 II」の 4 つの下位検査の粗点をもとに合成得点が算出された。

ZTPI では「全くあてはまらない」から「よくあてはまる」までのそれぞれの 5 段階の評定反応に対して、順に 1～5 の得点が与えられて得点化された（いずれも逆転項目については得点化を反転させた）。ZTPI ではいずれの項目においても評定値が高いほど、時間的展望に関連した特定の態度や認識の傾向が強いことを示す。

## 倫理的配慮

本研究は、筆者の所属する神戸学院大学の「ヒトを対象とする研究等倫理委員会」に対して事前審査を申請し、2010 年 12 月に承認を受けた（承認番号 HEB101207-2）。研究調査に先立って、すべての参加

者に対して、研究参加に関するさまざまな権利を保障する文書を示し、そうした理解のうえで本研究への参加協力を同意する文書を研究者（筆者）との間で取り交わした。そのなかで、(a) 実験等への参加は、個人の自由意思によるもので、参加しなくても不利益を受けないこと（授業科目の単位認定や成績評価とも関係しないこと）、(b) 実験等の開始後も、いつでも自由に中断・辞退でき、その場合も不利益を受けないこと、(c) 実験等の途中または終了後に本実験に関して疑問が生じたときは、すぐに連絡し、適切な対応・措置が受けられること、(d) 本研究によって得られたデータは統計処理を加えたうえで学術雑誌などに公表されることがあるが、その場合も参加者の個人情報厳格に保護され、個人を特定し得る情報は公表されないこと、が記載されていた。これらについて、研究者（筆者）と調査参加者の両者の署名入りの同一の同意書が2通作成され、双方が1通ずつ保管するという手続きがとられた。

## 結果

### 改訂版ウエクスラー記憶検査（WMS-R）の結果

**下位検査の粗点と指標得点** WMS-Rにおける下位検査ごとの粗点と指標得点を、標準化標本のデータとともに、それぞれ Table 1 と Table 2 に示す。いずれの下位検査成績も指標得点も、この検査が標準化された際の標本データ（標準データ）よりもやや高そうであるが、下位検査ごとに  $t$  検定を行うと、「2. 精神統制」、「6. 言語性対連合 I」、「9. 視覚性記憶範囲」、「12. 言語性対連合 II」、「13. 視覚性再生 II」の5つの下位検査において本研究の検査成績は、標準データとの間に有意差は認められなかった。「数唱」では本研究の検査成績は、標準データよりも有意に低かったが、それら以外はいずれも有意に標準データよりも高かった。指標得点では「注意／集中力」において本研究の検査成績は標準データとの間に有意差は認められなかったが、それら以外はいずれも有意に標準データよりも高かった。

Table 1 改訂版ウエクスラー記憶検査（WMS-R）における下位検査の粗点

下位検査	本研究 (N=122)		標準化標本 (N=54)		$t$ 値	有意水準
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
1. 情報と見当識	---	---	13.5	0.7	---	---
2. 精神統制	5.3	0.81	5.4	0.8	0.548	<i>n.s.</i>
3. 図形の記憶	8.3	1.28	7.8	1.2	2.577	$p < .05$
4. 論理的記憶 I	30.4	6.42	26.6	6.4	3.595	$p < .001$
5. 視覚性対連合 I	16.6	2.14	15.6	2.2	2.804	$p < .01$
6. 言語性対連合 I	22.1	1.77	21.7	2.2	1.356	<i>n.s.</i>
7. 視覚性再生 I	39.5	1.55	38.9	2.5	2.018	$p < .05$
8. 数唱	15.7	3.06	17.0	3.8	2.492	$p < .05$
9. 視覚性記憶範囲	19.0	3.24	19.1	3.3	0.095	<i>n.s.</i>
10. 論理的記憶 II	26.9	7.01	22.8	6.7	3.590	$p < .001$
11. 視覚性対連合 II	5.9	0.47	5.7	0.8	2.088	$p < .05$
12. 言語性対連合 II	7.9	0.41	7.8	0.9	0.614	<i>n.s.</i>
13. 視覚性再生 II	37.8	3.65	36.9	4.7	1.344	<i>n.s.</i>

注) 標準化標本は、杉下 (2001) の年齢群20-24による。

本研究において「1. 情報と見当識」は割愛された。

表中の数値の桁数は標準データに合わせた。

Table 2 改訂版ウエクスラー記憶検査（WMS-R）における指標得点

下位検査	本研究 (N=122)		標準化標本 (N=54)		$t$ 値	有意水準
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
一般的記憶	109.1	14.2	100.2	14.6	3.783	$p < .001$
言語性記憶	105.8	0.81	100.3	14.7	4.148	$p < .001$
視覚性記憶	109.5	1.28	100.1	14.7	7.065	$p < .001$
注意／集中力	97.4	6.42	99.6	11.8	1.631	<i>n.s.</i>
遅延再生	108.9	2.14	100.5	13.9	6.519	$p < .001$

注) 標準化標本は、杉下 (2001) の年齢群20-24による。

表中の数値の桁数は標準データに合わせた。



**直後成績と遅延成績** 下位検査のなかで直後検査と遅延検査の両方が設けられている「論理的記憶」、「視覚性対連合」、「言語性対連合」、「視覚性再生」の4つの下位検査においてそれぞれの直後成績と遅延成績を%に換算し、Figure 1 に示す。これらについて実験参加者内2要因分散分析を行ったところ、直後成績と遅延成績の違いによる主効果は認められず [ $F > 1, n.s.$ ], 下位検査の主効果と両方の交互作用はいずれも有意であった [それぞれ,  $F(2.05, 248.23) = 778.18, p < .001, \eta_p^2 = .87; F(2.76, 334.10) = 86.85, p <$

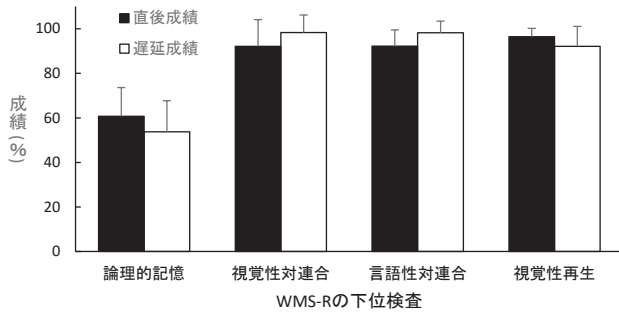


Figure 1

改訂版ウエクスラー記憶検査の直後成績と遅延成績 (ともに%換算済み) (エラーバーは1標準偏差)

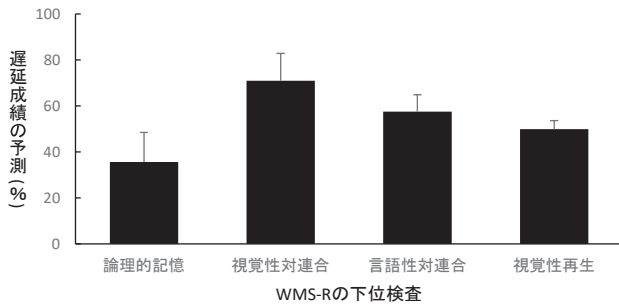


Figure 2

改訂版ウエクスラー記憶検査 (WMS-R) の遅延成績の予測 (エラーバーは1標準偏差)

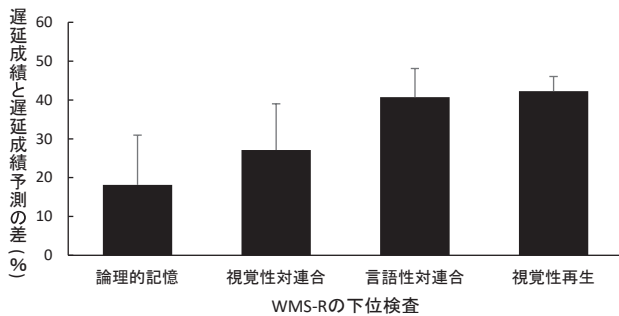


Figure 3

改訂版ウエクスラー記憶検査 (WMS-R) の遅延成績と遅延成績予測の差 (エラーバーは1標準偏差)

.001,  $\eta_p^2 = .42$ ]. そこで、下位検査ごとに直後成績と遅延成績を比較すると、「論理的記憶」と「視覚性再生」では直後成績のほうが遅延成績よりも有意に高かったが [それぞれ,  $t(121) = 12.20, p < .001, d = .52; t(121) = 6.01, p < .001, d = .62$ ], 「視覚性対連合」と「言語性対連合」では逆に、直後成績のほうが遅延成績よりも有意に低かった [それぞれ,  $t(121) = 6.58, p < .001, d = .61; t(121) = 9.14, p < .001, d = .95$ ]. ただし、「論理的記憶」以外の3つの下位検査の直後成績と遅延成績はいずれも90%を超えており、天井効果が生じていた。

**遅延成績の予測** 上記の4つの下位検査における遅延再生の予測値を Figure 2 に示す。実験参加者内1要因分散分析を行ったところ、下位検査の効果が有意であった [ $F(2.75, 329.35) = 102.29, p < .001, \eta_p^2 = .46$ ]. 下位検査は、「視覚性対連合」の予測値が最も高く、次いで「言語性対連合」、「視覚性再生」の順で低くなり、「論理的記憶」が最も低かった。これら下位検査間の差はいずれも有意であった [ $ps < .001$ ].

また、下位検査のそれぞれについて遅延検査での実際の成績と予測された成績を比較すると、いずれの下位検査においても遅延成績予測のほうが実際に遅延成績よりも有意に低かった [ $ps < .001$ ]. したがって、遅延成績の予測は、下位検査の種類に関係なく、実際の遅延成績に対して過小予測であることが示された。

**遅延成績の予測の正確度** 4つの下位検査において実験参加者ごとに遅延成績から遅延再生予測を減じたものを算出して遅延成績の予測の正確度に関する指標とし、Figure 3 に示す。この場合、値が0に近いほど予測は正確であることを示す。これに対して実験参加者内1要因分散分析を行ったところ、下位検査の効果が有意であった [ $F(2.80, 339.10) = 58.62, p < .001, \eta_p^2 = .33$ ]. 遅延成績と遅延成績予測との差は、「論理的記憶」が最も小さく [ $p < .001$ ], 次に「視覚性対連合」が小さく [ $p < .001$ ], 「言語性対連合」と「視覚性再生」はそれらよりも有意に大きかったが [ $p < .001$ ], この両者に有意差は認められなかった [ $n.s.$ ].

### ジンバルド一時的展望尺度 (ZTPI) の結果<sup>2</sup>

ZTPI の56項目のそれぞれに対する全調査参加者の評定値について、平均と標準偏差を算出した結果を Table 3 に示す。質問項目の全体平均は3.30 (標準偏差1.22, 範囲2.27-4.36) であった。下島他 (2012) の研究結果に基づいて、実験参加者ごとに各因子別の評定値の平均と標準偏差を算出し、Figure 4 に示す。試みに因子間の平均評定値を比べると、全体として因子の主効果の有意性が認められた [ $F(4, 484)$

2 本研究の ZTPI の結果については、すでに清水 (2018a, 2018b, 2020) で発表している。



Table 3 ジンバルドー時間的展望質問紙 (ZTPI) の因子ごとの質問項目と評定値  
(清水 (2020) の Table 2 を一部改変して再掲)

因子 番号	質問項目	平均	標準偏差
過去否定 (Past-Negative, PN)			
50	過去に起きた嫌な出来事について考えることがある	3.67	1.16
16	過去のつらい経験が、繰り返し頭に浮かぶ	3.24	1.31
34	若い頃の嫌なイメージを忘れる事は難しい	3.68	1.05
4	人生の中で、ああすべきだったのに、と思うことが多い	3.96	1.15
27	取り消してしまいたい間違いを過去に犯したことがある	3.66	1.25
36	今を楽しんでいるときでも、つい過去のよく似た経験と比べてしまう	3.06	1.30
54	人生の中でやりそこなった楽しいことについて考えることがある	3.50	1.21
5	私の決断は、周りの人や出来事によって大いに影響される	3.43	1.13
未来 (Future, F)			
40	コツコツと取り組んで時間通りに課題を完了する	2.60	1.18
45	やるべきことがあるとき、誘惑に耐えることができる	2.89	1.10
24 *	毎日を計画的というよりは成り行きで過ごす	3.71	1.03
10	何かをやり遂げようとするとき、目標を決めてそれに到達するための具体的な方法を検討する	3.36	1.08
13	夜遊びに行くことよりも、明日までにやるべき事や必要なことを終える方が大切だ	3.42	1.18
21	友人や上司・教師などに対する義務は遅れずに果たす	3.72	0.88
51	前進するためならば、難しくてもおもしろくない課題に取り組むことができる	3.20	1.00
6	人は毎朝、その日の予定を計画するべきだと思う	2.73	1.19
18	約束の時間に遅れるのは嫌いだ	3.93	1.15
43	やるべきことをリストにする	2.94	1.36
52 *	稼いだお金は、明日のために貯金するよりも今日の楽しみに使う	2.91	1.20
30	決断する前に、メリットとデメリットを比べてみる	3.66	1.14
過去肯定 (Past-Positive, PP)			
7	昔のことを考えるのは楽しい	3.19	1.08
11	昔のことを思い出すと、悪い思い出よりも良い思い出の方が全体的に多い	2.95	1.28
25 *	嫌な思い出が多いので、過去のことは思い出したくない	2.61	1.20
20	楽しかった思い出が、すぐに心に浮かぶ	3.51	1.09
29	幼い頃が懐かしいと思う	3.95	1.01
49	何度も繰り返される家族の行事や伝統が好きだ	3.54	1.13
22 *	過去に虐待や拒絶をそれなりに経験した	2.27	1.30
41 *	家族が昔はああだった、こうだった、と話し出しても耳を貸さない	2.81	1.21
2	懐かしい光景、音、臭いによって、幼い頃のよい思い出がよみがえることがよくある	3.98	1.12
現在快楽 (Present-Hedonistic, PH)			
42	人生の刺激を得るために冒険をする	3.31	1.20
26	人生に刺激は重要だ	4.36	0.78
31	危険をおそれないからこそ、人生は退屈でなくなる	2.42	1.14
28	時間内に終えることよりも、やっていることを楽しむことの方が大切だと思う	3.64	1.00
44	自分の頭ではなく気持ちに従うことが多い	3.53	1.15
8	衝動的に行動することがある	3.98	0.93
32	人生のゴールだけを考えるよりも、その道のりを楽しむことが大切だ	4.18	0.69
55	親密な関係は情熱的な方がいい	3.51	1.09
現在運命 (Present-Fatalistic, PF)			
38	人生の進路は、自分ではどうしようもない力によって決められている	2.42	1.14
14	なるようにしかならないので、自分が何をしてもあまり関係ない	2.66	1.11
3	私の人生は運命によって定められるところが多い	2.57	1.07
39	どうしようもないことなので、将来について心配しても仕方がない	2.96	1.18
37	物事は変わるので、将来の計画を立てるのは実際には不可能だ	2.93	1.02
53	成功は努力よりも運で決まることが多い	2.89	1.04
全 体		3.30	1.22

注) 項目番号にアスタリスクの付いた項目は逆転項目。  
 評定反応から評定値への数値変換 (得点化) は以下のとおりである。  
 全くあてはまらない=1  
 あてはまらない=2  
 どちらでもない=3  
 あてはまる=4  
 よくあてはまる=5

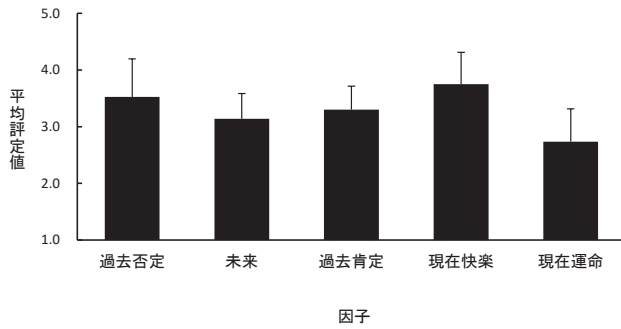


Figure 4

ジンバルドー時間的展望尺度 (ZTPI) の因子別平均評定値  
(エラーバーは 1 標準偏差を示す)  
(清水 (2020) の Figure 2 を一部修正して再掲)

= 56.15,  $p > .001$ ,  $\eta_p^2 = .317$ ]. 因子間で平均評定値の差を見てみると、平均評定値の高いものから、順に、「現在快樂」、「過去否定」、「過去肯定」、「未来」、「現在運命」であった。すべての平均評定値の間に有意差が認められた [ $ps < .05$ ]. したがって、本研究における実験参加者の全体的な時間的展望の特徴として、ZTPI への回答の結果から、快樂的で向こう見ず

な態度をとったりすることが相対的に多く、次いで、自己の一貫性に対して否定的に捉える傾向にあることがうかがわれる。それらに比べて、自己を肯定することや将来の目標や見返りのために努力することはまれであるが、運命を受け入れるといった無力感を伴った態度に終始しているわけではないことが示された。

### 改訂版ウエクスラー記憶検査 (WMS-R) の成績・予測とジンバルドー時間的展望尺度 (ZTPI) の因子別項目評定値との相関

WMS-R の 4 つの下位検査における直後成績、遅延成績、遅延成績予測および遅延成績予測の正確度に関する各指標と、ZTPI の 5 因子における因子別平均評定値との間の相関係数を算出し、Table 4 に示す。WMS-R の各指標と ZTPI を構成する 5 因子の平均評定値の間の相関関係について、有意水準 5% 以下の相関を示す部分を中心に見ていくと、次のようになる。すなわち、(a) WMS-R の直後成績では、「論理的記憶」と ZTPI の「現在運命」との間で有意な負の相関が見られた。(b) WMS-R の遅延成績では「視覚性対連合」と ZTPI の「現在運命」との間、「言語性

Table 4

改訂版ウエクスラー記憶検査 (WMS-R) の成績・予測と  
ジンバルドー時間的展望尺度 (ZTPI) の因子別項目評定値との相関

WMS-R	ZTPIの因子				
	過去否定	未来	過去肯定	現在快樂	現在運命
直後成績					
論理的記憶	-.071	-.002	.003	-.032	-.217*
視覚性対連合	-.123	-.017	-.008	-.036	-.140
言語性対連合	-.166	.012	-.064	-.092	-.154
視覚性再生	-.058	-.162	.078	-.152	-.158
遅延成績					
論理的記憶	-.087	-.024	.042	-.037	-.163
視覚性対連合	-.122	-.119	-.019	-.103	-.217*
言語性対連合	-.023	-.040	-.019	-.245**	-.118
視覚性再生	.025	-.075	-.083	-.264**	-.004
遅延成績予測					
論理的記憶	-.169	.075	.051	.090	-.180*
視覚性対連合	-.202*	-.089	.033	.043	-.074
言語性対連合	-.113	.042	.022	.102	-.077
視覚性再生	-.047	.126	.142	.190*	-.001
遅延成績と遅延成績予測との差					
論理的記憶	.083	-.088	-.012	-.113	.031
視覚性対連合	.186*	.061	-.033	-.087	-.012
言語性対連合	.105	-.050	-.026	-.154	.048
視覚性再生	.053	-.145	-.164	-.280**	-.001

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

対連合」と「現在快樂」との間、「視覚性再生」と「現在快樂」との間でそれぞれ有意な負の相関が見られた。(c) WMS-R の遅延成績予測では「論理的記憶」と「現在運命」との間、「視覚性対連合」と「過去否定」との間でそれぞれ有意な負の相関が見られたのに対し、「視覚性再生」と「現在快樂」との間で有意な正の相関が見られた。(d) WMS-R における遅延成績と遅延成績予測との差については、「視覚性対連合」と「過去否定」との間で有意な正の相関が見られたのに対し、「視覚性再生」と「現在快樂」との間で有意な負の相関が見られた。

## 考 察

本研究は、標準化された記憶検査課題における予測の正確さと日常生活場面における時間的展望との関係を明らかにするために、大学生 122 名を対象に、WMS-R と ZTPI の両方を実施した。WMS-R については、直後検査のあとに遅延検査成績の予測を求め、下位検査ごとに直後成績と遅延成績だけでなく、遅延成績の予測と ZTPI の因子別評定値との相関関係について分析を行った。

そうした分析に先立って、WMS-R の成績に関する結果によれば、本研究における検査成績は、13 の下位検査のうち 7 つの下位検査において標準データよりも有意に高かった。また同様に、「注意／集中力」を除くすべての指標得点においても、標準データよりも有意に高かった。したがって、本研究の実験参加者は全体として、WMS-R が標準化されたときのほぼ同じ年齢層の参加協力者に比べて記憶能力が優れていることを前提に、本研究の結果を捉えておく必要がある。さらに、本研究の場合、一般的な WMS-R の検査手続きとは異なり、直後検査のあとに遅延検査成績を予測するよう求めた。そのため、こうした予測を求めたこと自体が「10. 論理的記憶Ⅱ」から「13. 視覚性再生Ⅱ」までの 4 つの下位検査成績および「遅延再生」の指標得点に有利に働いた可能性が考えられる。

本研究の結果、記憶検査課題における成績・予測と日常生活場面における時間的展望との関係に関して、得られた主要な知見は重要なものから順に、次の 4 点にまとめることができる。

(1) WMS-R における遅延成績と遅延成績予測との差については、「視覚性対連合」と「過去否定」との間でのみ有意な正の相関が見られたのに対し、「視覚性再生」と「現在快樂」との間でのみ有意な負の相関が見られた。

(2) WMS-R の「論理的記憶」の遅延成績予測と ZTPI の「現在運命」との間、「視覚性対連合」と「過去否定」との間でそれぞれ有意な負の相関が、「視覚性再生」と「現在快樂」との間で有意な正の相関が見られた。

(3) WMS-R の「視覚性対連合」の遅延成績と ZTPI の「現在運命」との間で、「言語性対連合」の遅延成績と「現在快樂」との間で、「視覚性再生」と「現在快樂」との間で、いずれも有意な負の相関が見られた。

(4) WMS-R の「論理的記憶」の直後成績と ZTPI の「現在運命」との間に有意な負の相関がみられた。

以上の 4 点について考察を進めていく。上記 (1) より、全般的に WMS-R の 4 つの下位検査における実際の遅延成績と遅延成績の予測の正確度と ZTPI を構成する 5 因子の評定値との間にはほとんど相関が見られなかった。ただし、WMS-R の「視覚性対連合」において遅延成績の予測の正確度は ZTPI の「過去否定」と有意な正の相関があることが示された。ここでの予測の正確度の指標は、実際の遅延成績と予測値との差なので、0 に近いほど、より正確な予測がなされていることになる。したがって、時間的展望に関連して、自己の一貫性や連続性における否定的な側面を強く捉える態度をもっている者ほど、記憶検査のなかで視覚材料の対連合学習に関する下位検査において遅延成績の予測が不正確であることが明らかになった。

一方、WMS-R の「視覚性再生」において遅延成績の予測の正確度は ZTPI の「現在快樂」との間で有意な負の相関が見られた。すなわち、時間的展望に関連して快樂的で危険を好み、向こう見ずな態度をもっている者ほど記憶検査のなかで幾何学図形の描画再生に関する下位検査において遅延成績の予測が正確であることが示された。

おそらく基本的に、記憶検査場面で遅延成績を正確に予測することに関連したメタ記憶能力と、日常生活場面での時間的展望に関する個人傾向とはほとんど関係がないことがうかがわれる。しかしながら、下位検査別の遅延成績の予測の正確度と時間的展望の因子別評定値との間で、一部に相関関係が見られたことは、記憶検査の下位検査の性質によるものかもしれない。WMS-R の遅延成績は直後成績と同様に、「論理的記憶」以外の 3 つの下位検査はいずれも天井効果を示している (Figure 1 参照)。このことから、それら 3 つの下位検査は、直後検査でも遅延検査でも本研究の実験参加者にとっては、非常に難易度の低い検査課題になっていたといえる。そのため、上記 (2) の研究結果のうち、「視覚性対連合」の遅延成績の予測値と ZTPI の「過去否定」との間で有意な負の相関が見られ、「視覚性再生」の遅延成績の予測値と「現在快樂」との間で有意な正の相関が見られたことが直接、遅延成績の予測の正確度に反映されたと考えられる。つまり、WMS-R の「視覚性対連合」において遅延成績の予測の正確度と ZTPI の「過去否定」と有意な正の相関が見られたことは、時間的展望に関して「過去否定」の傾向が強い者ほど、視覚材料の対連合学習に関する遅延成績を低めに予測し



ていたと推測できる。一方、WMS-R の「視覚性再生」の遅延成績の予測値と「現在快楽」との間で有意な正の相関が見られたことは、時間的展望に関して「現在快楽」の傾向が強い者ほど、幾何学図形の描画再生に関する遅延成績を高めて予測していた可能性が高い。

上記 (2) の研究結果のうち、「論理的記憶」の遅延成績の予測値もまた「現在運命」との間で有意な負の相関が見られた。つまり、人生は運命で決まっているなどの無力感を伴った態度をもっている者ほど、文章材料の逐語的な記憶が苦手であるという自覚がもっていることがうかがわれる。この場合、「論理的記憶」の直後成績にも遅延成績にも天井効果が認められないことから、遅延成績の予測の予測値にそのまま、遅延成績予測の正確度に反映されることはなかった。したがって、「論理的記憶」の遅延成績の予測は、予測の正確度には直接反映されず、単に遅延成績を低めに見積もっていたことだけが結果に表れていると考えられる。

これらの相関分析の結果は、日常生活場面での時間的展望と記憶能力の自己評価の関係に関する先行研究の結果と符合している。すでに述べたように、清水 (2018b) は ZTPI と CFQ を用いて両者の関係を検討したところ、ZTPI の「過去否定」と CFQ の「うっかり、ぼんやりの失敗」、「検索失敗」および「約束の失敗」との間で有意な正の相関が見られた。その結果から、時間的展望において総じて過去を否定的・悲観的に捉えがちで自らの努力の価値や成果を低く見積もるといった傾向は、日常生活のさまざまな回想記憶や展望記憶に関する記憶能力の乏しさの自覚と結びついていることが示唆された。清水 (2020) は ZTPI と MAQ を用いて検討したところ、ZTPI の「現在快楽」と MAQ の「頭から離れない記憶、回想的想起、無意図的想起」との間で有意な正の相関が見られた。これらの先行研究の結果を考え合わせると、ZTPI の「過去否定」および「現在快楽」の傾向の強さは、日常生活場面での記憶能力の自己評価と同様に、記憶検査場面での特定の下位検査の成績予測と結びついていることが示唆される。

上記 (3) と (4) の結果は、いずれも実験参加者のメタ記憶に基づく成績予測とは関係せず、ZTPI の結果に反映される時間的展望の傾向と実際の記憶成績との関連性を示すものである。上記 (3) の結果では、WMS-R の遅延成績と ZTPI において「視覚性対連合」と「現在運命」、「言語性対連合」と「現在快楽」、「視覚性再生」と「現在快楽」との間で、いずれも有意な負の相関が見られた。すでに見てきたように、WMS-R の「視覚性対連合」と「言語性対連合」と「視覚性再生」の 3 つの下位検査は、一般の大学生にはかなり難易度の低い検査課題である。にもかかわらず、ZTPI への評定結果から「現在快楽」や「現在運命」の傾向の強い者は、これらの遅延成

績が低くなることが示された。このことはおそらく、実験参加者の記憶自己効力感 (memory self-efficacy) と深く関係していると考えられる。一般に自己効力感とは、自らが行為主体であると認識し、自己の行為を統制できるという信念をもち、外部からの要請に対応していると確信することに関連した概念であるが (Bandura, 1989, 1997)。とくに記憶に関する自己効力感とは、記憶自己効力感と呼ばれる。Beaudoin & Desrichard (2011) はメタ分析により、実際の記憶課題成績と記憶自己効力感との間の相関の平均は低いながらも有意であること ( $r = .15$ ) を示している。ZTPI の「現在快楽」や「現在運命」が記憶自己効力感と関係し、こうした ZTPI の傾向の強い者ほど、遅延検査のときに比較的早めに課題遂行をあきらめるなど、十分に自己の記憶能力を発揮しなかった可能性が考えられる。

上記 (4) より、WMS-R の直後検査では「論理的記憶」と ZTPI の「現在運命」との間にのみ有意な負の相関がみられた。全体として、検査課題が与えられた直後に再生や再認などの反応が求められる場合では、日常生活の時間的展望に関する態度と検査成績とは関係しないことが明らかになった。下位検査「論理的記憶」で測定される、文章材料の逐語再生の能力には、時間的展望に関する宿命観や無力感などが関連しているという結果は興味深い。もしかしたら、この「論理的記憶」で採用された 2 つの文章材料 (一つは金銭強奪の被害に関する記述文、もう一つは交通事故の被害に関する記述文) がどちらも個人の災難に関するエピソードを取り上げたものであることと関係しているのかもしれない。これについては、あくいまで推測の域を出ない。

以上のように、標準化された記憶検査の成績・予測と時間的展望とは、一定程度の関係があることが明らかになった。WMS-R の特定の下位検査の成績 (直後成績と遅延成績) およびその予測と ZTPI を構成する因子との間にいくつか有意な相関が認められた。今後の課題として、第一に、検査課題の成績に天井効果が生じないような状況のもとで、これらの関係を検討することがあげられる。WMS-R の場合、認知症など記憶について何らかの問題が生じている、または問題が疑われるときに実施されることが多く、健常者では天井効果が現れやすいことが知られている (Wechsler & 杉下, 2001)。しかしながら、その一方で、この検査はさまざまな年齢層 (16 ~ 74 歳) の全 316 人を対象に標準化が行われ、現在、さまざまな臨床現場で広く利用されている。年齢層別の下位検査間の相関などの基礎資料も公表されており、個人の記憶能力を測定するには有用な手段の一つである。したがって、この検査を併用しながら、一般の大学生にとってこれよりも難易度の高い種々の課題を設定して、課題成績の予測の正確度を検討していくことが求められる。



次に、前述の記憶自己効力感に関連して、日常生活場面での記憶能力の自己評価と検査室場面または実験室場面での記憶課題成績との関係を引き続いて検討する必要があると考えられる。特定の記憶課題に対する得意や苦手といった意識と日常生活全般にわたる失敗経験や自己評価とは必ずしも一致しないことが多い。たとえば、ある種の記憶エキスパートの研究（e.g., Takahashi, Shimizu, Saito, & Tomoyori, 2006）やサヴァン症候群の研究（e.g., Miller, 1999）などに見られるように、特定の記憶課題成績が並みはずれてすぐれていたとしても、日常生活に何の問題も生じていないこともあれば、多くの問題を抱えていることもある。したがって、成績予測を含むメタ記憶と実際の記憶行動との関係を実験室場面と日常生活場面の両側面から検討していくことが重要であると考えられる。

### 利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

### 引用文献

- 安藤 清志 (1990). 「自己の姿の表出」の段階 中村陽吉 (編)「自己過程」の社会心理学 (pp.143-198) 東京大学出版会
- Bandura, A. (1989). Regulation of cognitive processes through perceived self-efficacy. *Developmental Psychology, 25*, 729-735.
- Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: Freeman.
- Beaudoin, M., & Desrichard, O. (2011). Are memory self-efficacy and memory performance related? A meta-analysis. *Psychological Bulletin, 137*, 211-241.
- Boniwell, I., Osin, E., Linley, P. A., & Ivanchenko, G. V. (2010). A question of balance: Time perspective and well-being in British and Russian samples. *Journal of Positive Psychology, 5*, 24-40.
- Boniwell, I., & Zimbardo, P. G. (2004). Balancing time perspective in pursuit of optimal functioning. In P. A. Linley & S. Joseph (Eds.), *Positive psychology in practice* (pp. 165-178), Hoboken, NJ: Wiley.
- Broadbent, D. E., Cooper, P. F., FitzGerald, P., & Parkes, K. R. (1982). The Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) and its correlates. *British Journal of Clinical Psychology, 21*, 1-16.
- Dixon, R. A., & Hultsch, D. F. (1983). Structure and development of the Metamemory in Adulthood scale. *Journal of Gerontology, 38*, 682-688.
- Dixon, R. A., Hultsch, D. F., & Hertzog, C. (1988). The Metamemory in Adulthood (MIA) questionnaire. *Psychopharmacology Bulletin, 24*, 671-688.
- Drake, L., Duncan, E., Sutherland, F., Abernethy, C., & Henry, C. (2008). Time perspective and correlates of wellbeing. *Time & Society, 17*, 47-61.
- Jones, E. E., & Berglas, S. (1978). Control of attributions about the self through self-handicapping strategies: The appeal of alcohol and the role of underachievement. *Personality and Social Psychology Bulletin, 4*, 200-206.
- 金城 光・井出 訓・石原 治 (2013). 日本版成人メタ記憶尺度 (日本版 MIA) の構造と短縮版の開発 認知心理学研究, 11, 31-41.
- 楠見 孝 (1991). 「心の理論」としてのメタ記憶の構造: 自由記述, 記憶のメタファに基づく検討. 日本教育心理学会第 33 回総会発表論文集, 705-706.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science: Selected theoretical papers*. New York: Harper and Brothers. (猪股佐登留 (訳) (1979). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- Merton, R. K. (1957). *Social theory and social structure*. New York: Free Press. (森 東吾・森 好夫・金沢 実・中島 竜太郎 (訳) (1961). 社会理論と社会構造 みすず書房)
- Miller, L. K. (1999). The savant syndrome: Intellectual impairment and exceptional skill. *Psychological Bulletin, 125*, 31-46.
- Nelson, T. O., & Narens, L. (1990). Metamemory: A theoretical framework and new findings. In G. H. Bower (Ed.), *The psychology of learning and motivation*, Vol. 26 (pp.125-173). Academic Press.
- 清水寛之 (2012). 記憶 箱田裕司 (編) 心理学研究法 2 認知 (pp.47-96) 誠信書房.
- 清水寛之 (2013). メタ記憶 日本認知心理学会 (編) 認知心理学ハンドブック (pp.154-155) 有斐閣
- 清水寛之 (2018a). 日常場面におけるメタ記憶と時間的展望－日常記憶質問紙 (EMQ), 成人メタ記憶尺度 (MIA), および時間的展望尺度 (ZTPI) による分析－人文学部紀要 (神戸学院大学人文学部), 38, 103-120.
- 清水寛之 (2018b). 日常生活場面における認知的失敗行動の自己評価と時間的展望－認知的失敗質問紙 (CFQ) とジンバルドー時間的展望尺度 (ZTPI) の関係－神戸学院大学心理学研究, 1, 33-41.
- 清水寛之 (2020). 日常生活場面における記憶能力の自己評価と時間的展望の関係－記憶能力質問紙 (MAQ) とジンバルドー時間的展望尺度 (ZTPI) の関係－神戸学院大学心理学研究, 3, 31-41.
- 清水寛之・高橋雅延・齊藤 智 (2006). 日常記憶に関する自己評価の分析－メタ記憶質問紙による検討－心理学研究, 77, 366-371.

- 清水寛之・高橋雅延・齊藤 智 (2007). メタ記憶質問紙を用いた日常記憶に関する自己評価－日常記憶質問紙, 認知的失敗質問紙, 及び記憶能力質問紙の標準データと因子構造－ 人文学部紀要 (神戸学院大学人文学部), 27, 143-166.
- 下島裕美・佐藤浩一・越智啓太 (2012). 日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) の因子構造の検討 パーソナリティ研究, 21, 74-83.
- Sunderland, A., Harris, J. E., & Baddeley, A. D. (1983). Do laboratory tests predict everyday memory? A neuropsychological study. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 22, 341-357.
- Sunderland, A., Harris, J. E., & Baddeley, A. D. (1984). Assessing everyday memory after severe head injury. In J. E. Harris & P. E. Morris (Eds.), *Everyday memory, actions, and absentmindedness* (pp.193-212). London: Academic Press.
- Takahashi, M., Shimizu, H., Saito, S., & Tomoyori, H. (2006). One percent ability and ninety-nine percent perspiration: A study of a Japanese memorist. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 32, 1195-1200.
- Wechsler, D.A. (1945). A standardized memory scale for clinical use. *Journal of Psychology*, 19, 87-95.
- Wechsler, D.A. (1987). *Manual for the Wechsler Memory Scale-Revised*. New York: Psychological Corporation.
- Wechsler, D., & 杉下守弘 (2001). 日本版ウエクスラー記憶検査法 (WMS-R) 日本文化科学社
- Zimbardo, P. G., & Boyd, J. N. (1999). Putting time in perspective: A valid, reliable individual-differences metric. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1271-1288.

—2021.9.2 受稿 2021.11.2 受理—

# 高齢者の忘却に関する認識の特徴

## ——半構造化面接による検討——

堤 聖月 神戸学院大学心理学部

**Characteristics of recognition about forgetting in older adults through semi-structured interviews.**

*Mizuki Tsutsumi (Department of Psychology, Kobe Gakuin University)*

本研究では、半構造化面接を用いて語りの中から高齢者のもつ忘却に関する認識を明らかにすることを目的とし、面接データを量的に整理して探索的に検討した。調査協力者は65～70歳の高齢者5名であった。調査協力者は「忘れることはあまり良くないと思うけど」と前置きしつつも、総じて必要な精神機能であると概ね肯定的に語っていた。記憶方略については外的記憶方略について語ることが多く、予定や約束といった展望記憶の失敗を避けようとする傾向があった。一方で、忘却を自然現象ととらえており意図的に統制しようとはしない傾向があることが示唆された。これまで高齢者の記憶の自己評価に関する研究では、一貫した研究結果がみられていなかった。高齢者大学校に通う高齢者を対象とした本研究では、加齢による記憶能力の低下は年齢を重ねれば当然であるとうまく折り合いをつけている可能性が示唆された。

キーワード：忘却に関する認識、高齢者、半構造化面接、テキストマイニング、記憶の自己評価

Kobe Gakuin University Journal of Psychology  
2021, Vol.4, No.1, pp.13-22

高齢者を対象とした記憶の自己評価に関する研究は、国内外問わず数多く報告されている。たとえば、記憶力の低下は中年期以降にとって重要な出来事として認識されている(金城・清水・鈴木・田村, 2018)、日常生活において高齢者の多くが「人名を忘れる」、「しようと思っていたことをし忘れる」といった記憶愁訴を抱いている(岩佐他, 2005)などが挙げられる。島内・佐藤(2020)は高齢者の記憶に対する自己評価と精神的健康の関連を指摘しており、高齢者にとって暮らしやすい社会の在り方や生活の質の向上を考えるうえで、記憶の自己評価に関する問題への取り組みは必要不可欠であると考えられる。

Lineweaver & Hertzog (1998) は18～93歳までの人々を対象に記憶と加齢に関する一般的な知識や信念を調査し、記憶機能の一般的变化に関しては、若齢者から高齢者まで共通して、加齢によって記憶能力が低下すると考えていることを示した。金城・清水(2012)はこれとほぼ同様の調査を行い、類似した結果を報告している。また、高齢者は自らの記憶能力について、若齢者と比べて、(a) 新しい

事柄を学習することが不得意である、(b) 自らの記憶能力は加齢とともに低下している、(c) 自らの記憶能力の低下はどうにもならないと感じることが多い、と悲観的な見方をしている(Hultsch, Hertzog & Dixon, 1987)。

一方で、清水・高橋・齊藤(2014)や清水・金城(2015)では、高齢者は自らの記憶に関連した失敗に対して楽観的な見方をしていることを報告している。このように高齢者の記憶能力の自己評価についての研究結果は一貫しているとはいえない。その理由の一つとして、高齢者のおかれている環境の多様性が挙げられる。高齢者を取り巻く環境は個人差が大きく、社会活動への参加状況や教育歴、既往歴などさまざまな要因が影響していると考えられる。島内・佐藤(2010)は、高齢者において長期間の知的活動への参加の有無が記憶に対する自信に影響している可能性があるとして述べている。そのため、高齢者の中でどのような集団を対象に調査を行ったかが記憶の自己評価の研究においては重要であると考えられる。記憶活動には、覚えることや思い出すことだけで

なく、忘れることも含まれる。忘却とは一般に、過去に経験したことや学習したものを一時的または永続的に、減退ないしは喪失することである。忘却はネガティブなものとしてとらえられることが多いが、重要な情報だけを残して新しい情報を記録するために必要な機能であり、記憶活動の一側面である。日常生活の中での忘却は、振り返ってみると深く思い出せない、というように意図せず起こることもあれば、忘れたい、思い出さないようにしたいと意図的に起こそうとすることもある。

日常生活の中で起こる無意図的な忘却に関して、Naka & Maki (2006) は大学生を対象に調査を行い、日常生活のなかで、「これまで忘れていたが今は思い出せる」というようなことがあると信じており、そうした経験をしているほど記憶の抑圧や回復を信じる傾向があることを報告している。また、堤(2020)は、自己の忘却に関する主観的な評価や信念をまとめて「忘却に関する認識」とし、高齢者と若齢者で忘却に関する認識に違いがみられるかを心理尺度と自由記述式の質問紙調査を用いて検討している。その結果、自らの意図的あるいは無意図的な忘却に対する評価は加齢による影響はみられないが、忘却に対する印象はポジティブ・ネガティブ問わず高齢者のほうが高く評価していることが示唆された。また、高齢者は自己の忘却を加齢による一般的な現象として受容的な見方をしていることが示された。

しかしながら、自由記述を用いた質問紙調査では、書かれた内容についてさまざまな解釈が可能であり、答えた背景や理由について深く検討することがむずかしい。また、心理尺度では自由記述と比べて解釈が制限されるものの、事前に設定した質問項目以外ではわからないという特徴がある。そこで本研究では、高齢者のもつ忘却に関する認識について、半構造化面接を用いて検討する。半構造化面接とはあらかじめ大まかな質問項目だけを定めて、面接協力者の回答によって質問の仕方を変えたり、さらに細部まで質問を続けていく手法である。面接法は、質問紙では回答しにくい内容を尋ねる場合に適している。本研究で対象とする高齢者は、視力や筆記能力の低下により質問紙への回答が困難な場合がある。そのため、半構造化面接による調査が有用であると考えられる。

面接調査で得られた発言に対して、テキストマイニングソフトウェア (KH Coder) の共起ネットワーク分析と対応分析を用いて、調査協力者の回答の傾向を検出し、高齢者のもつ忘却に関する認識を探索的に検討する。面接調査で得られた内容の分析手法にテキストマイニングを採用した理由として、従来の質的研究法では分析者個人の経験や考えが結果に影響する可能性を排除できない点が挙げられる。テキストマイニングでは質的データを量的データに置き換えることと、分析・解釈のプロセスを明示する

ことができるため、信頼性と妥当性を確保することが可能である。また、量的データに置き換えることでさまざまな統計的検討が可能となる。

本研究の調査対象は高齢者であり、現在に至るまでのそれぞれの来歴が大きく異なる。加えて面接法を用いており、調査協力者の人数が少数である。そのため、本研究のデータをもって一般化した理論の生成を目指すよりも、個人差を加味したうえで、高齢者の忘却に関する認識について探索的に検討することが適切であると思われる。テキストマイニングは、データの全体像や概観を描くのに適している手法である (樋口, 2014)。そこで、本研究ではテキストマイニングを用いて分析を行う。

## 方法

### 調査期間

調査は 2018 年 3 月に実施された。

### 調査協力者

兵庫県にある高齢者大学校に通う 5 名が本調査に参加した。調査協力者の属性は Table 1 に示す。この学校は市内に住む 57 歳以上の人たちを対象に総合芸術や健康福祉などの授業科目を提供しており、修業年限は 3 年である。調査参加者の教育水準はさまざまだが、学校側から本調査に対して、年齢と性別以外の個人情報に関する質問項目は設定しないでほしいとの要望があったため、面接中に調査協力者が自ら話した属性以外はたずねていない。調査協力者のなかには日常生活上特に深刻な問題を抱えているものはいなかった。また、調査協力者と調査者は、調査前からの関わりはなかった。

Table 1 調査対象者の属性

	年齢	性別
A	69	女性
B	66	男性
C	65	女性
D	69	女性
E	70	男性

### 調査場所

調査協力者の所属する高齢者大学校の一室で行われた。落ち着いた雰囲気の中で安心して実施できるように、学生が過ごす教室からは離れた場所で、一般の学生や教職員には面接内容が聞こえることがないよう配慮された状態で実施された。



## 手続き

日常生活で経験する忘却に関する現象をどのように考えているかについて半構造化面接を行った。調査協力者には事前に本調査の趣旨と面接の様子を記録することを説明し、承諾を得てから実施した。面接の様子は、調査者によるメモとICレコーダーで記録した。面接時間は15分から40分であり、平均27.4分であった。調査協力者の発言の文字数は1856文字から6031文字で、平均文字数は4824.8文字であった。

## 面接内容

調査協力者に「今から、普段の生活の中での記憶力や忘れることについて、日頃感じたり考えたりしていることについて伺います。」と始めに教示し、Table 2の質問項目を聞きながら語ってもらった。質問項目の内容は、堤（2017, 2020）を参考に作成した。本調査では調査協力者が自発的に語り始めた場合は制止せず、自由な対話が行われるように配慮した。

## 倫理的配慮

本研究は、神戸学院大学人を対象とする研究等倫理審査委員会の承認を得た上で行われた（承認番号SEB17-68）。

調査に先立ち、調査協力者の所属する高齢者大学校に対して本研究の研究計画書および研究参加に関するさまざまな権利を保障する文書を示し、研究参

加に承諾する文書を研究者との間で取り交わした。面接に入る前に調査協力者にも同様の文書を提示し、本研究の趣旨について理解を得た上で、本研究への参加協力に同意する文書を研究者との間で取り交わした。

研究への参加を承諾する文書には、(a) 面接調査への参加は個人の自由意思によるもので、参加しなくても不利益を受けないこと、(b) 調査への協力を撤回、中止した場合でも不利益を被ることはないこと、(c) 本調査によって得られたデータは学術雑誌などで公表されることがあるが、その場合も協力者の個人情報厳格に保護され、個人を特定する情報は公表されないこと、(d) 面接中または終了後に本調査に関して疑問が生じたときはすぐ連絡し、適切な対応・措置が受けられることが記載されていた。

これらについて、研究者と調査協力者の両名の署名入りの同一の同意書が2通作成され、双方が1通ずつ保管するという手続きが取られた。また、面接の最後に、面接中の内容で研究に使用されたくない箇所はあるかを調査協力者に確認してから終了した。

## 分析方法

面接内容を逐語録化したものをデータとし、以下の手順で分析を行った。分析の前に、ほぼ同義であるが表現の違いのある語を統一した（例：ノート、メモ帳→「メモ」）。次に品詞別に単語を抽出し、単独では意味をもたない感動語の「ああ」や未知語の「A」などを除き、全調査協力者のデータにおける特徴語の算出と、共起ネットワーク分析を行った。続

Table 2 面接で行った質問項目

### 日常での自身の忘却傾向

- ・自分が何かを忘れていたというのを自覚するのはあるか、それはどのような場面か
- ・どのようなことを自分は忘れやすいと感じるか

### 忘却への統制感

- ・なかなか忘れられないと感じることはあるか、それはどのような内容か
- ・覚えておきたいと思っていることは覚えていられるか
- ・忘れないようにするために何かしていることはあるか
- ・忘れたいと思っていることは忘れられているか
- ・忘れるために何かしていること、心がけていることはあるか

### 忘却の指示性、感情

- ・忘れるということは人にとって良いことか悪いことか
- ・自分が何かを忘れていたことに気付いたときにはどのような気分になるか
- ・忘れるということは人にとってどんなはたらきをもっていると思うか
- ・もし、必ず忘れることができるようになったらそれを行いたい

けて質問のカテゴリごとに対応分析を行い、調査協力者に応じた回答の傾向の差異を探った。テキストマイニングを用いた分析を行うにあたり、元のテキストに戻って確認を行う必要性が唱えられていることから(樋口, 2012)、本研究においても適宜、逐語録や語りをまとめたものを確認しながら解釈を試みた。

## 結果

### 忘却に関する認識の面接データの概要

高齢者における忘却に関する認識の概要を把握するために、調査協力者すべての面接データに対する共起ネットワーク分析を行った。Jaccard 係数が大きい順に上位 50 の共起関係を描画した (Figure 1)。Jaccard 係数は二つの文章集合に含まれている単語のうち共通語が占める割合であり、0 から 1 の値を取る。線上に示された係数が大きいほど二つの文章は類似していると解釈される。描画における最小 Jaccard 係数は 0.1 であった。また、円の大きさは単語の出現数の多さを表している。Figure 1 に示すように、忘却に関する認識の面接の概要として七つのサブグラフが検出された。本研究では単語の繋がりが多い四つのサブグラフに注目する。

左上に位置しているサブグラフは「思う」を中心に、「自分」「今」「人」「忘れる」「覚える」などの単語で構成されていた。これらの特徴語とした文章の文脈を確認すると、忘れやすい内容を中心とした日常での自身の忘却傾向の語りがみられた。

中央下のサブグラフは「嫌」を中心に「気持ち」「忘れない」「忘れられない」「思い出す」などの単語で構成されていた。文脈を確認すると、忘却へのネガ

ティブな認識の側面として、忘りたいことや忘れられないことがあり、そうした内容について感情を伴い語る様子がみられた。

右上のサブグラフは、「書く」を中心に、「日記」「確認」「手帳」「メモ」などの語で構成されていた。文脈を確認すると、日記や手帳、メモなどに書いてそれを確認するという外的記憶方略について語られていた。

右下のサブグラフは、「思い出せる」「楽しい」「過去」「大事」「経験」「若い」などの単語で構成されていた。文脈を確認すると、過去の経験や楽しかったことを思い出せなくても気にしないという楽観的な語りがみられた。

### 各調査協力者の忘却に関する認識の探索的分析

次に、調査協力者それぞれの回答の傾向を検討するために、面接データを質問のカテゴリ(日常での自身の忘却傾向、忘却への統制感、忘却の指示性・感情)ごとに分け、それぞれに対応分析を行った。出現頻度が 5 回以上の単語を分析の対象とした。対応分析では、単語と各調査協力者の配置を見ることで、調査協力者同士の語りの内容の似通った点や、各調査協力者の特徴を読みとることができる。原点(0, 0)から離れており、調査協力者の近くに布置されている語は、その調査協力者の語りに特に多く出現していたことを示す。一方で原点付近にはどの調査協力者の語りににもみられた特徴のない単語が集まる。結果の解釈のために調査協力者の語りを要約し表にしたものを、Table 3 ~ Table 5 に示す。語りの内容の抜粋は心理学を専攻する大学院生 3 名で行い、分析者個人の考えや経験により抜粋する内容が偏らないように配慮した。

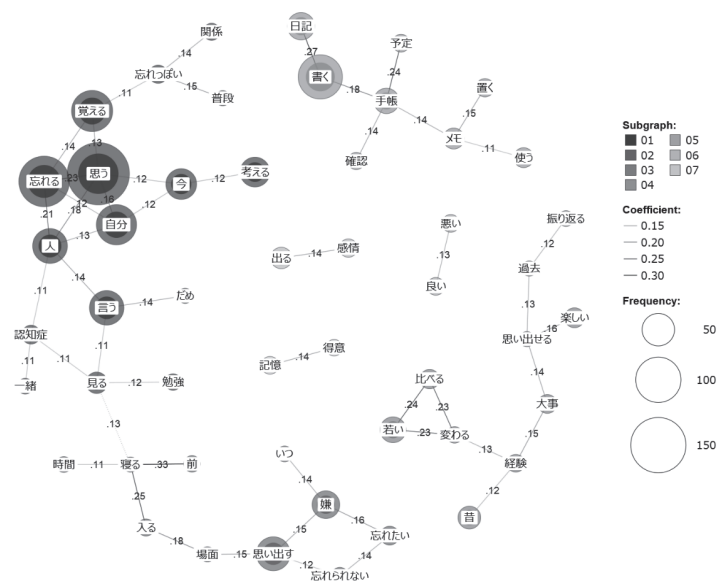


Figure 1 全協力者の面接データに対する共起ネットワーク分析の結果

Table 3 高齢者の「日常での自身の忘却傾向」についての語りの内容

	忘れやすい内容	忘れられない内容
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日付や曜日，時間など予定に関すること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・過去のネガティブな経験</li> <li>・昔行った旅行先での出来事の細部</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の催し物や授業関係などやらなければならないこと</li> <li>・予定の優先順位</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・良い，悪いのない昔の出来事</li> <li>・忘れられないことについて深く考えたことがない</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人の名前</li> <li>・物の置き場所</li> <li>・記念日などの予定に関すること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校時代の受験に関すること</li> <li>・恥をかいた経験</li> <li>・嫌な出来事を経験した当時の感情</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メールの返信</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・嫌なことがあったという概要と当時の感情</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人名や地名</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・過去に経験したインパクトのある出来事の印象</li> <li>・過去に他者を傷つけた時の出来事</li> </ul>

Table 4 「忘却への統制感」と「忘却の指示性・感情」についての語りの内容

	忘却への統制感	忘却の指示性	忘却への感情
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意図的に忘れようとしていたので上手ではないと思う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・忘れて困ることもあるが，心も体も楽になる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・忘却はいいか悪いかでいうとあまり良くないと思う</li> <li>・認知症などで嫌な気持ちだけいつまでも覚えているのはつらいだろうと思う</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・嫌なことは時間が解決すると思う</li> <li>・何とかかなと思う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生きている人間が大事だから，どこかの時点で切り替えて徐々に忘れたいといけない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思い出しもしないが，嫌なことは全部忘れたいと思う</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病気ではないので時間経過で自然と忘れていく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・都合のいいことだけを覚えていてそれをつなげて人生にしているみたいところがあると思う</li> <li>・前向きに生きていけると思う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いいことだと思う</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・忘れようとしても無理なので努力はしていない</li> <li>・年齢的に気にしなければと思っている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おなががすいたら食べるのと一緒に自然現象だと思っている</li> <li>・困ったことがないのであまり考えずに生きてきた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大事な約束は忘れてはいけませんが，悪口を言われたとかはどんどん忘れたほうがラッキーかなと思う</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネガティブなことは，そういうこともあるよなあとあまりくよくよししないことにしている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・忘れなきゃならないと思う</li> <li>・忘れることはあまり良くないが，必要だと感じる</li> <li>・忘れる技術が必要だと考えたことがある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・忘れることはあまり良くないが，必要だと感じる</li> </ul>

Table 5 記憶方略と忘却方略についての語りの内容

	記憶方略	忘却方略
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手帳に書く</li> <li>・スマホのスケジュール機能をつかう</li> <li>・カレンダーに書く</li> <li>・卓上のメモ帳にTodoリストを作る</li> <li>・何かあった時だけ日記を書き、たまに眺める</li> <li>・脱衣場や寝る場所ペンとメモ帳を置く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思い出す期限を決めて念じる</li> <li>・人に話す</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手帳に書く</li> <li>・日記は続かなかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間が解決すると思っているので、忘れることについてあまり深く考えていない</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予定を手帳に書く</li> <li>・メモはあまりしない</li> <li>・年単位で忘れることもあるが日記を書くことで出来事を整理する</li> <li>・カレンダーを見る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意図的にしようと思ったことがない</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手帳に書く</li> <li>・メモを必ず見えるような場所に貼っておく</li> <li>・日記は書かない、書くことがない</li> <li>・手帳を朝と寝る前に必ず確認する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・忘れようという努力はしない</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手帳に書いて決まった時間に毎日確認する</li> <li>・日記を書く（去年から書き始めた）</li> <li>・他人と共有することはカレンダーに書く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔は忘れなければならないと思っていたが、今は忘れたいと思うことがない</li> </ul>

「日常での自身の忘却傾向」に関する分析 調査協力者 5 名の面接データのうち、「日常での自身の忘却傾向」に関する質問への回答について、出現頻度が 5 回以上の 15 語を分析の対象とし、対応分析を行った結果を Figure 2 に示す。横軸（成分 1）は調査協力者と語の関係の 46.9% を説明し、縦軸（成分 2）は 38.6% を説明する。布置された単語と文脈から、横軸は語りの内容の主語を示し、正方向が自分に関する内容、負方向が他者に関する内容と解釈した。また、縦軸は記憶方略の使用の有無を示し、負方向は記憶方略に関する語になっていると解釈した。

Figure 2 では、各調査協力者は A は左中部、B は右下、C、D、E は中央上部に布置している。左中部には「書く」「時期」「見る」「手帳」という単語がみられ、文脈を確認すると A は自身の忘却傾向について記憶方略の側面から語っていた。右下には「覚える」「比べる」「周り」という単語がみられ、文脈を確認すると B は忘却傾向について周囲と比較することが多かった。中央上部には、「忘れっぽい」、「自分」、「普段」という単語がみられ、文脈を確認すると C、D、E は日常生活での忘却の頻度の多さについて語っていた。

「忘却への統制感」についての分析 調査協力者 5 名の面接データのうち、「忘却への統制感」に関する

質問への回答について、出現頻度が 5 回以上の 89 語を分析の対象とし、対応分析を行った結果を Figure 3 に示す。横軸（成分 1）は調査協力者と単語との関係の 39.9% を説明し、縦軸（成分 2）は 30.2% を説明していた。布置された単語と文脈から、横軸は忘却を統制したい対象の時間軸の変化を示し、負方向に進むにつれて、過去の事象に関する単語となっていると解釈した。また、縦軸は対象を忘れたいかどうかを示し、負方向は忘れたい出来事や思考に関する語、正方向は忘れたくない出来事や思考に関する語となっていると解釈した。

Figure 3 では、各調査協力者は、A は左上部に、C は右上段に、B、D、E は中央下段付近に布置している。左上部には「具体」「得意」「忘れよう」「忘れたい」「嫌」という単語がみられる。単語の文脈を確認すると A は、過去の出来事について意図的に忘れようとしているが、得意ではないと感じていることを語る傾向があった。右上部には「介護」「育児」「日記」「振り返る」という単語がみられる。単語の文脈を確認すると C は介護や育児など自分の過去の経験を保持しておきたいと考えており、日記を利用することで忘れないようにしようとしていることを語る傾向があった。中央下部付近には、「思い出す」「自然」



「出る」「手帳」などの単語がみられる。B, D, Eは忘れることを自然なことだと捉えているが、手帳などを用いて未来の予定に関しては忘れないようにしていることを語る傾向があった。

「忘却の指示性・感情」についての分析 調査協力者5名の面接データのうち、「忘却の指示性・感情」に関する質問への回答について、出現頻度が5回以上の68語を分析の対象とし、対応分析を行った結果をFigure 4に示す。横軸（成分1）は調査協力者と語との関係の40.4%を説明し、縦軸（成分2）は24.8%を説明する。布置された単語と文脈から、横軸は忘却に対する回避傾向を示し、正から負方向に進むにつれ、忘却を避けたいものとして認識していると解

釈した。また、縦軸は忘却が与える自己への影響の時間軸を示し、負方向は健康を損なうなど現在から未来にかけての自己への影響、正方向は経験した出来事を忘れるなど過去から現在にかけての自己への影響に関する語となっていると解釈した。

Figure 4をみると、Cは左下部に、A, Bは中央上部に、D, Eは右下段に布置している。左下段には「認知症」「忙しい」「健康」などの単語がみられ、文脈を確認するとCは忘却を今後の健康と関連づけ、自身の忘却を自覚するのを避けたいものとして語っていた。中央上部には「大事」「感じ」「嫌」などの単語がみられ、文脈を確認するとAとBは忘却を嫌なものを忘れるために大事なものとして語っていた。

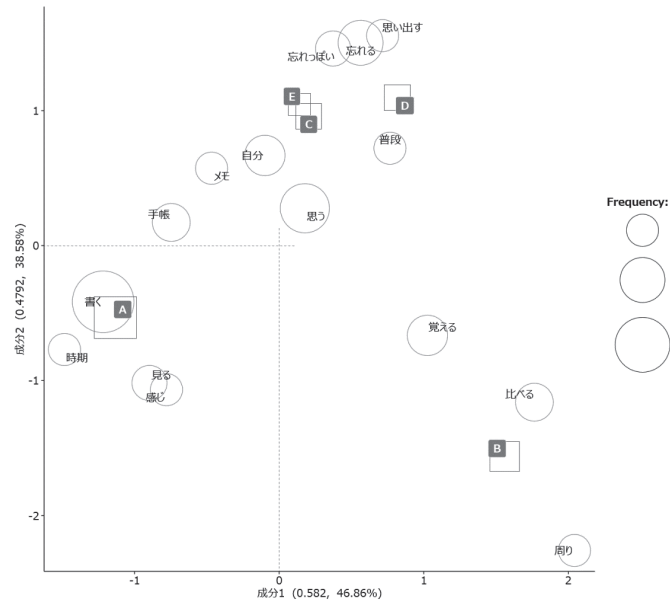


Figure 2 「日常での自身の忘却傾向」についての対応分析

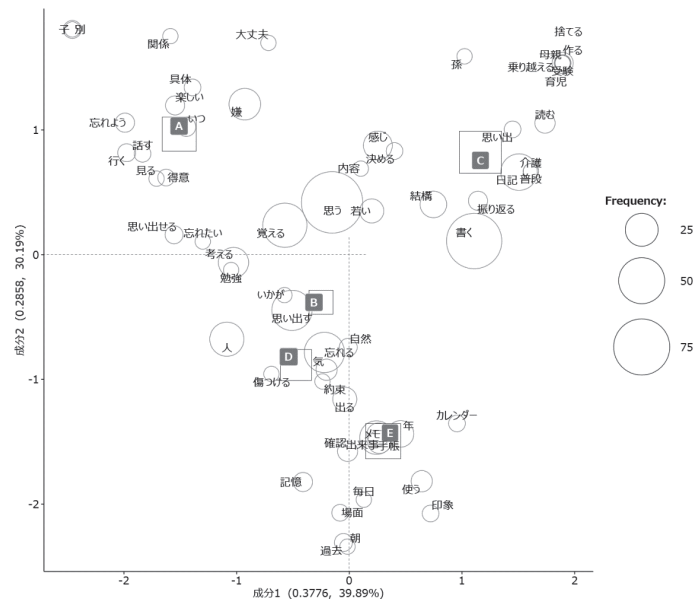


Figure 3 「忘却への統制感」についての対応分析

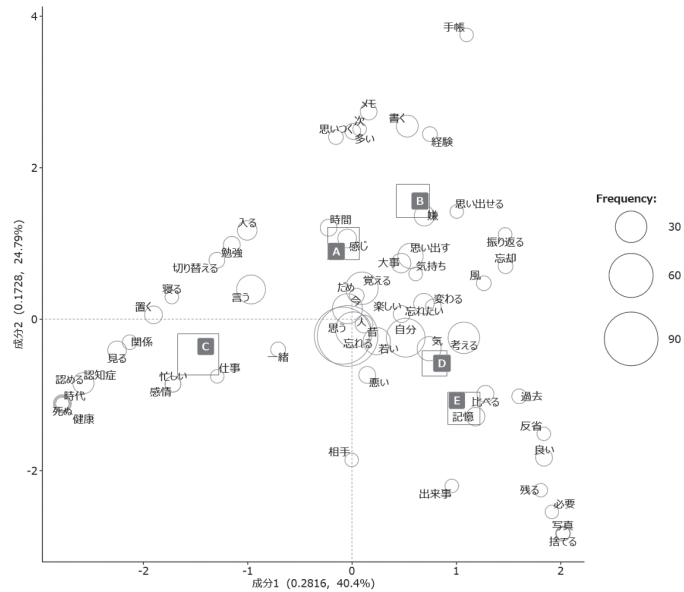


Figure 4 「忘却の指示性・感情」についての対応分析

また、右下段には「比べる」「反省」「過去」という単語がみられ、文脈を確認すると D, E は過去と現在を比較・反省するために過去の出来事についての忘却を回避したいと語っていた。

### 考 察

本研究では半構造化面接を用いて、語りの中から、高齢者のもつ忘却に関する認識の詳細を明らかにすることを目的とし、面接データを量的に整理して探索的に検討した。

面接は、堤 (2017, 2020) を参考にして作成した質問項目にそって行った。面接内容全体に対する共起ネットワーク分析を行った結果、日常での自身の忘却傾向、忘れられない出来事、外的記憶方略、過去を忘れることへの楽観性などについてのサブグラフが検出された。さらに対応分析を用いて、各調査協力者の語りの傾向について検討した。

日常での自身の忘却傾向や忘れられない出来事は、質問項目に含まれているために調査協力者に共通した語りとして、サブグラフが検出されたと考えられる。内容については、調査協力者全員に共通して、忘れやすいと感じるものとして予定や人名を、忘れられないと感じるものとして過去のネガティブな経験を挙げていた。人名や予定は、忘れていたり思い出せないこととして挙げられやすい (岩佐他, 2005)。そのため、忘却に関する認識として語られやすかったと考えられる。人名や予定の話に関連して、カレンダーや手帳、メモなどの外的記憶方略が挙げられることが多かった。高齢者は日常場面での予定や約束の失敗を避けるために、外的記憶方略を頻繁に利用する傾向がある (Dixon, de Frias, & Bäckman, 2001)。このように、高齢者は日常的に自身の忘却による失

敗を避けるための対処しており、忘却についての語りを求めると、記憶方略について浮かびやすいと考えられる。

また、過去の楽しかったことや大事なことの詳細を思い出せなくてもあまり気にしないという楽観的な語りが見られた。近年の日本の研究では、高齢者は自身の記憶に関する失敗に対して楽観的であると報告されている (金敷, 2019; 清水他, 2014)。記憶に関する失敗にさほど注意を払わないだけでなく、過去のポジティブな出来事の詳細についてもこだわらないというのは、加齢に伴い記憶能力は低下するという信念 (Lineweaver & Hertzog, 1998) が影響していると考えられる。高齢者は「加齢に伴い記憶能力が低下する」という信念が強く、過去の出来事の詳細が思い出せなくても「昔のことは詳しく思い出せないものだ」と認識しているのかもしれない。

各調査協力者の語りの傾向としては、A は記憶を統制したいという傾向が大きかった。語りの内容をみると、A は他の調査協力者よりも外的記憶方略を挙げることが多く、唯一忘却方略についても挙げていた。A は忘却のはたらきについて「忘れて困ることもあるが、心も体も楽になる」と述べており、忘却は嫌なことを忘れるための重要な機能だと認識している傾向があった。

B は自身の忘却傾向について周囲と比較しながら語る傾向があった。忘却のはたらきについては、「生きている人間が大事だから、どこかの時点で切り替えて徐々に忘れないといけない」と述べており、忘却について、過去と現在を切り離し、過去に経験した出来事にとらわれることから解放するものだとして認識していた。

C は日記を通して過去の経験を残そうとする傾向があった。C は、「年単位で忘れることもあるが日記

を書くことで出来事を整理する」と語っており、忘れたくない内容を残しておくことで忘却を統制しようとする傾向があった。また、忘却について「都合のいいことだけを覚えていてそれをつなげて人生にしているみたいなどころがあると思う」と語っており、その語りの中で認知症になった家族を例として挙げていた。そのため、Cにとっての忘却とは認知症と強く関連しており、忘却のはたらきをポジティブにとらえている一方で、死や病気といったネガティブなものからも切り離せず、避けたいものとして認識していると考えられる。

DとEは類似した傾向を示していた。忘却への統制感については、Dは「忘れようとしても無理なので努力はしていない」、Eは「ネガティブなことは、そういうこともあるよなあとあまりよくよしないことにしている」と語っており、どちらも忘れたくない内容を忘れることにも、忘れたくない内容を残しておくことにも積極的ではない傾向があった。また、忘却のはたらきについては、過去をふり返ることを妨げるものとして語る傾向があった。しかし、Dは忘却のはたらきについて「お腹が空いたら食べるのと一緒で自然現象だと思っている」、Eは「忘れることはあまり良くないが、必要だと思う」と語っており、過去と現在の自分のつながりに影響を与えることを認識しながらもあまり注意を払っていない傾向があった。

以上のように、本研究では高齢者に対して面接調査を行い、調査協力者ごとの忘却に関する認識を探索的に検討した。調査協力者5名の忘却への統制感はいずれも異なるものの、「忘れることはあまり良くないと思うけど」と前置きしながら、忘却については、総じて必要な精神機能であると概ね肯定的に語っていた。また、5名とも外的記憶方略についての語りが多く、予定や約束などの展望記憶の失敗を避けようとする傾向がある一方で、それ以外については、忘却を自然現象ととらえており意図的に統制しようとはしない傾向があることが示された。

全調査協力者に共通して、忘却の重要性について認識しているにもかかわらず、その役割についてあまりはっきりと語られない傾向がみられた。堤(2017)は大学生を対象に忘却に関する認識について自由記述形式の調査を行っているが、大学生においても、忘却の重要性が支持されている一方でそのはたらきについては具体的な記述は少なかった。これは、忘却の特性として、忘却が進むと忘れたこと自体を忘れるため、日常生活において忘却のはたらきを認識する場面が少ないと考えられる。調査協力者の中には、嫌な出来事を経験した当時の気持ちをあまり思い出さなくなったなどの語りも見られた。ネガティブな出来事や感情が忘却のはたらきを感じる場面としては多いのかもしれない。

本研究では、協力施設の要請により、調査協力者

に対して年齢と性別以外の個人情報に関する質問項目を設定していない。そのため、既往歴、職業などの属性を検討することができなかった。質的調査を通じて高齢者の忘却に関する認識を検討するためには、今後は、より緻密に調査協力者のプロフィールを吟味する必要がある。

また、本研究は5名のデータを対象とした結果であり、高齢者全体にあてはまるとは限らない。島内・佐藤(2010)では、高齢者大学校に所属している高齢者はそうでない高齢者よりも記憶に対する自信が高く、長期間の知的活動への参加が記憶に対する自信に影響する可能性があるとしている。本研究の調査協力者はすべて高齢者大学校に所属している。今後調査協力者の数を増やして、今回得られた結果と同様の忘却に関する認識の特徴が得られるかどうかを確認していく必要がある。

## 利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 引用文献

- Dixon, R. A., de Frias, C. M., & Bäckman, L. (2001). Characteristics of self-reported memory compensation in older adults. *Journal of Clinical and Experimental Neuropsychology*, 23, 650-661.
- 樋口 耕一 (2012). 社会調査における計量テキスト分析の手順と実際——アンケートの自由回答を中心に——石田 基広・金 明哲(編著) コーパスとテキストマイニング (pp. 119-128) 共立出版
- 樋口 耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して——ナカニシヤ出版
- Hultsch, D. F., Hertzog, C., & Dixon, R. A. (1987). Age differences in metamemory: Resolving the inconsistencies. *Canadian Journal of Experimental Psychology*, 41, 193-208.
- 岩佐 一・鈴木 隆雄・吉田 祐子・吉田 英世・金 憲経・古田 丈人・杉浦 美穂 (2005). 地域在住高齢者における記憶愁訴の実態把握——要介護防止のための包括的検診(「お達者検診」)についての研究(3) 公衆衛生誌, 52, 176-185.
- 金敷 大之 (2019). 忘れ物・失くし物に関するメタ認知——物品に関連する記憶の自己評価—— 甲子園大学紀要, 46, 9-12.
- 河野 理恵 (1999). 高齢者のメタ記憶——特性の解明, および記憶成績との関係 教育心理学研究, 47, 421-431.
- 金城 光・清水 寛之・鈴木 雄大・田村 隆泰 (2018).

- 20-90 歳の成人を対象とした年齢と性別による身体的・精神的加齢自覚と受容の時期の比較 明治学院大学 心理学紀要, 28, 1-19.
- Lineweaver, T. T., & Hertzog, C. (1998). Adults' efficacy and control beliefs regarding memory and aging: Separating general from personal beliefs. *Aging, Neuropsychology, and Cognition*, 5, 264-296.
- Naka, M., & Maki, Y. (2006). Belief and experience of memory recovery. *Applied Cognitive Psychology*, 20, 649-659.
- 島内 晶・佐藤 眞一 (2010). 高齢者における記憶の失敗とメタ記憶の関連性——記憶の自信度 (メタ記憶) が虚偽記憶に及ぼす影響—— 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 843.
- 島内 晶・佐藤 眞一 (2020). 高齢者の記憶錯誤——虚記憶及びメタ記憶からの分析と精神的健康との関連—— 体力科学, 69, 193-201.
- 清水 寛之・金城 光 (2015). 成人期における日常記憶の自己評価に関する発達的变化: 日常記憶質問紙 (EMQ) による検討 認知心理学研究, 13, 13-21.
- 清水 寛之・高橋 雅延・齊藤 智 (2014). 高齢者における日常記憶の自己評価——メタ記憶質問紙による検討—— 認知心理学研究, 12, 1-13.
- 堤 聖月 (2017). 忘却に関する認識がネガティブな出来事に及ぼす影響 人間文化 H&S (神戸学院大学人文学会), 42, 43-53.
- 堤 聖月 (2020). 高齢者と若齢者における忘却に関する認識の特徴 老年社会科学, 42, 21-29.

—2021.9.4 受稿 2021.11.2 受理—



# The relationship between temperament of conformity, the belief in a just world, and the practice of COVID-19 countermeasures in Japan

Kazuhisa NAGAYA Department of Psychology, Kobe Gakuin University

The purpose of this study was to examine the impact of individuals' conformity and belief in a just world (BJW) on their practice of countermeasures against the novel coronavirus disease (COVID-19) in Japan. Between April and May 2021, a survey was conducted with students attending a university in Hyogo Prefecture, where COVID-19 was re-emerging. The results of the analysis showed that countermeasures that were easy to assimilate (i.e., wearing masks) were positively and significantly associated with conformity, while countermeasures that were difficult to assimilate (e.g., personally collecting COVID-19-related information) were not associated with conformity. Conversely, there was no relationship between individuals' BJW and their engagement in countermeasures, except for the intention to vaccinate; contrary to an initial prediction, a significant negative correlation was found between these variables among male participants. The reasons for this unexpected finding are discussed, along with the implications of this study's other findings.

**Keywords:** conformity, belief in a just world, countermeasures, COVID-19, intention to vaccinate

Kobe Gakuin University Journal of Psychology  
2021, Vol.4, No.1, pp.23-30

## 1. Introduction

The novel coronavirus (i.e., SARS-CoV-2, which causes the coronavirus disease 2019 [COVID-19]) pandemic has forced individuals to make major changes in their lifestyle. As a result of COVID-19 containment measures, not only has it become more difficult to travel abroad, people worldwide have also been restricted from leaving their homes for non-essential reasons. These unprecedented circumstances have caused individuals to adopt new behaviors, such as wearing masks even when going out for short periods of time, avoiding crowds, and maintaining social distancing in public spaces. The adoption of these countermeasures by all individuals is expected to reduce the spread of the disease and facilitate their return to a pre-COVID-19 lifestyle.

However, the aforementioned countermeasures constrain people's freedom to a certain degree. Thus, it is important to identify the psychological factors that enable people to actively accept such inconveniences, as the dissemination

of persuasive messages (the effectivity of which is determined by said factors) could encourage more people to engage in COVID-19 countermeasures. Based on prior studies on the impact of COVID-19 in Japan, this study aimed to examine whether individuals' tendency toward conformity and their belief in a just world (BJW) could lead them to engage in COVID-19 countermeasures.

In Japan, individuals' tendency toward conformity was the underlying cause of countermeasures against COVID-19 from the early stages of the pandemic. Although the World Health Organization did not actively encourage healthy individuals to wear masks in the early stages of the outbreak (BBC, 2020), Nakayachi, Ozaki, Shibata, and Yokoi (2020) found that Japanese people's high mask-wearing rate was due to their tendency to conform to social norms. In other words, the higher the tendency toward conformity, the higher the rate of mask-wearing behavior (see also Sakakibara & Ozono, in press for a recent replication). In addition, Nakayachi, Ozaki, Shibata, and Yokoi (in press) also reported that

conformity had been a crucial factor that promoted hand-washing behavior during COVID-19 pandemic. These findings indicate that individuals' conformity influenced the practice of COVID-19 countermeasures. The abovementioned studies examined said influence using items directly related to specific preventive behaviors (e.g., "When you see other people wearing masks, do you think that you should also be wearing a mask?"). Conformity can be considered as a situation-dependent or situation-independent trait. Therefore, it can be said that prior studies have primarily focused on situation-dependent conformity, since they examined the relationship between conformity and COVID-19 countermeasure behaviors under specific circumstances. If solely situation-dependent conformity leads to individuals' engagement in COVID-19 countermeasures, the association between conformity and COVID-19 countermeasure behaviors will be limited to the situations presented in the aforementioned studies. Conversely, if an association can be found between situation-independent conformity (i.e., a temperament of conformity) and COVID-19 countermeasures, this would suggest there is a cross-situational association between conformity and COVID-19 countermeasures. Therefore, it is necessary to examine whether an individual's general temperament of conformity leads to an increase in the effectivity of COVID-19 containment measures.

In addition, studies on descriptive norms brought about by the majority have pointed out that although such norms lead to eco-friendly behaviors and countermeasure behaviors against natural disasters, those behavioral changes are often passive and do not entail changes in attitude or behavioral intention (Ohtomo & Hirose, 2007a; Ozaki & Nakayachi, 2015). For example, a study on precautionary behavior toward earthquakes showed that descriptive norms were only associated with specific behaviors (e.g., storing food to prepare for earthquakes), but they did not influence participants' attitude or behavioral intention (Ozaki & Nakayachi, 2015). Thus, the behaviors elicited by conformity seemed to be based on a superficial acceptance of assimilable behaviors, rather than on a deliberate decision-making process with an underlying understanding of the significance of those behaviors (Ohtomo & Hirose, 2007a; 2007b). Accordingly, it is possible that behavioral changes caused by descriptive norms are limited to behaviors that can be easily assimilated, as such changes are not rooted in individuals' awareness of the importance of those behaviors. In other words, an individual's conformity is expected to promote countermeasures only when they encompass behaviors that are easy to assimilate, such as wearing masks. Conversely, conformity does not seem to promote countermeasures that imply behaviors that are difficult to assimilate. For

example, countermeasures that imply behaviors that may be difficult to assimilate include personally collecting information on COVID-19 (e.g., keeping track of the average number of cases per day). Although such behaviors are essential for an accurate assessment of the impact of COVID-19 and the selection of effective countermeasures, it is unlikely that individuals' conformity would promote such behaviors because they are less assimilable.

The findings of the focus theory of normative conduct should be mentioned for supporting this study's predictions. Focus theory, which examines the influence of descriptive and injunctive norms on behavior, indicates that behavioral changes resulting from descriptive norms are more likely to occur when the behaviors in question are salient or easily identified, as when the individual sees others performing such behaviors (Cialdini, Reno, & Kallgren, 1990). Accordingly, it is reasonable to assume that individuals' tendency toward conformity enhances mask-wearing behavior due to its high assimilability, but has a limited effect on behaviors with low assimilability (those that are less noticeable).

Studies conducted during the COVID-19 pandemic have also suggested that, similar to conformity, individuals' degree of BJW may be related to their engagement in infection-preventive behaviors in Japan. As its name implies, the BJW assumes that society is fair and people experience the consequences they deserve (Lerner, 1980); in other words, it presumes that individuals who do good deeds will be rewarded, and those who do evil deeds will be punished (Maes & Schmitt, 1999). Previous studies have shown that individuals with a strong BJW are more likely to behave in accordance with social norms (Wolfradt & Dalbert, 2003) and engage in prosocial behaviors (Bartholomaeus & Strelan, 2019), while they are less likely to tolerate socially undesirable behaviors, such as norm violations and delinquency (Denke, Rotte, Heinze, & Schaefer, 2014; Sutton & Winnard, 2007), and suppress inappropriate expression of anger in driving contexts (Nesbit, Blankenship, & Murray, 2012).

A cross-national study pointed out that the belief that the COVID-19 infection was self-inflicted (based on the BJW) was much higher among the Japanese population than in Western countries or China (Miura, Hiraishi, Nakanishi, & Ortolani, 2020). It has also been argued that criticism toward people who suffered from COVID-19 and those who do not comply with social norms might be due to individuals' BJW (Murayama, 2020). In line with these findings, it is possible to predict that the BJW and conformity are factors that lead to normative behavior, thus helping facilitate the practice of COVID-19 countermeasures.

Therefore, this study examined the relationship between

general conformity, the BJW, and individuals' practice of COVID-19 countermeasures. The following behaviors were examined in this study: wearing a mask, avoiding close contact with others, obtaining information related to COVID-19, and intention to get vaccinated. Among these items, wearing a mask is considered an easily assimilable behavior because it is easy to identify whether others are wearing masks by simply looking at them. Conversely, personally collecting information about COVID-19 is assumed to be a behavior that is less assimilable. The specific hypotheses of this study are as follows.

Hypothesis 1: Temperament of conformity is positively correlated with wearing a mask.

Hypothesis 2: Temperament of conformity is not correlated with personally collecting information about COVID-19.

Hypothesis 3: The BJW is positively correlated with the practice of countermeasures.

## 2. Materials and Methods

### 2.1 Participants

This study recruited undergraduate students attending a private university in Kobe City, Hyogo Prefecture, Japan. University students were targeted for the survey because young people are often unaware that they have been infected (due to their relatively stronger immune system), thereby posing a greater threat to people who are at high risk of serious illness, which warrants the practice of focused countermeasures (Japanese Ministry of Health, Labour and Welfare, 2021).

A study that examined the correlation between personality (according to the Big Five traits) and COVID-19 countermeasures found a weak correlation between personality and countermeasures ( $|rs| < .20$ ) (Aschwanden et al., 2021). Based on this precedent, in the present study, a power analysis was conducted to determine the sample size. The statistical power of the test was set at 80%, significance level at 5%, and expected correlation coefficient at .20. The power analysis (two-tailed) revealed that a minimum sample size of 191 participants was necessary. To achieve this sample size, 206 participants were recruited, and their data were collected. Of these, 10 participants who failed to respond to at least one of the items were excluded from the analysis, resulting in 196 participants (52.04% female;  $M_{age} = 19.08$ ,  $SD_{age} = 0.69$ ) being included in the analysis.

### 2.2 Study Period

This study was conducted from April 12 to May 7, 2021.

Around this time, there was a resurgence of COVID-19 cases in the Kansai region of Japan, including Hyogo Prefecture. As a result, stricter COVID-19 measures were implemented in the prefectures of Osaka, Hyogo, and Miyagi for the first time in Japan on April 5, 2021 (Japan Times, 2021). Afterward, a third emergency declaration was issued for the area, including Hyogo Prefecture, on April 25, 2021. Thus, this study was conducted at the time of the reemergence of COVID-19, targeting university students located in the affected area.

## 2.3 Measures

### 2.3.1 Conformity and BJW Measures

The Japanese version of the Conformity Scale by Yokota and Nakanishi (2011), which was translated from Mehrabian and Steff's (1995) scale, was used to measure participants' tendency toward conformity. The Conformity Scale consists of 11 items measuring the degree to which people agree with the opinions of others in their daily lives, including items such as "Basically, my friends are the ones who decide what we do together." This scale is meant to measure the extent to which people tend to follow the ideas, values, and behaviors of others.

To measure the participants' BJW, eight items from the Japanese version of the BJW scale by Murayama and Miura (2015), which was translated from Maes and Schmitt's (1999) scale, were used. These items are related to the belief in ultimate or immanent justice, which is associated with the tendency to believe that consequences are self-inflicted, as well as with the perception of equity, including beliefs such as "Those who have suffered will be compensated one day."

Both the conformity and BJW scales were scored on a 5-point Likert scale (1 = *not at all* to 5 = *very much*). The conformity ( $\alpha = .70$ ) and BJW scales ( $\alpha = .89$ ) were found to have acceptable internal consistency, so each item was averaged and used in the analysis.

### 2.3.2 COVID-19 Countermeasures

The following preventive behaviors against COVID-19 were examined: wearing a mask, avoiding close contact with others, collecting COVID-19-related information, and intention to get vaccinated. The responses to each countermeasure were scored on a 5-point Likert scale (1 = *not at all* to 5 = *very much*). The tendency to wear a mask was assessed using four items: "I wear a mask even when I go out for 10 minutes or less," "I often wear a mask at home," "I feel uneasy if I do not wear a mask when I have a conversation with others," and "I always wear a mask when I use public transportation." The tendency to avoid close contact with others was assessed using two items: "I

try to keep a distance of at least 1 meter when talking with friends” and “When I go out, I try to avoid places where people gather.” Information collection was assessed using two items: “I try to collect information about COVID-19 infection status” and “To some extent, I know how many people are currently infected with COVID-19 in Japan.” Further, the respondents were also asked about their intention to get vaccinated against COVID-19. Vaccination intention was assessed using two items: “If I have the opportunity to be vaccinated, I will take it” and “I plan to get vaccinated (or have already been vaccinated).” Since acceptable internal consistency was observed for wearing a mask ( $\alpha = .50$ ),<sup>1</sup> avoiding close contact with others ( $\alpha = .56$ ), collecting information ( $\alpha = .80$ ), and intention to get vaccinated ( $\alpha = .74$ ), the items were averaged and used in the analysis.<sup>2</sup>

## 2.4 Procedure

Survey recruitment was conducted during class hours in the university. Participants were asked to complete the questionnaire by scanning a QR code on their smartphones. The survey form was created via Google Form, while the sections were organized in the following order: gender, age, conformity, BJW, COVID-19 countermeasures (except for vaccination intention), and vaccination intention. The

order of the items within each category was randomized for each participant. An informative message about vaccination was presented before asking respondents about their vaccination intention, wherein the possible risks associated with vaccination were clearly indicated. The message stated the following: “Vaccines are being developed to combat the new coronavirus, which is spreading rapidly around the world. Most of the vaccines that have been developed have proven to be safe, but there is still the possibility of unexpected side effects.” All participants indicated their vaccination intention after reading this message.

## 2.5 Ethical Considerations

This study was conducted after receiving approval from the ethical research review board of Kobe Gakuin University (Approval Number: SP20-27). Candidates were briefed (both verbally and in writing) on the purpose of the study, the method of answering the questions, and the handling of personal information at the time of recruitment. Only university students who agreed to participate responded to the survey items.

## 2.6 Statistical Analysis

All the data analyses were conducted using R version 3.6.1 software (R Core Team, 2019). The zero-order correlation coefficients among the variables of conformity, BJW, and COVID-19 countermeasures were calculated to identify the correlations among them.

## 3. Results

Table 1 shows the descriptive statistics and zero-order correlation coefficients for age, gender, conformity, the BJW, and COVID-19 countermeasures. The analysis showed significant correlations between conformity and mask-wearing scores, while no significant associations were observed between conformity and avoiding close contact with others, information collection, and

- 1 Although the mask-wearing score comprised four items, its internal consistency was not high. Therefore, two items (i.e., “I wear a mask even when I go out for 10 minutes or less” and “I always wear a mask when I use public transportation”) that showed high correlation ( $r = .61$ ) were analyzed as a “two-item mask-wearing score,” which showed results consistent with those of the main analysis in the significance tests.
- 2 In addition to these items, participants were asked about how obligated they felt to comply with social distancing norms and vaccination, and their anxiety about getting vaccinated. Participants were also asked about descriptive norms on vaccination. These items were not included in the analysis because they were not directly related to the hypotheses of this study.

Table 1 Descriptive statistics and correlations ( $N = 196$ )

Variable	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5	6	7
1. Age	19.08	0.69	—						
2. Gender (Female = 1, Male = 2)	—	—	.057	—					
3. Conformity	3.28	0.53	.088	-.063	—				
4. BJW	3.16	0.94	-.133 <sup>†</sup>	-.232 <sup>**</sup>	-.125 <sup>†</sup>	—			
5. Wearing a mask	3.66	0.59	-.104	-.086	.244 <sup>**</sup>	-.094	—		
6. Avoiding close contact with others	3.07	0.92	-.110	-.049	-.061	.074	.428 <sup>**</sup>	—	
7. Collecting information	3.40	1.08	.031	-.065	.002	-.019	.335 <sup>**</sup>	.416 <sup>**</sup>	—
8. Intention to get vaccinated	3.08	1.21	.135 <sup>†</sup>	.236 <sup>**</sup>	.078	-.326 <sup>**</sup>	.173 <sup>*</sup>	.225 <sup>**</sup>	.174 <sup>*</sup>

Note. <sup>†</sup> $p < .10$ ; <sup>\*</sup> $p < .05$ ; <sup>\*\*</sup> $p < .01$ . BJW = belief in a just world.



vaccination intention. These results supported hypotheses 1 and 2. Conversely, the BJW did not exhibit a significant association with any COVID-19 countermeasure, except for vaccination intention. Thus, hypothesis 3 was not supported. Furthermore, the BJW was significantly negatively correlated with vaccination intention, indicating the opposite of hypothesis 3. The implications of these results are presented in detail in the discussion section.

In order to examine whether these correlations were confirmed regardless of participants' gender, the correlation coefficients between the variables were calculated for each gender (Tables 2 and 3). The results showed that the direction of the correlation was generally consistent between the overall results and the gender-specific results. However, the following differences were also found. For male participants, conformity and the tendency to wear a mask showed a significant positive correlation ( $r = .33, p < .01$ ) as in the analysis of the overall sample ( $r = .24, p < .01$ ). However, for female participants the direction of the correlation was consistent but not significant ( $r = .14, p = .16$ ). More importantly, while the BJW and the tendency to wear a mask were significantly negatively correlated among male participants ( $r = -.28, p < .01$ ), the opposite was true for female participants, showing a marginally significant positive correlation ( $r = .17, p = .09$ ). In addition, the BJW and intention to vaccinate were significantly negatively correlated in both the overall ( $r = -.33, p < .01$ ) and male samples ( $r = -.46, p < .01$ ), but there was no statistically significant correlation for female participants ( $r = -.08, p = .45$ ).

#### 4. Discussion

This study hypothesized that two types of personality factors—conformity and the BJW—would influence Japanese people's tendency to engage in COVID-19 countermeasures. The results of the study showed that the more individuals exhibited a tendency toward conformity, the more likely they were to wear a mask. This result supported hypothesis 1 and was consistent with previous studies conducted in the early stages of the epidemic in Japan (Nakayachi et al., 2020). However, conformity was not associated with the tendency to avoid close contact with others, to collect information, or the intention to get vaccinated. For example, certain countermeasures (such as collecting information privately) seemed to be behaviors difficult to assimilate. Therefore, the results indicate that conformity only promotes COVID-19 countermeasures that are easy to assimilate.

Previous studies on earthquake prevention behaviors have pointed out that information about social norms could only lead to superficial behavioral changes and not attitudinal change (Ozaki & Nakayachi, 2015). In other words, it can be speculated that countermeasure behaviors based on conformity were adopted as a result of individuals' passive acceptance of those behaviors, rather than because they acknowledged the need for such behaviors. Accordingly, in the present study, no association was found for countermeasure behaviors that are less assimilable.

In contrast, participants' degree of BJW was not associated with most COVID-19 countermeasures.

Table 2 Descriptive statistics and correlations for *female* participants ( $n = 102$ )

Variable	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5	6
1. Age	19.04	0.70	—					
2. Conformity	3.31	0.55	-.030	—				
3. BJW	3.36	0.83	-.166 <sup>†</sup>	.065	—			
4. Wearing a mask	3.71	0.45	-.168 <sup>†</sup>	.142	.167 <sup>†</sup>	—		
5. Avoiding close contact with others	3.12	0.78	-.126	-.106	.230 <sup>*</sup>	.354 <sup>**</sup>	—	
6. Collecting information	3.47	1.03	.145	.004	.055	.144	.260 <sup>**</sup>	—
7. Intention to get vaccinated	2.81	1.12	.180 <sup>†</sup>	.045	-.075	-.059	.154	.117

Note. <sup>†</sup> $p < .10$ ; <sup>\*</sup> $p < .05$ ; <sup>\*\*</sup> $p < .01$ . BJW = belief in a just world.

Table 3 Descriptive statistics and correlations for *male* participants ( $n = 94$ )

Variable	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5	6
1. Age	19.12	0.67	—					
2. Conformity	3.24	0.51	.241 <sup>*</sup>	—				
3. BJW	2.93	1.00	-.086	-.349 <sup>**</sup>	—			
4. Wearing a mask	3.61	0.71	-.055	.328 <sup>**</sup>	-.281 <sup>**</sup>	—		
5. Avoiding close contact with others	3.03	1.06	-.095	-.031	-.045	.464 <sup>**</sup>	—	
6. Collecting information	3.33	1.13	-.080	-.009	-.109	.457 <sup>**</sup>	.529 <sup>**</sup>	—
7. Intention to get vaccinated	3.38	1.23	.069	.151	-.460 <sup>**</sup>	.366 <sup>**</sup>	.312 <sup>**</sup>	.265 <sup>**</sup>

Note. <sup>\*</sup> $p < .05$ ; <sup>\*\*</sup> $p < .01$ . BJW = belief in a just world.

Previous studies have suggested that the BJW can lead to behaviors that are consistent with social norms (Wolfradt & Dalbert, 2003). Furthermore, it has been suggested that the harsh evaluation of COVID-19 patients in Japan might be due to the influence of the BJW among the population (e.g., Miura et al., 2020; Murayama, 2020). Based on these findings, this study hypothesized that the BJW would lead to norm-compliant behaviors (such as wearing masks and getting vaccinated) during the COVID-19 pandemic. However, the results of the correlation analyses did not support this hypothesis. Furthermore, an unexpected significant negative correlation was found between the BJW and vaccination intention, indicating that the stronger the BJW, the lower individuals' intention to get vaccinated. A subsequent analysis showed that the negative correlation between the BJW and vaccination intention was not found among female participants.

Since the results of this study were somewhat unexpected, the findings were interpreted post hoc. The BJW refers to the belief that the world is a fair and stable place where sudden misfortunes do not occur, and that people get what they deserve (Lerner, 1980; Murayama & Miura, 2015). Thus, prior studies have pointed out that the BJW serves as the basis for psychological stability and subjective well-being (Hafer & Bègue, 2005). Further, the BJW has been reported to increase optimism about the future. For example, Sutton, Stoeber, and Kamble (2017) showed that people who hold a strong BJW tend to think that there will be more positive than negative events in the future. In addition, Lucas, Alexander, Firestone, and Lebreton (2009) demonstrated that, when assessing health risks that were difficult to prevent with the message that indicates prevention is difficult, participants with strong BJW were more optimistic about being able to prevent these health risks. Moreover, a meta-analysis found that the BJW was significantly positively correlated with extraversion (Nudelman, 2013), a Big Five personality trait associated with optimism (Sharpe, Martin, & Roth, 2011). Studies conducted during the COVID-19 pandemic indicated that extraversion is associated with decreased social distancing (Carvalho, Pianowski, & Gonçalves, 2020) and more optimistic predictions about the end of the epidemic (Aschwanden et al., 2021). Given these findings, the BJW could have led to more optimistic assessments of the risks posed by COVID-19 (vis-à-vis being infected or becoming severely ill), which in turn led to lower scores in vaccination intention.

The effect of gender differences in risk perception may be one possible explanation for the male-specific negative correlation between the BJW and vaccination intention. Previous studies on risk perception have shown that men tend to underestimate the risk of various hazards,

compared with women (e.g., Nakayachi, Nagaya, & Yokoyama, 2018).<sup>3</sup> This suggests that the interaction between male participants' lower level of risk-perception and the optimistic outlook of the future brought about by BJW may have resulted in the negative correlation between BJW and vaccination intention among male participants.

The arguments stated above are a post-hoc interpretation of the results; therefore, further studies are needed to confirm these findings. Future studies should explore not only the BJW and the intention to get vaccinated, but also risk-perception vis-à-vis COVID-19. In this way, it would not only be possible to examine the hypothesis which posits that COVID-19 risk perception has an interaction effect with BJW on vaccination intention, but also to examine the mediating process through which the BJW influences subjective assessments of the likelihood of infection and the possibility of becoming seriously ill (i.e., COVID-19-related risk perception), subsequently reducing individuals' vaccination intention.

In addition, it should be noted that the absence of a significant correlation between the BJW and vaccination intention among female participants does not mean that there is no correlation in the population. In other words, it is possible that the findings in this paper were the result of an unexpected sampling bias, and that there were no gender-specific differences in the relationship between BJW and vaccination intention. Therefore, it is necessary to examine whether these findings can be confirmed by analyzing a larger sample of each gender.

## 5. Limitations and Conclusion

The study had the following limitations. First, this study did not examine a representative sample of the Japanese population, but rather university students in an area affected by the resurgence of COVID-19; thus, the data analyzed may differ from those of the general population in Japan. Therefore, conducting a nationwide study is necessary, considering region-specific factors, such as infection status and the capabilities of the regional medical system. Second, the COVID-19 countermeasures examined in this study were not exhaustive. Several countermeasures, such as hand washing, hand disinfection with alcohol, and room ventilation were not included. In the future, it would be desirable to analyze countermeasure behaviors comprehensively.

Despite these limitations, this study demonstrated

3 The influence of gender in risk perception has been highlighted as possibly being driven by socio-economic factors, rather than innate differences (Flynn, Slovic, & Mertz 1994).

that conformity was associated with certain COVID-19 countermeasures. Additionally, to my knowledge, this is the first study to show that the BJW may have a suppressive effect on vaccination intentions among men. By clarifying the relationship between the individual differences in the variables and COVID-19 countermeasures in more detail, specific suggestions can be developed to create more effective persuasive messages to promote preventive behaviors.

## 6. References

- Aschwanden, D., Strickhouser, J. E., Sesker, A. A., Lee, J. H., Luchetti, M., Stephan, Y., ... & Back, M. (2021). Psychological and behavioural responses to coronavirus disease 2019: The role of personality. *European Journal of Personality, 35*, 51–66.
- BBC (2020). *Coronavirus: WHO advises to wear masks in public area*. Available at: <https://www.bbc.com/news/health-52945210> (Accessed May 11, 2021).
- Bartholomaeus, J., & Strelan, P. (2019). The adaptive, approach-oriented correlates of belief in a just world for the self: A review of the research. *Personality and Individual Differences, 151*, 109485.
- Carvalho, L. D. F., Pianowski, G., & Gonçalves, A. P. (2020). Personality differences and COVID-19: Are extroversion and conscientiousness personality traits associated with engagement with containment measures? *Trends in Psychiatry and Psychotherapy, 42*, 179–184.
- Cialdini, R. B., Reno, R. R., & Kallgren, C. A. (1990). A focus theory of normative conduct: Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology, 58*, 1015–1026.
- Denke, C., Rotte, M., Heinze, H. J., & Schaefer, M. (2014). Belief in a just world is associated with activity in insula and somatosensory cortices as a response to the perception of norm violations. *Social Neuroscience, 9*, 514–521.
- Flynn, J., Slovic, P., & Mertz, C. K. (1994). Gender, race, and perception of environmental health risks. *Risk Analysis, 14*, 1101–1108.
- Hafer, C. L., & Bègue, L. (2005). Experimental research on Just-World Theory: Problems, developments, and future challenges. *Psychological Bulletin, 131*, 128–167.
- Japan Times (2021). *Stricter virus measures to be rolled out for Osaka, Hyogo and Miyagi*. Available at: <https://www.japantimes.co.jp/news/2021/04/01/national/pre-emergency-measures/> (Accessed May 11, 2021).
- Japanese Ministry of Health, Labor and Welfare (2021). *Expert committee on countermeasures against novel coronavirus infections*. Available at: [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/newpage\\_00011.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/newpage_00011.html) (Accessed September 5, 2021). (In Japanese.)
- Lerner, M. J. (1980). *The belief in a just world: A fundamental delusion*. New York: Plenum Press.
- Lucas, T., Alexander, S., Firestone, I., & Lebreton, J. M. (2009). Belief in a just world, social influence and illness attributions: Evidence of a just world boomerang effect. *Journal of Health Psychology, 14*, 258–266.
- Maes, J., & Schmitt, M. (1999). More on ultimate and immanent justice: Results from the research project “Justice as a problem within reunified Germany”. *Social Justice Research, 12*, 65–78.
- Mehrabian, A., & Stefl, C. A. (1995). Basic temperament components of loneliness, shyness, and conformity. *Social Behavior and Personality: An International Journal, 23*, 253–263.
- Miura, A., Hiraishi, K., Nakanishi, D., & Ortolani, A. (2020). International comparison of attitudes toward the outbreak of new coronavirus: Are “self-inflicted” and “self-restraint police” unique to Japan? Poster presented at 61th Conference of Japanese Society of Social Psychology (Webcasting), 2102. Available at: [http://iap-jp.org/jssp/conf\\_archive/paper\\_download.php?s=2020-A-0108](http://iap-jp.org/jssp/conf_archive/paper_download.php?s=2020-A-0108). (In Japanese.)
- Murayama, A. (2020). Discrimination and intolerance in the COVID-19 pandemic: A social psychological perspective, *Toshi Mondai (Municipal Problems), 111*, 48–52. (In Japanese.)
- Murayama, A., Miura, A. (2015). Derogating victims and dehumanizing perpetrators: Functions of two types of beliefs in a just world. *Japanese Journal of Psychology, 86*, 1–9. (In Japanese with English abstract.)
- Nakayachi, K., Nagaya, K., & Yokoyama, H. (2018). Relationship between basic scientific knowledge and anxiety about hazards. *Japanese Journal of Psychology, 89*, 171–178. (In Japanese with English abstract.)
- Nakayachi, K., Ozaki, T., Shibata, Y., & Yokoi, R. (2020). Why do Japanese people use masks against COVID-19, even though masks are unlikely to offer protection from infection? *Frontiers in Psychology, 11*, 1918.
- Nakayachi, K., Ozaki, T., Shibata, Y., & Yokoi, R. (in press). Determinants of hand-washing behavior during the infectious phase of COVID-19. *Japanese Journal of Psychology, Advance online publication*. (In Japanese with English abstract.)
- Nesbit, S. M., Blankenship, K. L., & Murray, R. A. (2012).

- The influence of just - world beliefs on driving anger and aggressive driving intentions. *Aggressive behavior*, 38, 389–402.
- Nudelman, G. (2013). The belief in a just world and personality: A meta-analysis. *Social Justice Research*, 26, 105–119.
- Ohtomo, S., & Hirose, Y. (2007a). The dual-process of reactive and intentional decision-making involved in eco-friendly behavior. *Journal of Environmental Psychology*, 27, 117–125.
- Ohtomo, S., & Hirose, Y. (2007b). The influences of situation-oriented and goal-oriented decision-making on risk-related behavior in a natural disaster. *Japanese Journal of Social Psychology*, 23, 140–151. (In Japanese with English abstract.)
- Ozaki, T., & Nakayachi, K., (2015). Effects of descriptive norms and mutual relationships on precautionary behavior toward earthquakes. *Japanese Journal of Social Psychology*, 30, 175–182. (In Japanese with English abstract.)
- R Core Team. (2019). R: A language and environment for statistical computing. <https://www.r-project.org/>.
- Sakakibara, R., & Ozono, H. (in press). Why do people wear a mask? A replication of previous studies and examination of two research questions in a Japanese sample. *The Japanese Journal of Psychology, Advance online publication*. (In Japanese with English abstract.)
- Sharpe, J. P., Martin, N. R., & Roth, K. A. (2011). Optimism and the Big Five factors of personality: Beyond neuroticism and extraversion. *Personality and Individual Differences*, 51, 946–951.
- Sutton, R. M., Stoeber, J., & Kamble, S. V. (2017). Belief in a just world for oneself versus others, social goals, and subjective well-being. *Personality and Individual Differences*, 113, 115–119.
- Sutton, R. M., & Winnard, E. J. (2007). Looking ahead through lenses of justice: The relevance of just - world beliefs to intentions and confidence in the future. *British Journal of Social Psychology*, 46, 649–666.
- Wolfradt, U., & Dalbert, C. (2003). Personality, values and belief in a just world. *Personality and Individual Differences*, 35, 1911–1918.
- Yokota, K., & Nakanishi, D. (2011). Development of the conformity orientation scale: Informative influence and normative influence. *Studies in the Humanities and Sciences*, 51, 23–36. (In Japanese with English abstract.)

## 7. Funding

This research was supported by JPSP KAKENHI (Grant Number 21K13681).

## 8. Conflict of Interest

The author declared that there were no potential conflicts of interest with respect to the authorship or the publication of this article.

—2021.9.7 受稿 2021.11.2 受理—



# 中国の在留邦人における文化適応課題の検討

## — 日中文化の相違点の認識に関する調査から —<sup>1)2)</sup>

毛 新華 神戸学院大学心理学部 清水 寛之 神戸学院大学心理学部  
木村 昌紀 神戸女学院大学人間科学部

**A study on the intercultural adaptation tasks of Japanese nationals overseas in China:  
Based on an exploratory survey of awareness on cultural difference between Japan and China.**

Xinhua Mao (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)  
Hiroyuki Shimizu (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)  
Masanori Kimura (*School of Human Sciences, Kobe College*)

To clarify the intercultural adaptation tasks of Japanese nationals overseas in China, this study aims to obtain basic data on the perception and awareness of the differences between Japanese and Chinese culture through exploratory research. We conducted an open-ended questionnaire survey of 53 Japanese expatriates in four Chinese cities. In the survey, three questions were asked to elicit the characteristics of Chinese interpersonal relationships as perceived by Japanese, such as “What troubled you in your interpersonal relationship with Chinese people?”. The obtained descriptions were organized using the KJ method. The similar description for each question was classified as a small category, and small categories of similar meaning were classified as a middle category. After the common small categories were integrated with the middle categories by cross-sectionally organizing the three questions, the middle categories were examined longitudinally, and four big categories were extracted as higher-level concepts. Specifically, two middle categories, such as unique institutions and lifestyles, constituted “social institutional aspects,” seven middle categories, such as self-centeredness and strong self-expression, constituted “temperament and personality aspects,” six middle categories, such as disregard for privacy, constituted “interpersonal aspects,” and two middle categories, such as lack of responsibility, constituted “work aspects”. In the future, we will conduct a large-scale survey based on these findings to empirically examine the structure of intercultural adaptation tasks of Japanese nationals overseas in China.

**Keywords:** Japanese nationals overseas, China, intercultural adaptation tasks, cultural difference.

Kobe Gakuin University Journal of Psychology  
2021, Vol.4, No.1, pp.31-40

### 問題と目的

#### 日本と中国の交流

2021 年 8 月の時点で、新型コロナウイルス感染症

- 1) 本研究は日本心理学会第 85 回大会 (2021 年 9 月) において発表された。
- 2) 本研究は JSPS 科研費 (課題番号 21K02991, 15K17260, 17K04510, 16K04276) の助成を受けた。

の影響はまだ収まっていない。この感染症により、国を超えて行われている経済交流など、さまざまなことが制限されている。こうした状況にもかかわらず、地政学的に近接している日本と中国の間では、なお交流の必要性が高い。感染症が流行している最中である 2020 年時点でも、中国での仕事や勉強などを目的とする中長期在留の邦人は、感染症流行以前の人数とほぼ変わらず、約 11 万人で、在留邦人数首

位のアメリカの 42 万人に次ぐ (外務省, 2021)。

日中両国の本格的な経済・文化交流は 1980 年代後半の中国の改革開放政策にさかのぼり, 2000 年代から引き続いて現在, これまでにない活況を呈している。日本の海外企業の半分が中国にあり (外務省, 2021), 日本人の海外留学先として, 中国も上位の選択肢とされている (日本学生支援機構, 2021)。

両国の経済的交流や人的往来により, 多くの邦人が中国に滞在している。しかし, 日中両国の対人関係と行動様式の違い (木村・毛, 2013a, 2013b; 園田, 2001; 吉村, 2012 など) により, 現実には, 日本人と現地の人々との間で対人トラブルが生じたり, 日本人が対人ストレスを抱えたりする状況が少なくない (西田, 2007)。そこで, 在留邦人の中国文化適応, とりわけ中国人との間の円滑な対人関係の形成を促進することが必要不可欠な事項となっている。本研究では, こうした社会的必要性を踏まえて, 日本人の中国人との対人的トラブルにつながる原因である, 中国在留邦人の中国文化への適応課題について探ることを最終的な目的とする。

### 異文化適応に関わる心理学の視点

鈴木 (1997) は, ホストとゲストの観点から, 人々が異文化と触れあう際に, 「異文化接触」と「異文化体験」という 2 つのパターンがあることを指摘した。異文化接触とは, 日本人が来日した他文化の人と関わる時に, 自文化の環境下で他文化の人々との間で生じる相互作用を指す。一方, 異文化体験とは, 日本人が他文化を訪れて他文化の人々と関わる時に, 自文化を離れ, 他文化に移行することで他文化の人々との間で生じる相互作用を指す。このうち, 新しい環境への移行に伴う「異文化体験」において, 個人がこの新しい環境 (異文化の環境とメンバー) との間に適切な関係を維持し, 心理的な安定が保たれている状態が「異文化適応」である。

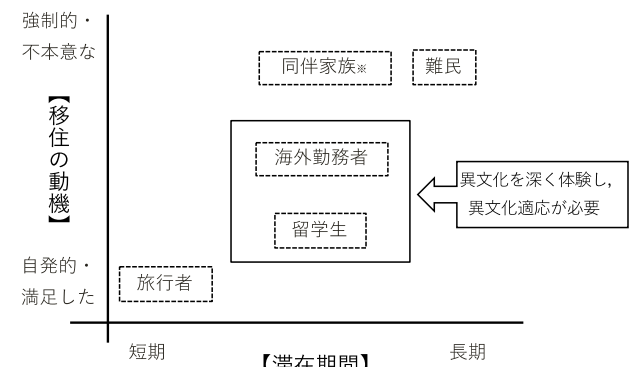
一方, 異文化に移行後, 自文化に戻るか否かによって, 異文化移行者を永住者と一時的滞在者 (非永住者) に分けることができる。鈴木 (1990) は, Furham & Bochner (1986) が提示した滞在期間と文化間移行の動機の 2 つの観点を援用し, Figure 1 のように一時的滞在者を分類した。この分類によると, 留学生や海外勤務者は異文化に中長期的に滞在し, 留学生, 勤務者の順に本意-不本意な動機をもっている。一方, 旅行者は自発的ではあるが, 短期間しか滞在せず, 難民は強制的・不本意な動機のもとに長期間の滞在を余儀なくされる。このように考えると, 留学生や海外勤務者の多くは, たとえ不本意な部分があったとしても, 滞在には比較的明確な目的や目標, 理由があり, 目標達成のために現地の人々との対人的なやり取りをして, 対人様式に馴染み, いわゆる異文化に適応する必要があると考えられる。本研究では,

こうした滞在期間と文化間移行の動機という 2 つの観点から, 一時的滞在者のうち, 留学生と海外勤務者を中心に議論を進める。

### 異文化との出会いがもたらす諸問題

人々が異文化と出会うと, 新しい環境の下で心理的に混乱した状態に陥ることが多い。Oberg (1960) はこの心理的混乱を「カルチャーショック」と呼んでいる。近藤 (1981) は, カルチャーショックの対象を「自然環境」と「社会環境」に分類した。前者の例としては, 気候や風土などが挙げられる。後者の「社会環境」に対するショックは, さらに「人間環境」, 「精神的・文化的環境」, 「物質的環境」に分けられた。「人間環境」はその社会を構成する人々で, 「精神的・文化的環境」はその社会で共有されている価値観などの精神的・習慣的なもので, 「物質的環境」は衣食住に関する事柄である。また, Cushner & Brislin (1996) は, 異文化との出会いがもたらす問題領域として, 「強い感情」, 「知識領域」, 「文化的相違の基礎」を挙げている。「強い感情」は不安, 確証がない予測, あいまいさ, きずな, 偏見との対決, などを含む。また, 「知識領域」は仕事, 時間空間の方向付け, コミュニケーション, 役割, しきたり, 集団と個人の重要性, 階層と地位, 価値観, などを含む。そして, 「文化的相違の基礎」はカテゴリー化, 情報分化, 帰属, 内/外集団の区別, 学習, などを含む。

カルチャーショックに代表される, 異文化との出会いがもたらす諸問題は永遠に続くわけではなく, 個人の資質, 能力, あるいは努力により, 異文化に慣れていくことが「異文化適応」となる。この「慣れ」の過程を巡って, Lysgaard (1955) の U カーブ理論や Adler (1975) の 5 位相説をはじめとして, 様々な異文化適応プロセスに関する考え方が提示されている。これらのプロセスは, いずれも, 異文化に対する新奇感から始まり, 適応課題に出会うことによ



\*同伴家族は必ずしも強制的・不本意であると限らない

Figure 1  
文化間移行の型と異文化適応の関係性  
(鈴木, 1997 より改変)

て、次第に感情的な落ち込みが発生する。その後、課題を克服することを通して、落ち込んだ感情状態が回復し、最終的に立ち直って、異文化に十分に適応する段階に至る。

適応のプロセスにはしばしば「文化変容」が伴う。文化変容とは、個人が異文化とうまくやっていけるように、接触の度合、周囲の状況、心理的な特質を変えようとする過程である (Berry, Kim, & Boski, 1988)。Berry, Poortionga, Segall, & Dasen (1992) や渡辺 (1995) は、適応段階を「前接触」、「接触」、「葛藤」、「危機」、「順応」に分け、「危機」段階において「文化変容」が4つの様態で起きるとしている。この4つの様態は、「同化」、「統合」、「離脱」と「境界化」である。「同化」は自文化が保たれず、異文化に溶け込む状態で、「統合」は自文化の維持と異文化への変化との間にバランスが保たれている状態、「離脱」はほぼ自文化に閉じこもっている状態で、そして、「境界化」はどちらの文化も保たれず、二つの文化の間で葛藤する状態である。「危機」という適応段階は、どのような文化変容にでも発生しうるわけであり、中長期の滞在者にとって、異文化の中で自らの目的を達成するために、統合という文化変容に至ることがより生産的だと考えられる。一方、箕浦 (1990) が指摘しているように、ある文化型から他の文化型への行動形態の置き換えは年齢を重ねるにつれてだんだん難しくなる。認知、行動、情動の3つの視点から見た際に、成人が長く異文化に滞在して、認知と行動は相手文化のものに変容できるが、情動は自文化のものにとどまる場合が多い。

## 異文化適応のポイントと日中の対人関係の特徴

異文化への適応ポイントとしては、相手国のコミュニケーションの仕方の習得 (鈴木, 1997) や相手国の人々との対人関係の形成 (田中, 2000) が指摘されている。相手文化の対人関係を考える際に、自文化との共通点と相違点をきちんと認識して対応することが効果的であろう。Berry (1989) はこのような対人関係の文化的特徴を文化共通性と文化特有性に弁別する *etic-emic* アプローチを提案している。このアプローチに従えば、相手国との対人関係の構築には、文化共通性の特徴とともに、文化特有性の事柄に注目すべきである。日本人の中国文化適応という文脈においては、両文化の共通点と相違点を把握すべきである。

日中両国は古くから交流があり、人々の行動様式に儒教思想の影響を強く受けていて、文化的に似ていると言われている (毛・清水, 2019)。文化比較研究の観点から、両国はともに集団主義文化 (Triandis, 1995)、高コンテクスト文化 (Hall, 1976) に所属し、両国民はいずれも「相互協調的自己観」 (Markus & Kitayama, 1991) や「弁証的思考様式」 (Peng &

Nisbett, 1999) をもっているとされている。一方、日中両国の対人関係の特有性としては、これまでに社会学や心理学の分野から多くの知見が示されている。日本人の特徴としては、「以心伝心」 (近藤, 1981) や「間接的」、「婉曲的」、「示唆的」 (Takai & Ota, 1994)、「他者依拠的に対人行動を決めること」 (箕浦, 1990)、そして、「他者に気を配り、感情をあまりあからさまに表に出さないこと」 (天兒, 2003) などが挙げられる。これに対して、中国人の特徴としては、「メンツ」、「関係主義」、「人情」の重視 (Hwang, 2006)、強い自己主張 (天兒, 2003; 吉村, 2012)、そして、コネの重視 (毛・大坊, 2012, 2016) などが挙げられる。

## 本研究の目的

以上の議論を踏まえて、本研究では、成人である中国にいる留学や駐在などを目的とする中長期在留の邦人を対象に、彼らの中国文化適応の課題について考える。具体的には、在留邦人の中国人との対人関係における適応課題を探るため、まずは自由記述の手法を用いた探索的調査を通して、日中文化の相違点の認識や気づきに関する基礎的資料を得ることを目指す。

## 方法

### 調査対象者と調査方法

本研究では、中国の在留邦人 53 名 (男性 36 名、女性 17 名) を対象とした。調査対象者の平均年齢は  $41.4 \pm 11.64$  歳 (10・20 代: 8 名, 30 代: 15 名, 40 代: 17 名, 50 代: 11 名, 60 代: 2 名) であった。調査は調査会社イプソスを通して、日系企業の多い中国の 4 都市 (大連, 北京, 上海, 広州) で質問紙を配布・回収した。調査時期は 2016 年 9 月～10 月であった。<sup>3)</sup>

### 調査内容

本研究は、フェイスシート項目として、性別・年齢・日本での出身地、中国での滞在都市、滞在資格、そして、中国人に接した年数、中国での滞在年数、中国人の友人の有無を設定した。

一方、日本人の中国人との対人関係の観点から、中国人の特徴、中国人が日本人を困惑させる点など、自由記述調査の項目を設けた。具体的に、調査対象者に、以下の3つの質問について、箇条書きで回答を求めた。

質問 1. 中国での生活の中で、中国人との対人関係

3) 本研究は、倫理的配慮として、質問紙のフェイスシートにて、得られた回答は学術の目的以外に使用しないこと、個人を特定しないこと、回答を自らの意思で中断が可能であることを伝えた。



において、「やはり中国人は日本人と異なっている」と感じる点は何でしょうか（以下、「対人関係で中国人が日本人と異なっている点」とする）。

質問 2. 中国人との対人関係において、彼らがあなたを困らせたのはどのような点でしょうか（以下、「中国人があなたを困らせた点」とする）。

質問 3. 中国人同士の対人関係の「特徴」として、どのような点が挙げられますか（以下、「中国人の対人関係の特徴」とする）。

## 分析方法

フェイスシート項目に対して、調査対象者の基本属性として平均値の計算など、基本集計を行った。一方、自由記述調査の項目から得られた記述を KJ 法（川喜田, 1986）で整理を行った。その際、日本の大学に勤めている中国人の大学教員 1 名（社会心理学専攻, 在日年数 20 年）と日本人の大学教員 1 名（社会心理学専攻）、そして中国人大学院生 1 名（社会心理学専攻, 来日年数 3 年）が協議をしながら、回答の分析・整理を行った。

なお、本研究は、得られた文字データからカテゴリーへと整理することで、カテゴリーの抽出およびカテゴリー間の関係を明らかにすることを目的としている。これまでに数多くの文字データの整理方法が開発されている中、KJ 法は、断片的な情報を効率よく整理・グループ化して、まとめること（川喜田, 1986）に長けている。そこで、本研究の目的の達成に、KJ 法が適切な手法であると考えられ、採用されることとなった。

## 結果と考察

### 本研究の調査対象者の基本属性

**調査地域別の人数** 本研究の調査地域である中国 4 都市の調査対象者の内訳としては、大連から 21 名、北京から 11 名、上海から 11 名、広州から 10 名であった。大連の 1 つの地域だけでサンプル全体の約 4 割を占めている。北京からの 11 名と合わせて、本研究の対象者の 6 割が中国北部に滞在し、得られた回答は中国北部での経験による内容が多い可能性がある。また、対象者は 53 名で、絶対数が少ない。

**滞在形態** 駐在員・現地採用社員は 31 名、経営者は 2 名、留学生は 10 名、家族滞在者は 8 名、教員は 1 名、未回答は 1 名であった。企業に勤めている会社員が全体の 6 割を占めているため、回答内容が企業での経験によるものが多い可能性がある。

**日本での出身地** 東北地方は 1 名、中部地方は 5 名、関東地方は 30 名、関西地方・四国地方は 11 名、中国地方は 4 名、九州地方は 2 名であった。関東地方出身者は全体の 6 割を占めている。

**中国人の友人の有無** 「いる」と答えたのは 46 名で、「いない」と答えたのは 7 名であった。全体の約 9 割弱が中国人と友人関係を構築している。

**中国人に接した年数** 調査対象者が日本にいた時の経験も含めて、中国人に接した平均年数は  $9.3 \pm 8.24$  年であり、範囲は 0.5–40 年であった。その内訳としては、3 年未満は 12 名、3–5 年は 9 名、6–10 年は 16 名、11–15 年は 7 名、16–20 年 6 名、20 年以上は 3 名であった。

**中国での滞在年数** 調査対象者の中国での通算した滞在年数の平均値は  $5.4 \pm 4.00$  年であり、範囲は 0.5–16 年であった。その内訳としては、3 年未満は 17 名、3–5 年は 16 名、6–10 年は 14 名、11–15 年は 5 名、16–20 年 1 名であった。

上記にある「中国人の友人の有無」、「中国人に接した年数」、そして、「中国での滞在年数」の結果から、本研究の対象者の中で中国人との関わり合いが相対的に深い日本人が多くいた。したがって、得られた回答はこのような人々によって提供されたものだと考えられる。また、個々人によって異文化の地を訪れてから経過した時間が異なっているが、本研究の調査対象者における中国および中国人との経験年数から総合的に判断すると、異文化適応プロセスの「葛藤期」（Berry et al., 1992; 渡辺, 1995）にいる対象者が多いと推測される。

### 自由記述調査データの整理の結果と先行研究との対応

本研究では、質問 1. 対人関係で中国人が日本人と異なっている点、質問 2. 中国人があなたを困らせた点、質問 3. 中国人の対人関係の特徴、という 3 つの質問から順に 207, 174, 157 記述、1 人当たり平均で順に  $3.90 \pm 0.50$ ,  $3.28 \pm 1.50$ ,  $2.96 \pm 1.00$  記述が得られた。

調査で得られた文字データに対して、以下の方針に基づいて整理を行った。

1. 質問ごとに同じあるいは似ている記述を集計し、Small Category（以下、SC とする）とした。
2. 質問ごとに SC 同士で意味合いが類似したものをまた集計し、各質問の Middle Category（以下、MC とする）とした。
3. 横断的に、すべての質問で共通している SC および MC を整理・統合した。
4. 複数の MC を縦断的に吟味し、上位概念的なカテゴリーを Big Category（以下、BC とする）として抽出した。

その結果、在留邦人の認識した中国人の特徴に関する BC は、次の 4 つに整理することができた。すなわち、「BC1. 社会制度・生活スタイルの側面」、「BC2. 気質・性格的側面」、「BC3. 対人的側面」、「BC4. 仕事の側面」、であった（Table 1）。



Table 1 中国の在留邦人における中国人の特徴に関する認識の整理

BC	MC	質問1. 対人関係で中国人が日本人と異なっている点 度数	質問2. 中国人があなたを困らせた点 度数	質問3. 中国人の対人関係の特徴 度数	
BC1 社会制度・生活スタイルの側面	国籍・政治的差別	愛国心・大國意識 2 国籍に対する意識 1	日本人に対する差別 6 日本人を特別視する 2 政治・国際関係・歴史の話 3	愛国心 1	
	常識の相違	物事に対する考え方・捉え方が異なる 4 生活習慣・社会事情が異なる 11 食習慣が異なる 4 大切に・重視していること・好み異なる 6	常識・習慣・スタイルが違う 7 コミュニケーションの仕方の違い 5	常識・習慣・スタイルが違う 5 食習慣が異なる 1 コミュニケーションの仕方の違い 3 子どものしつけがあまい・子どもに対する期待 3	
BC2 気質・性格的側面	大陸気質	約束を重視しない 2 時間にルーズ 7 声大きい 6 マナー・礼儀・モラル・公衆道徳のなさ 21 公衆衛生の問題 10 細かいことを気にしない 4 計画性がなく、アバウトさ 3	時間・契約・約束守らない 13 声大きい 3 マナー・公共衛生・礼儀・モラルの欠如 35 掃除しない 2 計画性がなく、突然の注文 8 適当さ 6 素直すぎる 1	大きな声 3 モラルの欠如 1 細かいことを気にしない 5 表裏がない 4	
	フレンドリー	気前が良い 3 取っつきやすさ・フレンドリー 14 親しい人にとことん親しむ 3 人間関係重視 3 対人関係の距離が近い 5	羽振りが良く、割り勘に応じない 2 親切すぎる 1 パーソナルスペースが近い 2	気前が良く、割り勘しない 3 気さくに仲良くなれる・フレンドリー 14 親しくなると、親密・身内扱い・家族のように 18 人とつながることを重視する 4 友達の友達は友達 2 距離が近い・スキンスリップ 5 付き合いが広く浅く 2	
	自己中心的な強い自己表現	自己中心・他人に思いやらない 13 他人の目や思いを気にしない 2 主張が強く、はっきりしている 7 遠慮がない 2 発言がストレート 4 以心伝心が効かない 2 雄弁・おしゃべりが好き 2 強引 1 善し悪しを付けたがる 2 謝らない 4 短気 1	思いやりが少ない 4 人の話を聞かない 3 自己主張が強い 8 遠慮がない 2 自己勝手 4 頼みごとが強引 9 嫌なものをけなす 2 悪くても謝らない 4 言い訳する 3	自己中心的 3 周りのこと気にしない 5 言い合う・意見をはっきり主張する 5 よくしゃべる 2 押しが強い・強引 1 人の悪さを容赦なく 1 怒りっぽい 3	
	人を信用しない	人を信用しない 3	信頼関係の構築に時間を要する 2	人を信用しない 5	
	競争的・非協調		競争意識が強い 1 協調性がない 4	競争意識が高い 2	
	頑固		言葉や会社の仕組みを理解しようとしていない 2 思い込みが激しい 3		
	優しさ	老人・幼児などに優しい 3	親切 1	女性に優しい 1	
	BC3 対人的側面	メンツ・プライド	メンツ重視 6 プライド 2	メンツを気にしすぎる 1	見栄やメンツを重視 8 自分を大きく見せる・自信過剰 3
		家族主義	家族が大事 3		家族や身内を大事にする 12 故郷を重視する 4
		プライバシーの認識	人の個人の問題に入り込む 4	プライバシーの無視 6 ものを借りて返さない 2	プライバシーを無視・噂を拡散する 4
功利的		お金に目がない 3 功利的な対人関係形成 5		拝金主義 2 相手を功利的に付き合い合う 1	
権力・人脈工作		年功序列 3	人脈の重要性 2	権力や上下関係の世界 13 コネ・人脈の重要性 4 宴会のコミュニケーション 2	
仲直りの難しさ				関係が悪くなると修復不可能 2	
BC4 仕事の側面	責任感のなさ	責任感が薄い 2 仕事にドライ 4 諦めが早い・さっぱり・あっさり 3 サービス従業員の態度の悪さ 4	仕事に責任感がない 4 会社や仕事に熱意がない 5 努力しない 1 レストラン店員の対応の悪さ 2		
	革新的精神	創造力・好奇心 3 合理性・効率の重視 6			

「BC1. 社会制度・生活スタイルの側面」は、「国籍・政治的差別」と「常識の相違」という2つのMCを含んだ。前者は愛国心や日本人への特別視といった内容によって、後者は独自の社会事情による常識などの相違といった内容によって構成された。

これらの結果は対人関係そのものではないものの、対人関係に影響を与える背景要因になり得ると考えられる。この内容は、近藤（1981）の指摘しているカルチャーショックを引き起こす社会環境要因にある「精神的・文化的環境」と一致する。また、Cushner & Brislin（1996）で言及されている異文化との出会いがもたらす課題のうち、とりわけ「知識領域」の「しきたり」や「価値観」、そして、「文化的相違の基礎」の「カテゴリー化」、「情報の分化」、「内/外集団の区別」などのサブカテゴリーと対応している。

「BC2. 気質・性格的側面」は7つのMCを含んだ。具体的には、細かいことを気にしない・マナー/ルールのなさなどといった「大陸気質」、取っつきやすさや対人距離の近さなどといった「フレンドリー」、自己を中心とした主張を通す言動などといった「自己中心的な強い自己表現」、容易に他者を信頼しないなどといった「人を信用しない」、協力より、競争意識などといった「競争的・非協調」、自分に慣れないやり方への拒否反応などといった「頑固」、社会的弱者への配慮などといった「優しさ」、といった内容によって構成された。

「BC3. 対人的側面」は6つのMCを含んだ。具体的に、メンツを重視するなどといった「メンツ・プライド」、家族や身内を最優先するなどといった「家族主義」、他人のプライバシー意識の欠落などといった「プライバシーの認識」、金銭や利益につながる対人関係の形成などといった「功利的」、権力・コネ・人脈形成の働きなどといった「権力・人脈工作」、対人関係修復の難しさなどといった「仲直りの難しさ」、といった内容によって構成された。これらの内容は前述のCushner & Brislin（1996）で言及されている異文化との出会いがもたらす課題のうち、「知識領域」の「階層と地位」や「集団と個人の重要性」、「しきたり」、そして、「文化的相違の基礎」の「帰属」、「情報の分化」などのサブカテゴリーと対応している。

毛・大坊（2006）は、中国にいる（た）日本人留学生を対象に、中国人の人づきあいスタイルに関して、そして、毛（2013）は中国人留学生を指導・世話する立場にある日本人を対象に、中国人留学生の日本文化適応上の課題に関して、それぞれ自由記述調査を行った。この2つの研究においては、カテゴリーの命名が本研究と異なるものの、本研究で得られた「BC2. 気質・性格的側面」と「BC3. 対人的側面」にある内容と一部、あるいは完全に一致している。ただし、それらの研究の結果と比べて、本研究で得られた内容は、より中国人同士の対人関係や中国国

内の独自の事情に焦点を当てるものが多い。

「BC4. 仕事の側面」は「責任感のなさ」と「革新的精神」という2つのMCを含んだ。前者は仕事に対する責任感のなさといった内容によって、後者は創造性などといった内容によって構成された。

上記のKJ法に基づいて得られたカテゴリーについては、本研究の著者たちによって再度吟味・推敲をした。その結果、「BC2. 気質・性格的側面」にあるより「対人的」な性質の強いMC、すなわち、「フレンドリー」、「人を信用しない」、「競争的・非協調」を「BC3. 対人的側面」に移動することとなった。また、3つの質問文から得られたTable1にあるそれぞれのSCに対して、趣旨が重複したものを統合した上、事実関係や行動傾向を文に作成し、より具体的な内容を提示した。最終的なカテゴリーおよび各SCから作成した文をTable2にまとめた。

## 本分類に対する社会生態学的な考察

Nisbett & Cohen（1996）は社会生態学的視点から米国南部に発生している暴力について説明した。この研究は、アメリカ南部にある入植の歴史的背景にさかのぼって、暴力の多発が、牧畜を行う者にとって重要な財産である家畜が略奪されてしまうと生業を失う「経済的要因」と、安全を保障する公的組織が不十分という「社会環境的要因」にあると帰結した。これらの要因により、南部の人々が自分で自分の財産を守るために自衛や暴力への依存を生み出した。すなわち、環境要因が人々の行動様式を規定すると言えよう。Nisbett & Cohen（1996）にならい、本研究で得られた邦人の認識した中国人の行動様式の源流を、以下のように、中国の自然環境や歴史的背景から探ることができると考えられる。

本研究で得られたMC「大陸気質」に含まれる「細かいことを気にしない」、「アバウトさ」などの気質的な側面は、中国の国土が広いことに起因すると考えられる。広大な国土故に、様々な事柄にきめ細かい配慮を尽くせない可能性が考えられる。また、中国には民族が多く、五千年と言われる長い歴史の流れの中、民族間の融合と抗争が繰り返され、そして王朝の交替が頻繁に行われてきた。このような状況の中で、自分の存在と意見をしっかりと他者に主張し、自らの評判に関わるメンツを重んじて、生存に必要な資源を獲得するために功利的に人脈を作る、などの行動様式は、いずれも自らの存続をかけたものだと考えられる。さらに、常に危機意識のもとで相手と共生し、身内との友好的関係を構築することが必要不可欠で、利害関係のある他者との競争が不可避であったと考えられる。国土が広く、民族が多い中国では、地域間、民族間でそれぞれがもっている基準とルールが入り交じることにより、統一した考え方が難しくなってくる。このことについては、

民族が相対的に少なく、国土が相対的に狭い日本でよく言われている「阿吽の呼吸」のような国民同士の相互理解が、中国において実現されることが極めて難しかったため、現在の中国人もそのようなレベルの相互理解を目標にしないのかもしれない。

本研究で得られた分類に対する仮説的構成

Nisbett & Cohen (1996) の環境要因が人々の行動様式を規定するとの知見に基づき、社会環境そのもの

が人々の性格形成を規定し、その性格がさらに人々の他者との対人関係あるいは物事の処理の仕方を規定すると考えることができる。このように考えると、本研究で得られた分類に対して、以下のような仮説的構成を行うことできる。すなわち、中国人の「BC3. 対人的側面」と「BC4. 仕事の側面」といった活動は「BC2. 気質・性格的側面」に基づいて行われ、その性格や気質の形成がさらに彼らの生活している社会にある「BC1. 社会制度・生活スタイルの側面」に帰結することができると考えられる。さらに、「BC1.

Table 2 中国の在留邦人における中国人の特徴に関する認識のまとめ

BC	MC	内容	BC	MC	内容		
BC1 社会制度・生活スタイルの側面	国籍・政治的差別	中国人は大国意識をもっている。 中国人は日本人に対して差別意識をもっている。 中国人は「日本人は金持ちだ」という意識をもっている。 中国人は歴史と政治の問題に対する独自の見解をもっている。 中国人は日本人と異なる愛国心をもっている。		フレンドリー	中国人は気が良く、羽振りが良い。 中国人は割り勘に応じない。 中国人は初対面であってもすぐに仲良くなれる。 中国人は日本人よりもフレンドリーな付き合い方をする。 中国人は親しい人にはとことん親しくなる。 中国人は親しい人には家族のように親切になる。 中国人は友達を全力で助ける。 中国人は日本人以上に人間関係を重視する。 中国人は人とのつながりを重視する。 中国人は友達つながりで人間関係のネットワークを作る。 中国人は日本人以上に他人との心理的距離が近い。 中国人は他人に対する物理的な距離が近い。 中国人はスキミングが多い。 中国人の付き合いは広くて浅い。		
	常識の相違	中国人は物事に対する独特な考え方や捉え方をもっている。 中国人には独特な生活習慣や社会事情がある。 中国人は独特な食習慣をもっている。 中国人の好みや重要視することは日本人と異なっている。 中国人のコミュニケーションの取り方は日本人と異なっている。 中国人の子どもに対する思いは日本人と異なっている。			メンツ・プライド 中国人は見栄を張る。 中国人は「自分が一番だ」と思っている。 中国人は自分のことを大きく見せたがる。		
BC2 気質・性格的側面	大陸気質	中国人の約束事に対する認識は日本人と異なっている。 中国人は時間を遵守しない。 中国人は大声で会話する。 中国人は公共の場での礼儀やマナーが悪い。 中国人の倫理道徳意識は日本人と異なっている。 中国は公衆衛生に問題がある。 中国人は衛生状況を気にしない。 中国人は細かい所にこだわらない。 中国人は聞かれたことや頼まれたことに対していい加減な返答を する。 中国人は計画性がない。 中国人はときどき素直になり過ぎる。 中国人は表裏がない。	BC3 対人的側面	家族主義	中国人は親や家族のことを日本人以上に大事にしている。 中国人は近しい人とそうでない人への対応が異なる。 中国人は日本人以上に同郷意識をもっている。		
	自己中心的な強い自己表現	中国人は自分のこと最優先で物事を考える。 中国人は他人に対する思いやりが少ない。 中国人は他人の目を気にしない。 中国人は人の話を理解しようとし ない。 中国人は自分の主張をはっきり伝える。 中国人は自己主張が強い。 中国人はお互いに言い合う。 中国人は遠慮しない。 中国人は発言がストレートである。 中国人は自分勝手なことをする。 中国人には以心伝心が通じない。 中国人は能弁である。 中国人には強引なところがある。 中国人は強引に頼みごとをする。 中国人は良し悪しをはっきりさせたがる。 中国人は嫌なものをけなす態度を示す。 中国人は非があっても謝らないあるいは認めない。 中国人は失敗に対して言い訳をする。 中国人には短気なところがある。 中国人は怒りっぽい性格である。		プライバシーの認識	中国人は他人のプライバシーに入り込む。 中国人は嗜好きである。 中国人には人のものを借りて返さないことがある。		
				功利的	中国人はお金に目がない。 中国人は「お金が全てだ」という考え方も持っている。 中国人は対人関係を作るときに功利的である。		
				権力・人脈工作	中国人は日本人以上に年功序列の考え方も持っている。 中国人は権力者にへつらう。 中国人は人脈やコネによって不平等になっている。 中国人は「宴会コミュニケーション」をする。		
				仲直りの難しさ	中国人との対人関係がこじれると修復が困難である。		
				人を信用しない	中国人は人を信用していない。 中国人は個人間の信頼関係の構築に時間がかかる。		
				競争的・非協調	中国人は競争意識が強い。 中国人は協調性に乏しい。		
				頑固	中国人は慣れないやり方に対して拒否反応を示す。 中国人は物事に対する思い込みが強い。	責任感のなさ	中国人は仕事に対する責任感が薄い。 中国人は仕事に対してドライである。 中国人は物事に取り組む際、あっさり諦めてしまう。 中国人のサービス業従業員の接客態度は悪い。
						革新的精神	中国人は創造力にあふれている。 中国人は日本人より合理性を重んじる。
	優しさ	中国人は老人や妊婦に親切である。 中国人は女性に優しい。					

注：Table 1 の「BC2. 気質・性格的側面」にある「フレンドリー」、「人を信用しない」、「競争的・非協調」という3つのMCには対人関係の要素が多く含まれると考えられる。著者たちの協議により、Table 1 のKJ法の結果を踏まえ、上記の3つのMCを「BC3. 対人的側面」に移動して、整理をまとめた。



社会制度・生活スタイルの側面」は直接「BC3. 対人的側面」と「BC4. 仕事の側面」といった活動に影響する可能性も考えられる (Figure 2)。

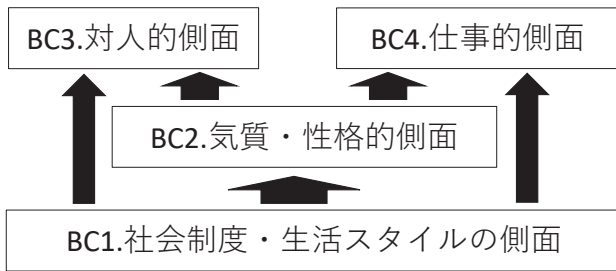


Figure 2 本研究で得られた BC の仮説的構成図

### 本研究で得られた回答と記憶の関係

西村 (1992) は、異文化に接する場合、違和感ばかりが先に立ってしまうと、異文化への不適応につながることを指摘している。そうした違和感や不安は自分のこれまでの記憶などと照らし合わせることによって経験される。しかし、人間の記憶に及ぼす文化の影響を考慮する必要がある。池田・村田 (1991) は、記憶のスキーマが先入観やステレオタイプ、そして偏見などによって歪んでしまうことを指摘している。また、箕浦 (1990) は新しい文化で経験したことに対する理解が生まれ育った社会でのスクリプトの影響を受けるとした。さらに、清水 (2002, 2005) は個人の記憶およびそれを支える認知機能が発達とともにその人が暮らす文化や社会の影響を強く受けると主張した。これらの先行研究から考えると、自由記述調査の方法を用いて、調査対象者の個人の記憶によって得られた本研究のデータは、調査対象者の様々な性格や性質、そしてこれまでの個人的な経験の影響を受けていることを考慮する必要がある。

### まとめと今後の展望

etic-emic アプローチ (Berry, 1989) に従えば、対人関係は文化共通的部分と文化特有な部分に分けることができる。本研究で得られた在留邦人の認識している中国人の対人行動上の「特徴」や「相違点」は、日本人にないもの、かつ、中国人に特有な部分と言える。

先述したように、箕浦 (1990) は、文化適応における認知・行動・情動の 3 要素の重要性を強調するとともに、成人期の「文化適応」は認知・行動レベルの変容にとどまると指摘している。この点から、本研究で得られた結果は日本人の中国文化適応に関わる認知面・行動面のポイントになり得ると考えられる。その際に、社会制度・生活スタイル、気質・性格、そして仕事の側面は基本知識 (認知面) として蓄積し、対人的側面は行動の仕方 (行動面) として、

中国人との対人行動に使用できると考えられる。

Berry et al. (1992) や渡辺 (1995) は、異文化適応の段階にある「危機期」での「文化変容」の方向が異文化に対する適応か不適応かの岐路となるため、「危機期」が重要な時期であると示唆した。そのため、「危機期」の前段階にある「葛藤期」にいる人々の経験から得られた本研究結果に基づいて、「葛藤期」において心理的介入を行えば、「危機期」でのスムーズな異文化適応につながるのではないかと予想される。今後、本研究で得られた質的データに基づいて、在留邦人から見た中国人の特徴項目に対して、大規模なアンケート調査を実施し、因子分析などの統計的手法でまとめ、在留邦人の認識した中国人の「特徴」や日中間の「相違点」の構造を検討し、本知見の頑健性を確認する。そのうえで、在留邦人の認識する中国人の特徴や日中文化の相違点と異文化適応を測定する既存尺度 (植松, 2004 など) の関連性を調べ、適応課題を明らかにする。さらに、異文化適応尺度を評価指標として用いながら、在留邦人の中国文化適応のトレーニングを実施し、邦人の適応レベルの向上を図るといった進め方が考えられる。

また、本研究では、鈴木 (1990) が提示した「滞在期間」と「文化間移行の動機」の 2 次元で文化間移行者の整理を引用し、本研究の対象者である留学生と海外勤務者の位置づけを明確にした。しかし、このような整理がある以上、動機 (もしくは留学生か勤務者か) や滞在期間によって中国人の特徴や文化適応課題に対する認識が異なる可能性が十分にあると考えられる。したがって、今後、対象者の「動機」と「滞在期間」による整理が必要と考えられる。

さらに、本研究では、Nisbett & Cohen (1996) の知見を引用しながら、自由記述から得られた分類に対して、仮説的構成を行った。しかし、本研究の分類については、BC の間だけではなく、MC の間、そして、SC の間でも、ミクロ・マクロの相互作用は十分にありえたりする。カテゴリー間につなぐ矢印は、部分的に双方向の矢印を引く場合など否定できないものもある。Nisbett & Cohen (1996) の知見のみでは、全ての側面を結論付けるには限界があると考えられる。今後、分類に対する仮説的構成を補強する議論など、さらなる検討が必要と考えられる。

### 利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

### 謝辞

本研究のデータに対する KJ 法に基づく分析に、吉野絹子先生 (神戸学院大学人文学部教授 (当時)) と



趙毅飛さん（神戸学院大学大学院人間文化学研究科（当時））にご協力いただきました。記して感謝を申し上げます。

## 引用文献

- Adler, P. S. (1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15, 13-23.
- 天児 慧 (2003). 中国とどう付き合うか 日本放送出版協会
- Berry, J. W. (1989). Imposed etics-emics-derived etics: The operationalization of a compelling idea. *International Journal of Psychology*, 24, 721-735.
- Berry, J. W., Kim, U., & Boski, P. (1988). Psychological acculturation of immigrants. In Y. Y. Kim & W. B. Gudykunst (Eds.), *Cross-Cultural Adaptation: Current Approaches* (pp. 62-89). Newbury Park, CA: Sage.
- Berry, J. W., Poortinga, Y. H., Segall, M. H., & Dasen, P. R. (1992). *Cross-cultural psychology: Research and applications*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cushner, K. & Brislin, R. W. (1996) *Intercultural interactions: A practical guide* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Furham, A. & Bochner, S. (1986). *Culture shock: Psychological reactions to unfamiliar Environments*. New York: Methuen.
- 外務省 (2021). 海外在留邦人数調査統計 (令和3年) Retrieved from [https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22\\_000044.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22_000044.html)
- Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. New York: Anchor Books.  
(ホール, E. T. 岩田慶治・谷 泰 (訳) (1979). 文化を超えて TBS ブリタニカ)
- Hwang, K. K. (2006). Constructive realism and confucian relationism: An epistemological strategy for the development of indigenous psychology. In U. Kim, K. S. Yang, & K. K. Hwang (Eds.), *Indigenous and cultural psychology: Understanding people in context* (pp. 73-108). New York: Springer.
- 池田謙一・村田光二 (1991). ころと社会—認知社会心理学への招待— 東京大学出版会
- 川喜田二郎 (1986). K J 法—渾沌をして語らしめる— 中央公論社
- 木村昌紀・毛 新華 (2013a). 日本人と中国人の親密なコミュニケーションは何が違うのか?—未知関係と友人関係を対象にした検討— 感情心理学研究, 21, Supplement 号, 9.
- 木村昌紀・毛 新華 (2013b). 日本人と中国人の討議的コミュニケーションは何が違うのか?—未知関係と友人関係を対象にした実験的検討— 日本心理学会第77回大会発表論文集, 145.
- 近藤 裕 (1981). カルチュア・ショックの心理 創元社
- Lysgaard, S. (1955). Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright Grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 7, 45-51.
- 毛 新華 (2013). 日本人から見た在日中国人留学生の文化適応の問題点—日本人を対象とする自由記述調査のデータより— 日本社会心理学会第54回大会発表論文集, 196.
- 毛 新華・大坊郁夫 (2006). 中国の若者の人づきあいスタイルについての研究—自由記述調査結果によるカテゴリカルな検討— 対人社会心理学研究, 6, 81-88.
- 毛 新華・大坊郁夫 (2012). 中国文化の要素を考慮した社会的スキル・トレーニングのプログラムの開発および効果の検討 パーソナリティ研究, 21, 23-39.
- 毛 新華・大坊郁夫 (2016). 中国文化要素が配慮された社会的スキル・トレーニングプログラムの効果—中国人大学生の自他評価からみた意識と行動の変化を中心とする検討— 社会心理学研究, 32, 22-40.
- 毛 新華・清水寛之 (2019). 訓示的教示アプローチによる日本人の中国文化適応の促進—大連市 (中国) の在留邦人を対象とした異文化適応セミナーの効果— 神戸学院大学心理学研究, 2, 1-8.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 箕浦康子 (1990). 文化のなかの子ども 東京大学出版会
- 日本学生支援機構 (2021). 2019 (令和元) 年度日本人学生留学状況調査結果 Retrieved from <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/nippon/data/2019.html>
- 西田ひろ子 (2007). 米国、中国進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦 風間書房
- Nisbett, R. E. & Cohen, D. (1996). *Culture of honor: The psychology of violence in the South*. Boulder, CO: Westview Press.  
(ニスベット, R. E. & コーエン, D. 石井敬子・結城雅樹 (編訳) (2009). 名誉と暴力—アメリカ南部の文化と心理— 北大路書房)
- 西村洲衛男 (1992). 文化とは 山中康裕・川上範夫・西村洲衛男 (編) 臨床心理学第5巻 文化・背景 (pp.3-21) 創元社
- Oberg, K. (1960). Culture Shock: Adjustment to new cultural environment. *Practical Anthropology*, July-August, 177-182.
- Peng, K., & Nisbett, R. E. (1999). Culture, dialectics, and reasoning about contradiction. *American Psychologist*, 54, 741-754.

- 清水寛之 (2002). 子どもの認識の発達と文化 井上智義 (編) 異文化との出会い! 子どもの発達と心理—国際理解教育の視点から— (pp.12-28) ブレーン出版
- 清水寛之 (2005). 文化と記憶 金児暁嗣・結城雅樹 (編) 文化行動の社会心理学 (pp.8-19) 北大路書房
- 園田茂人 (2001). 中国人の心理と行動 日本放送出版協会
- 鈴木一代 (1990). 異文化に滞在する家族の適応に関する研究 東和大学紀要, 16, 175-187.
- 鈴木一代 (1997). 異文化遭遇の心理学—文化・社会の中の人間— ブレーン出版
- Takai, J. & Ota, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 224-236.
- 田中共子 (2000). 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ出版
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview Press.  
(トリアンデイス, H. C. 神山貴弥・藤原武弘 (編訳) (2002). 個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化— 北大路書房)
- 植松晃子 (2004). 日本人留学生の異文化適応の様相—滞在国の対人スキル, 民族意識, セルフコントロールに着目して 発達心理学研究, 15, 313-323.
- 渡辺文夫 (1995). 異文化接触の心理学—その現状と理論— 川島書店
- 吉村 章 (2012). 中国人との実践交渉術 綜合法令出版

—2021.9.4 受稿 2021.11.2 受理—

# 攻撃性が自己嫌悪に結びつく要因の検討

夏目 瑞希 神戸学院大学心理学研究科心理学専攻 本岡 寛子 近畿大学総合社会学部  
道城 裕貴 神戸学院大学心理学部 村井 佳比子 神戸学院大学心理学部

## A study on the factors that allow aggression to lead to self-disgust

Mizuki Natsume (*Graduate School of Psychology, Kobe Gakuin University*)

Hiroko Motooka (*Faculty of Applied Sociology, Kindai University*)

Yuki Dojo (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

Keiko Murai (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

近年、いじめ問題が深刻になっている。いじめ被害者だけでなく、加害行為を示す者も高い抑うつ状態であることが報告されており、支援の必要性が指摘されている。そこで本研究は、攻撃性が自己嫌悪に結びつく要因について検討し、支援の手がかりを得ることを目的とした。大学生 132 名 (20 ± 1.88 歳) を対象に質問紙調査を行った。攻撃性高群と低群について、攻撃性が攻撃後の認知を媒介して自己嫌悪に陥るというモデルの検証を行ったところ、攻撃性高群においてモデルが支持され、攻撃性が高い場合、攻撃後の認知が自己嫌悪に影響することが示された。攻撃後の認知の中でも特に対人不安的認知が高いほど攻撃性が高いことが示されており、これが自己嫌悪や抑うつ状態を引き起こす要因となっていることが推測された。支援には、対人不安的認知を緩和するための認知的アプローチに加えて、怒りの感情に対処しつつ、対人不安を乗り越えて他者と良好な関係を構築するためのコミュニケーション技術訓練が有効であると考えられる。

キーワード：攻撃性、自己嫌悪、攻撃後の認知、社会的望ましさ

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2021, Vol.4, No.1, pp.41-46

## 問題と目的

いじめは重要な社会問題であり、被害経験、加害経験ともにメンタルヘルスに影響を及ぼす (e.g., Beane, 1998; 岡安・高山, 2000; 村山他, 2015)。しかし、加害者のケアまで目が行き届いていない現状があるように思う。加害行為には攻撃性が関与していると考えられることから、攻撃行動の分類について概観する。

攻撃行動とは「人が他者を故意に傷つける行為のことである」と定義されている (Feshbach, 1964)。攻撃行動は反応的攻撃 (reactive aggression) と能動的攻撃 (proactive aggression) に分類できる (Dodge, & Coie, 1987)。反応的攻撃は、欲求阻止や知覚された脅威によって引き起こされるもので、たとえば仲

間からからかわれたり、挑発されたりした結果、怒りが抑えられずに報復として行われる攻撃である。能動的攻撃は、人を傷つけること以外の何らかの目標を達成するために、その手段として他者を支配したり、仲間を使って意図的・計画的に行われたりする攻撃である。先行研究では、反応的攻撃性が高い者は、抑うつ傾向や身体的攻撃行動が高く、能動的攻撃性が高い者は、反社会的行動欲求や言語的攻撃行動が高いことが明らかにされている (濱口・石川・三重野, 2009; 濱口・藤原, 2016; 濱口, 2017; 岡田, 2012)。松尾 (2002) は、意図的・継続的に行われるいじめは、能動的攻撃と関連が深いと述べている。一方、村山他 (2015) は抑うつが高く、メンタルヘルスへの支援を必要とするいじめ加害行為を示す生徒について指摘しており、抑うつと関連のある

反応的攻撃性もいじめに影響を及ぼしていることが考えられる。齊藤・沢崎・今野 (2008) は、周囲からの評価やミスを過度に気にするなどの完全主義が強いほど抑うつが強まり、抑うつが強まるほど敵意や怒りが高まり、敵意や怒りが高まるほど自己への攻撃性が強まることを指摘している。自己への攻撃性には、身体への攻撃 (自傷行為) と、自己への敵意 (自己嫌悪) がある。

つまり、いじめ加害行為を示す者は、周囲から受け入れられるよう相手を傷つけないよう留意しているにも関わらず、攻撃行動を止めることができず、これを振り返って自己嫌悪に陥り、抑うつ状態となって、さらに反応的攻撃性を高め、コントロール不能になっている可能性があると考えられる。本研究では、相手を攻撃した後の考えを「攻撃後の認知」と呼ぶことにした。

本研究の目的は、反応的攻撃性が攻撃後の認知を媒介して自己嫌悪に与える影響を検討すること、攻撃性、攻撃後の認知、自己嫌悪、社会的望ましさそれぞれの関連をみることであった。反応的攻撃のようにコントロールできない攻撃性を生起させてしまう者が、どのように自己嫌悪に陥るのかを見出すことで、適切な加害者支援の方向性を検討する手がかりを得る。

## 方 法

### 調査時期

2019 年 6 月 18 日から 7 月 22 日に実施した。

### 調査対象者

関西圏の私立大学の大学生 146 名で、このうち回答に不備があったものを除く 132 名 (男性 48 名、女性 83 名、その他 1 名、平均年齢 20 歳 (範囲 18 歳 - 36 歳)、標準偏差 1.88) を分析対象とした。

### 調査実施手続き

事前に調査内容をポスターで告知し、自発的に協力を申し出てくれた者を対象に実施した。講義室内で実施した場合、質問紙をその場で配布、記入終了後、回収した。また、講義室外で実施した場合、封筒に入れた質問紙を配布した。回答はなるべく人がいないところで行うように伝え、後日封筒に入れられた質問紙を回収した。調査協力者には、調査終了後、謝礼として学内で使用できるポイント 1 点 (調査などに協力した学生に与えられるポイント) を渡した。

## 倫理的配慮

調査への参加は自由であり、参加に同意した後も同意を撤回できること、個人の匿名性は守られることを書面および口頭で説明し、調査参加の同意を書面で得た。

## 質問紙の構成

### 1. フェイスシート

年齢と性別をたずねた。

### 2. 攻撃性尺度

濱口 (2017) から反応的攻撃のみを引用、一部項目を追加したものを使用した。各下位尺度とその項目数は、「易怒性」10 項目 (「自分は怒りっぽいほうだと思う」「少しでも思うとおりにいかないと、すぐにはらをたてる」など)、「報復意図」6 項目 (「じゃまをされたら、やり返さずにはられない」「いやなことをされたら、倍にして返したい」など)、「怒り持続」7 項目 (「怒りは長く続くほうだ」「いったんはらをたてると、なかなかおさまらない」など)、「怒り強度」4 項目 (「まわりの人が驚くほど、はらをたてることがある」「身をふるわせるほどの怒りを感じる」とある)、「外責的認知」5 項目 (「人に足を引っ張られて、思うようにいかないことが多い」「人がじゃまをするので、物事がうまくいかないことが多い」など)、以上 5 下位尺度、合計 32 項目であった。6 件法 (1: 全く思わない, 2: 思わない, 3: やや思わない, 4: やや思う, 5: 思う, 6: 非常に思う) で回答を求めた。

### 3. 最近の怒り表出に関する質問

最近怒りを表した、または感じた相手との関係性と出来事について自由記述で回答を求めた。

### 4. 攻撃後の認知評価尺度

攻撃後にどのような認知が生起するかを大学生 10 名にたずね、これを参考に尺度を作成した。16 項目を 6 件法 (1: 全く思わない, 2: 思わない, 3: やや思わない, 4: やや思う, 5: 思う, 6: 非常に思う) でたずねた。回答時には、3 の最近の怒り表出に関する自由記述の出来事を思い出して回答するよう教示した。

### 5. 自己嫌悪尺度

水間 (1996) で用いられていた「～事がある」「～ときがある」という語尾を、文章の意味が明確になるよう「～する」「である」と言い切りに変更し、死に関する項目を削除したものを使用した。「自分を腹立たしく思う」「自分にうんざりする」といった自己嫌悪に関連する 19 項目を 6 件法 (1: 全く思わない, 2: 思わない, 3: やや思わない, 4: やや思う, 5: 思う, 6: 非常に思う) でたずねた。回答時には、最近の怒り表出に関する自由記述の出来事を思い出して回答するよう教示した。



## 6. 社会的望ましさ尺度

北村・鈴木（1986）と中村・西迫・森上・桑原（2012）と谷（2008）から引用し、語尾を「～できる」「～したことはない」という表現から、「～すべきだ」「～すべきでない」に変更したものを使用した。全20項目（「無配慮な行動はとるべきでない」「自分と違う意見を受け入れるべきだ」など）を6件法（1：全く思わない、2：思わない、3：やや思わない、4：やや思う、5：思う、6：非常に思う）でたずねた。

## 結果

### 各尺度の因子構造と信頼性の検討

#### 1. 攻撃性尺度

32項目すべてを用いて、因子分析（最尤法、斜交回転）を実施し、因子負荷量が.35以下の3項目と1を超える1項目を削除した結果、先行研究と同様の5因子が得られた。それぞれ先行研究と同様に、第1因子「易怒性」、第2因子「報復意図」、第3因子「怒り持続性」、第4因子「怒り強度」、第5因子「外責的認知」と命名した。Cronbachの $\alpha$ 係数を用いて各下位尺度の内的整合性を検討したところ、「易怒性」は.92、「報復意図」は.89、「怒り持続性」は.81、「怒り強度」は.80、「外責的認知」は.83であり、十分な内的整合性を有することが示された。

#### 2. 攻撃後の認知評価尺度

16項目すべてを用いて、因子分析（最尤法、斜交回転）を実施し、因子負荷量が.35以下の1項目を削除した結果、3因子が得られた（Table 1 参照）。それぞれ、第1因子「後悔」、第2因子「加害・被害的

認知」、第3因子「対人不安」と命名した。Cronbachの $\alpha$ 係数を用いて各下位尺度の内的整合性を検討したところ、「後悔」は.93、「被害・加害的認知」は.93、「対人不安」は.71であった。よって、十分な内的整合性を有することが示された。

#### 3. 自己嫌悪尺度

19項目すべてを用いて、因子分析（最尤法、斜交回転）を実施した結果、1因子であることが確認された。Cronbachの $\alpha$ 係数は.98であり、十分な内的整合性を有することが示された。

#### 4. 社会的望ましさ

20項目すべてを用いて、因子分析（最尤法、斜交回転）を実施し、因子負荷量が.35以下の6項目を削除した結果、最終的に1因子であることが確認された。Cronbachの $\alpha$ 係数は.84であり、十分な内的整合性を有することが示された。

### 各変数の記述統計量と相関分析

Table 2 に各変数間の相関と平均値および標準偏差を示す。攻撃性と攻撃後の認知の関連については、報復意図（攻撃性）と後悔（攻撃後の認知）の間に負の相関がみられた（ $r = -.22, p < .05$ ）。攻撃性の易怒性、怒り持続性と怒り強度は、対人不安（攻撃後の認知）と正の相関がみられた（ $r = .36, p < .01$ ； $r = .30, p < .01$ ； $r = .31, p < .01$ ）。攻撃性と自己嫌悪の関連については、易怒性、怒り持続性、怒り強度（攻撃性）と自己嫌悪の間に正の相関がみられた（ $r = .28, p < .01$ ； $r = .31, p < .01$ ； $r = .25, p < .01$ ）。報復意図（攻撃性）と自己嫌悪の間に負の相関がみられた（ $r = -.18, p < .05$ ）。

Table 1 攻撃後の認知評価尺度因子分析結果

	後悔	加害・被害的認知	対人不安	$h^2$
1 しなければよかったと思う。	.62	.17	.06	.57
2 どうしてしてしまったのだろうと思う。	.58	.20	.07	.56
3 取り返しのつかないことをしてしまったと思う。	.67	.07	.15	.59
4 相手のことを考えられなかったと思う。	.98	-.03	-.06	.90
5 相手の立場になってもっと考えるべきだったと思う。	.97	.00	-.07	.91
6 もっと良い表現の方法があったのではと思うことがある。	.76	.09	.03	.69
7 嫌われてしまったと思う。	-.03	.53	.24	.37
12 嫌な気持ちにさせたと思う。	.14	.79	-.04	.78
13 暗い気持ちにさせたと思う。	-.09	.96	-.04	.81
14 悲しい気持ちにさせたと思う。	.12	.83	.00	.82
15 不快な気分させたと思う。	.12	.84	-.12	.80
16 傷つけてしまったと思う。	.13	.79	.08	.81
8 人と仲良くなることは難しいと思う。	-.07	.03	.80	.63
9 人に好かれなと思う。	.08	.00	.80	.67
10 友達がいなくなったらどうしようと思う。	.30	-.03	.37	.27
因子寄与	6.30	6.25	2.20	14.75
因子間相関				
1 後悔		.61	.28	
2 加害・被害的認知		-	.20	
3 対人不安		-	-	

Table 2 記述統計量と相関分析 (n=132)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	平均	SD
攻撃性											2.70	1.40
1. 易怒性		.47 **	.56 **	.52 **	.47 **	.03	.04	.36 **	.28 **	-.17	2.70	1.38
2. 報復意図			.36 **	.32 **	.47 **	-.22 *	-.15	.09	-.18 *	-.34 **	2.77	1.37
3. 怒り持続性				.38 **	.37 **	.04	.07	.30 **	.31 **	-.08	3.14	1.46
4. 怒り強度					.36 **	.14	.16	.31 **	.25 **	-.15	2.37	1.44
5. 外責的認知						-.09	.01	.17	.13	-.25 **	2.30	1.16
攻撃後の認知											3.09	1.52
6. 後悔							.67 **	.36 **	.62 **	.21 *	2.98	1.50
7. 加害・被害的認知								.27 **	.49 **	.25 **	3.07	1.44
8. 対人不安									.49 **	.03	3.21	1.58
9. 自己嫌悪										.18 *	2.60	1.53
10. 社会的望ましさ											4.70	1.15

p < .01 \*\*, p < .05 \*

攻撃性と社会的望ましさの関連については、報復意図、外責的認知（攻撃性）と社会的望ましさの間に負の相関がみられた ( $r = -.34, p < .01$ ;  $r = -.25, p < .01$ )。

攻撃後の認知と自己嫌悪の関連については、攻撃後の認知 3 因子すべてと自己嫌悪の間に正の相関がみられた ( $r = .62, p < .01$ ;  $r = .49, p < .01$ ;  $r = .49, p < .01$ )。攻撃後の認知と社会的望ましさの関連については、攻撃後の認知の後悔、加害・被害的認知と社会的望ましさの間に正の相関がみられた ( $r = .21, p < .05$ ;  $r = .25, p < .01$ )。

自己嫌悪と社会的望ましさの関連については、自己嫌悪と社会的望ましさの間に正の相関がみられた ( $r = .18, p < .05$ )。

以上の結果をまとめると易怒性、怒り持続性、怒り強度が高いほど攻撃行動後に対人不安的認知や自己嫌悪が高くなるが、報復意図が高いほど攻撃行動後に後悔や自己嫌悪が低くなるといえる。また、報復意図や外責的認知が高いほど社会的望ましさが低く、社会的望ましさが高いほど攻撃後の認知が働き、自己嫌悪が高くなるといえる。

### 攻撃性と自己嫌悪の媒介分析

攻撃性は攻撃後の認知を媒介して、最終的に自己嫌悪と関連するというモデルを検討するために媒介分析を行った。攻撃性を独立変数、自己嫌悪を従属変数とした媒介変数なしモデルでは、有意であった ( $\beta = .21, p < .05$ )。攻撃性から攻撃後の認知を媒介して、自己嫌悪への間接効果の有意性を検討するために媒介分析を行ったところ、攻撃性から攻撃後の認知は有意ではなかった ( $\beta = .07, n.s.$ )。攻撃後の認知から自己嫌悪へは正の影響を示した ( $\beta = .65, p < .01$ ) (Fig.1 参照)。よって攻撃性は攻撃後の認知に影響しておらず仮説モデルは支持されなかった。

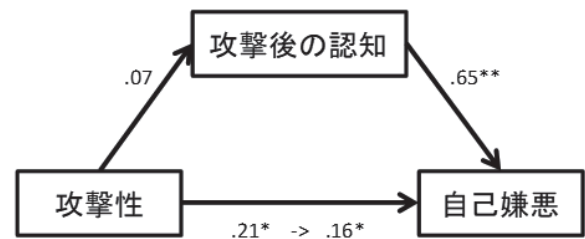


Fig.1 攻撃性と自己嫌悪との媒介分析結果

注) 係数は標準化係数であり、矢印の右側は媒介変数投入後の直接効果を示す。

\*\*p < .01, \*p < .05

### 攻撃性高群と低群の攻撃性と自己嫌悪の媒介分析

それぞれの攻撃性、攻撃後の認知、自己嫌悪の平均値、標準偏差およびt検定の結果を Table 3 に示す。攻撃性高群の攻撃性の平均値は 3.94、攻撃性低群の攻撃性の平均値は 1.75 であった。対応のない t 検定をおこなった結果、攻撃性高群の方が攻撃性低群よりも有意に攻撃性が高かった ( $t(50) = 18.38, p < .001$ )。攻撃性高群の攻撃後の認知の平均値は 3.21、攻撃性低群の攻撃後の認知の平均値は 3.20 であった。対応のない t 検定をおこなった結果、有意差はみられなかった ( $t = 0.02, n.s.$ )。攻撃性高群の自己嫌悪の平均値は 2.86、攻撃性低群の自己嫌悪の平均値は 2.57 であった。対応のない t 検定をおこなった結果、有意差はみられなかった ( $t = 0.66, n.s.$ )。

攻撃性が高い群 25 名 (平均値 +0.5SD 以上) と低い群 27 名 (平均値 -0.5SD 以下) に分けて、再び媒介分析を行った。攻撃性の高い群において、攻撃性を独立変数、自己嫌悪を従属変数とした媒介変数なしモデルでは有意であった ( $\beta = .51, p < .01$ )。攻撃性から攻撃後の認知を媒介して、自己嫌悪への間

Table 3 攻撃性高群と低群の各尺度の平均値と標準偏差および *t* 検定の結果

	攻撃性高群 ( <i>n</i> =25)		攻撃性低群 ( <i>n</i> =27)		<i>t</i> 値	自由度	有意確率 (片側)
	平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>			
攻撃性	3.94	1.47	1.75	1.04	18.38	50	.000 **
攻撃後の認知	3.21	1.71	3.20	1.78	0.02	50	.492
自己嫌悪	2.86	1.80	2.57	1.78	0.66	50	.255

\*\* *p* < .001

接効果の有意性を検討するために媒介分析を行ったところ、攻撃性は攻撃後の認知へ正の影響を示した ( $\beta = .49, p < .05$ )。攻撃後の認知も自己嫌悪へ正の影響を示した ( $\beta = .69, p < .01$ ) (Fig.2 参照)。よって仮説モデルは支持された。

次に攻撃性の低い群において、攻撃性を独立変数、自己嫌悪を従属変数とした媒介変数なしモデルでは有意ではなかった ( $\beta = -.05, n.s.$ )。攻撃性から攻撃後の認知を媒介して、自己嫌悪への間接効果の有意性を検討するために媒介分析を行ったところ、攻撃性から攻撃後の認知は有意ではなかった ( $\beta = -.03, n.s.$ )。攻撃後の認知は、自己嫌悪に正の影響を示した ( $\beta = .59, p < .01$ ) (Fig.3)。よって仮説モデルは支持されなかった。

以上の結果をまとめると、攻撃性高群では攻撃行動後、攻撃後の認知が働き自己嫌悪に陥るというモデルが示された。

### 考 察

本研究の目的は、攻撃性が攻撃後の認知を媒介し、自己嫌悪に与える影響について検討することであった。全対象者のデータを用いた媒介分析では、攻撃性が攻撃後の認知を媒介し、自己嫌悪に陥るというモデルは支持されなかった。そこで、攻撃性の高群と低群について再度モデルの検証を行ったところ、攻撃性高群においてモデルが支持され、攻撃性が高い場合、攻撃性が自己嫌悪に直接結びつくわけではなく、攻撃後の認知が自己嫌悪に影響することが示された。攻撃後の認知の中でも、特に「人と仲良くなるのは難しい」「人に好かれない」という対人不安的認知が高いほど、攻撃性が高いことが示されており、これが自己嫌悪を引き起こす要因となっていると推測した。

本研究の結果は、いじめ加害者支援として、自分の攻撃性を上手にコントロールできず、「人と仲良くなることは難しい」と感じ罪悪感を強めている者に対して、対人不安的認知を解消するようなかかわりが必要であること、親しい関係において、自分の気持ちを適切に伝えるスキルを身につける必要性を示すことができた。今後は、アンガーマネジメントなどの認知行動療法的アプローチが有効であると考えられ、臨床現場でも活用できるプログラムが望まれる (e.g., 大森・本田, 2020)。

本研究の対象者は全体的に攻撃性が高い者が少なく、実際に加害行為を示しているかどうか不明であるため、検証したモデルが有効かどうかは再度検討する必要がある。また、文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2020) の、「令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」によると、いじめの認知件数は、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の中で小学校が最も多いが、本研究で検討した攻撃後の認知は大学生を対象に作成されている。小学生がこのような認知を生起させているかどうかについて、発達に合わせた項目に修正し、検証しなければならない。よって再度対象者を絞り、攻撃性が自己嫌悪に結びつく要因の検討を行う必要があるだろう。

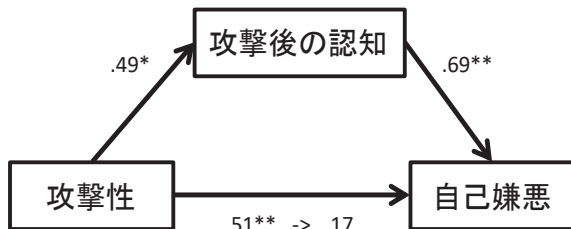


Fig.2 攻撃性高群の攻撃性と自己嫌悪との媒介分析結果  
注) 係数は標準化係数であり、矢印の右側は媒介変数投入後の直接効果を示す。

\*\* *p* < .01, \* *p* < .05

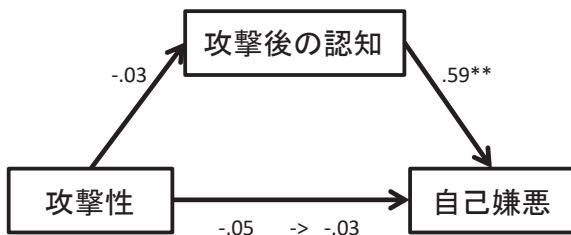


Fig.3 攻撃性低群の攻撃性と自己嫌悪との媒介分析結果  
注) 係数は標準化係数であり、矢印の右側は媒介変数投入後の直接効果を示す。

\*\* *p* < .01, \* *p* < .05

## 利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 引用文献

- Beane, A. (1998). The trauma of peer victimization. In T. W. Miller, (Ed.), *Children of trauma: Stressful life events and their effects on children and adolescents* (pp.205-218). Madison, CT: International University Press.
- Dodge, K. A., & Coie, J. D. (1987). Social information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1146-1158.
- Feshbach, S. (1964). The function of aggression and the regulation of aggressive drive. *Psychological Review*, 71, 257-272.
- 濱口 佳和 (2017). 大学生の能動的・反応的攻撃性に関する研究——尺度構成と攻撃的行動傾向との関連の検討—— 教育心理学研究, 65, 248-264.
- 濱口 佳和・藤原 健志 (2016). 高校生の能動的・反応的攻撃性に関する研究——尺度構成, 2 種類の攻撃行動との関連ならびに下位類型の検討—— 教育心理学研究, 64, 59-75.
- 濱口 佳和・石川 満佐育・三重野 祥子 (2009). 中学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連——2 種類の攻撃性と反社会的行動欲求および抑うつ傾向との関連—— 教育心理学研究, 65, 248-264.
- 北村 俊則・鈴木 忠治 (1986). 日本語版 Social Desirability Scale について 社会精神医学, 9, 173-180.
- 松尾 直博 (2002). 学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向——学校・学級単位での取り組み—— 教育心理学研究, 50, 487-499.
- 水間 玲子 (1996). 自己嫌悪感尺度の作成 *Japanese Journal of Educational Psychology*, 44, 296-302.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2020). 令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 文部科学省 Retrieved from [https://www.mext.go.jp/content/20211008-mext\\_jidou01-100002753\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211008-mext_jidou01-100002753_01.pdf) (2021 年 10 月 28 日)
- 村山 恭朗・伊藤 大幸・浜田 恵・中島 俊思・野田 航・片桐 正敏・辻井 正次 (2015). いじめ加害・被害と内在化/外在化問題との関連性 発達心理学研究, 26, 13-22.
- 中村 慎佑・西迫 成一郎・森上 幸夫・桑原 尚史 (2012). 社会的行動における望ましさとは何か? ——社会的規範の普遍性と可変性に関する研究 (2) —— 関西大学総合情報学部紀要, 37, 23-35.
- 岡田 涼 (2012). 大学生における日常の受容・拒絶経験と自尊心, 攻撃性との関連 パーソナリティ研究, 21, 84-86.
- 岡安 孝弘・高山 巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- 大森 良平・本田 恵子 (2020). 小学校における予防的心理教育としてのアンガーマネジメント D プログラムの理論的枠組み 早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊, 27, 137-147.
- 斎藤 路子・沢崎 達夫・今野 裕之 (2008). 自己志向の完全主義と攻撃性および自己への攻撃性の関連の検討——抑うつ, ネガティブな反すうを媒介として—— パーソナリティ研究, 17, 60-71.
- 谷 伊織 (2008). バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 17, 18-28.

—2021.9.9 受稿 2021.11.2 受理—



# 障害当事者のものがたりを聴く～人生七転び八起き～

京都頸髄損傷者連絡会相談役 エイブル・パフォーマンス集団「ガラ(柄)」代表 木村 善男

編集／京都光華女子大学健康科学部心理学科 大谷 多加志

大谷 (多加志) 大変お待たせしました。

今日のゲストスピーカーの木村善男さんをご紹介します。京都頸髄損傷者連絡会相談役およびエイブル・パフォーマンス集団「ガラ(柄)」の代表を務めておられます。エイブル・パフォーマンス集団「ガラ(柄)」は、障害当事者と支援者が協働して教材の開発、研修、研究などに取り組むグループです。

木村さんは、20歳のときに交通事故に遭い、そこで、生涯、車椅子生活になることを宣告されました。手足が二度と動かないことを知って、生涯を悲観し、自殺を考えたときもあるそうです。それから本当にさまざまな経過を経て、今日は、この辺りの話がたくさん出てくるかと思いますが、今では周囲の人たちから、「遊びの達人」とか、「充実した生活を送っていてうらやましい」と言われるような生活を送っておられます。趣味で活動的な日々を送る一方、障害当事者団体にも所属して、行政との交渉、障害者の防災、障害者の就労の場の開拓など、多岐にわたる活動をしておられます。

「振り返ると、人生、常に七転び八起き」と言っておられる木村さんの当事者の物語を、今日は聞かせていただければと思っています。木村さん、どうぞよろしくお祈りします。

木村 はじめまして。木村です。本日はよろしくお祈りします。

最初に、目の前にいる私がどのような障害があるかを話したいと思います。障害名で言うと「頸髄(けいずい)損傷」です。字のごとく、首の脊髄を傷めてしまった頸髄損傷者です。頸髄損傷は、さまざまな障害を引き起こします。

四肢麻痺とは、手足が動かないということです。もっと詳しく言うと、肩から上は動きますが、腕、腹筋、背筋が麻痺しています。腕は、どうにか少し動くという感じです。

体幹機能障害とは、自分の体位を維持できないことです。例えば、車椅子に座るときも、手すりを高くしたり、胸ベルトでしっかり留めたりしないと、ころんと転がってしまいます。今、横を向

いて話しているのも、背中にクッションなどをいろいろ挟んで維持していますので、崩れたらヘルパーさんに直してもらいます。

不随意運動とは、自分の意思とは関係なしに勝手に動いてしまう症状です。もしかしたら、今日も話している間に足がぼんと動いたりするかもしれませんが、自分の意思では全く動かせないので、勝手に動いているということです。

感覚機能障害とは、腕とか脇から下の麻痺している部分の感覚がない状態のことで、冷たいとか、熱いとか、極端な場合、骨が折れても痛みが分からない、気付かないということです。

体温調節機能障害とは、体温が調節できないということです。麻痺している部分は発汗作用がほとんどなく、汗をほとんどかかないため、一気に炎天下へ出ると体温が上がってしまうので、特に夏場は苦手です。

起立性低血圧とは、心臓から送られる血は、本来なら筋肉の運動がポンプとなって心臓のほうに戻っていきますが、麻痺しているので血が戻りにくいため、足に血がたまりやすくなり、当然、頭にも血が行きづらくなり、くらくらするという状態です。特に夏場は体温が上がって毛細血管が開き、血がすぐく下がりやすくなりますので、少し苦手です。

呼吸については、皆さんはあまり意識していないと思いますが、健全な人は横隔膜の収縮と胸の筋肉を使って肺を広げています。しかし、私は胸の筋肉が麻痺しているので、横隔膜の収縮だけでの呼吸になります。ですから、肺活量が少し少ないです。

あとは、低血糖症があります。血中の血糖濃度は自律神経が調節していますが、自律神経が不安定になり、その機能が少し鈍いので、極端ではありませんが、血糖値が下がることがあります。そのときはジュースを飲むなどして血糖値を上げます。例えば、こうやって話している間に血糖値が下がることも、たまにあります。そうすると、脱力感が非常に高まります。念のため、先ほどジュ-

スを飲んで血糖値を上げましたので、今は大丈夫だと思います。

排せつ機能障害もあります。やはり、排便、排尿は自力でできませんので、介助してもらっています。

さらに、自律神経過反射の症状があります。自律神経が何かの刺激で反応しやすいので、例えば、足の位置が少しゆがんでいるとか、尿がたまって膀胱が膨らんでいるだけで、冷や汗をかいたりします。そんなに極端にひどいことはありませんが、自律神経が不安定です。

頸髄損傷では、大体、このような感じのさまざまな症状が共通して出ます。普段は、こういうことはあまり言いません。なぜかという、説明すると、重病人扱いされたり、最近はましになりましたが、本当に気を遣って、「それじゃあ、あまりしゃべったら駄目ですよ」というオーラが出てしまうからです。

また、勘違いされて困ることもあります。こういった障害があると、もちろん、配慮は必要ですが、配慮が必要なことは、めったにありません。例えば、地域で段差があって、「ちょっとお手伝いしてくださいよ」と言うことはあるかもしれませんが、こういう症状や四肢麻痺があっても、ヘルパー派遣制度を使っていますので、別に問題はありません。それなのに、障害者と見ると、困った人の代表みたいに「困ってるでしょう」という見方をされることが多いです。こういう障害があっても、今の自分にとっては、これがもう当たり前です。「皆さん、配慮をお願いします」と言ったこともあることはありますが、配慮が必要なことは、めったにありませんので、その都度、言うわけではありません。

ですから、こういう障害の話聞いて、「ああ、やっぱり、障害って大変なんやな」とか、「困った人なんやな。手伝わなあかんのやな」という印象をあまり持たれたら困るので、基本的にこういう障害の話はあまりしません。しかし、今日は、目の前に居る障害者にどんな障害があるのかを知ってもらおうと思って話しました。

## 伝えたいこと

自分の中で、今日、一番伝えたいことが次のことです。自分自身の人生を半世紀以上生きてきたなかで、障害だけに限らず、ものごとの全てにおいて、マイナスとプラスは紙一重だと思います。例えば、障害一つとっても、障害のために、できることは確かに限られていますので、当然、皆さんにできることが私にはできません。しかも、私は中途障害なので、できていたことがもうできなくなったということで、当初は、自殺したいと思うぐらい本当にショックを

受けました。

しかし、今の生活でいうと、障害が軽度になったわけではありませんが、死にたいと思うぐらいショックを受けたわりに、「障害者になって、できること、楽しいこと、めっちゃ増えたやん」というのが現実です。

要するに、障害というマイナス面はもちろんあります。ただ、それだけをずっと意識して固執すると、できることも楽しいことも、結局、失ってしまうとか、それに気付けなくなります。今、「遊びの達人」とか、「ほんまに充実した生活を送ってはるな」と言われますが、障害自体は変わっていません。変わったことは、結局、できないことに固執しなくなったという、たったそれだけのことです。

今日は、自分自身の生活を伝えながら話をいろいろとするなかで、「障害だけに限らず、マイナス面に固執しないことで、生きることが本当に面白くなるよ」という話を皆さんに伝えられたらとは思っています。

私は、バイク事故を起こして障害者になったわけですが、実は、ヤマハの RZ250RR というバイクに乗っていました（バイクの写真を提示）。本来なら白地に赤色の車種ですが、これは限定仕様で、ちょっと見て、「あ、これがいいな」と飛びつきました。

こういう話をすると、大体、「バイクに乗っていたことを後悔していますか」とか、「バイク、見るのも嫌でしょう?」と言われますが、真逆です。今はバイクにはもう乗れませんので、逆に、乗っていて良かったと思いますし、全然後悔していません。私は、いまだにバイクのエンジン音が大好きで、皆さんからしたら、「うるさいな」と思うようなエンジン音でも、「何か心地いいな」と思うぐらいなので、マイナスイメージは全然ありません。

それはなぜか。今までいろんな活動をしてきた中で、特に障害者になってからは、もちろん、いろんな障害の人に出会いますが、結局、中途障害の人は特に、たまたま障害者になったと思っています。私はバイク事故ですが、では、バイクに乗らなかったら障害者にならなかったのかということ、交通事故やスポーツ事故だけではなく、普段の生活でも、転んだときに、たまたま首に強い衝撃を受けたりして、障害者になることはあります。

私と同じような、いわゆる頸髄損傷、脊髄損傷の人たちに話を聞くと、風邪をひいて、風邪の菌がたまたま脊髄に入って脊髄損傷になった人もいます。私のような頸髄損傷も、本当にいついかなるときになってもおかしくはありません。ほかにもいろんな障害がありますので、私は、たまたまバイクで事故っただけの話で、たまたまだと思っています。ですから、バイクは危険かということ、バイクも車も危険なものは危険だと思いますが、私のなかでは、マイナスイメージは全くありません。

## 事故当時の話

では、事故当時の話をもう1回したいと思います。話したいことは、いっぱいありますが、あっちこっちに行くのが嫌なので、一応、流れを箇条書きにしたものを見ながら話します。

事故当時の話をします。私は当時20歳で、舞鶴高専（舞鶴工業高等専門学校）の電気科に通っていました。兵庫県にも明石高専（明石工業高等専門学校）があるので分かると思いますが、高校と短大がくっついたような五年制の学校です。

20歳だったので、卒業間近で、立石電機への就職が内定していました。立石電機は社名変更して、今はオムロンと言います。「オムロン」と聞けば、分かる人も何人か居ると思います。その当時、7月に内定が決まりましたが、結局、4カ月後の11月に事故ってしまいました。家が母子家庭で、親には苦勞をかけていたので、長男の私は、ようやく親孝行ができる、楽をさせてやれるという喜びがすごくありました。

37年前なので、インフォームド・コンセントは全くなくて、最初、しばらくの間は治ると思っていました。ですから、「早く治れ」という思いがあって、その時期は結構つらかったです。当然、就職の内定も取り消しになりました。ただ、治ると思っていましたので、つらくても、まだ将来のことを考えることができました。

たまたま私が入った病院は、大阪の星ヶ丘厚生年金病院（現・JCHO星ヶ丘医療センター）でした。そこには、今はもうなくなったみたいですが、脊損病棟があり、私と同じ頸髄損傷のほか、胸髄（きょうずい）損傷、腰髄（ようずい）損傷など、いわゆる脊髄損傷の人たちがたくさん入院していました。この病棟の人たちは、退院するときに、みんな車椅子で退院していきます。それで、「あ、治らないんや」と、もう二度と手足が動かないことを知りました。

当時の脊損病棟では、事故で入院している人が多かったのですが、みんな、「何で助かったんやろ。これから先、生き地獄やないか」と思っていました。もちろん、私もそうです。特に、親に楽をさせてやれると思ってた矢先でした。その当時、ヘルパー派遣制度はありませんので、「一生、親に面倒を見てもらうのか」とか、「手足が動かない生活って想像できないし、生き地獄や」と思い、大抵の人たちが思うように、「本当に、これはもう死ぬしかないな」と思いました。

その当時、死のうと本当に決意しましたが、手足が動かないと自殺もできません。「死ぬとしたら舌でもかみ切らなあかんのかな」と思って、歯で舌を1回かんでみましたが、「これ、かみ切れるかな」とか、「病院に入院しているから、かみ切っても、すぐ手術されるかな」とか、「またみんなに迷惑かけるかな」とか、そんなことがいっぺんに自分の中に入ってき

て、当初を振り返ると、発狂してもおかしくないレベルのショックでした。

そういうときはどうなると思いますか。あくまでも私の場合ですが、あまりにもショックが大きすぎたのが逆に良かったのか、実を言うと、「死ぬにも死ねない。何なん、これ」と思いました。その瞬間、防衛本能が働いて、勝手に現実逃避をしたようで、自分にとっての将来や夢や目標が一切なくなりました。

それを自分でただ考えたのではありません。例えば、「ああ、自分は手足が動かないから、もう将来ないな」ではなくて、瞬間的にすこんと抜けたみたいになって、逆に楽になったというか、将来のことも夢も希望も目標も何もなくなった瞬間に、そんなにつらくも苦しくもなくなりました。周りの人たちと接することはありませんが、要するに、普通にテレビを見て楽しんだり、食事を楽しむことができるようになりました。「つらくも苦しくも全くない」と言えば、うそかもしれませんが、そんなに大したつらさや苦しさはなくなりました。

## 障害受容のプロセス

障害の受容のプロセスについて言うと、今でこそ、このように元気にやっていますが、（事故から）10年たって、ちょうど30歳のときに気づきと変化がありました。

一つ目は、人間には、もともと心身ともに元気になるという自然治癒力があるということです。10年間、別に何かがあったわけではありません。最初は、分厚く硬い殻に閉じこもりましたが、自然治癒力なのか、それが少しずつどんどん薄く軟らかくなり、今まで一切入ってこなかった周りの刺激が少しずつ入りやすくなってきました。

二つ目は、家族が普段どおりに接してくれたことです。「家族はどう接したらいいんですか」とよく言われますが、家族が普段どおりに接してくれたことが、自分にとっては本当に良かったというか、すごくプラスになりました。焦らされたり、「頑張れ」と言われると、「分かってくれへんのに」と意固地になったりするでしょうし、逆に、「この子、かわいそうやな」と接せられたら、それこそ、「頑張るぞ」という気持ちにつながっていかなかったと思います。そういう意味では、普段どおりに接してくれたことは、自分にとってありがたく、本当に感謝しています。

三つ目は、ちょうどその時期に、いろんな人たちとの出会いがあったことです。それまでにも、いろんな出会いがあったと思いますが、本当にシャットアウトしていたので、ようやく、いろんな人との出会いを受け入れられるようになり、それが自分にとってすごくプラスになりました。

特に障害当事者団体との出会いで、中でも京都頸



髄損傷者連絡会には 20 年以上ずっと参加しています。京都頸髄損傷者連絡会は、もう 30 年以上活動している老舗ですが、「会員に入らなくてもええし、とにかくイベントでも遊びに来たら？」と何回か言われたので、「それじゃあ、1 回行ってみようかな」と行ってみたら、すごい衝撃を受けました。

例えば、運動会を開催します。「どうするねん」というのがあると思いますが、私は、その当時、電動車椅子を手というか、肩でどうにか操作する感じでしたが、パン食い競争に参加しました。そこに集まっている人たちは、すごく楽しんでいました。もちろん、そういうイベントだけを楽しんでいるのではありません。「こんな面白い楽しみがある」とか、「こういう仕事をしている」という話を聞いて、自分にとっては、それがすごい衝撃でした。「えっ、障害あるけど、何でこんなにみんな楽しんでるの？」とか、「えっ、障害あるけど、仕事してはるの？」とか、「えっ！」という衝撃がすごくありました。

そして、当然、「えっ、自分は何してるんやろ」と思いました。本当に対比というか、マイナス面とプラス面で、私はマイナス面しか見ずに、それに固執していたから、「できなくなった、できなくなった、できない、できない」と思っていました。同じ障害がある人たちの「別に、人生楽しんだらええやん。見つけたら仕事もあるで」という姿を見て、「あれ？何か、自分、損やん」と思いました。

もちろん、それだけではなく、いろんな人との出会いもあります。しかし、特に障害当事者団体との出会いは、すごく衝撃的でした。そのときに、障害があることのマイナス面に固執することと、「それはそれでええやん。楽しむことを楽しもうや」と考えることの違いをまざまざと感じ、ショックを受けました。

それから反動が来ました。今日の話にもつながりますが、例えば、振り返ると、私は（事故から）10 年間の記憶があまりありません。これを「生けるしかばね状態」と呼んでいます。だらだらテレビを見て、ただ食事をしていました。食事は一応は楽しんでいましたが、そんなにすごく楽しんでいるわけではありませんでした。そんな感じで、だらだらと 10 年を過ごしました。

すごく無駄な時間、無駄な人生で、もったいないなと思います。これも考え方です。「10 年間、もったいないな。何してたんやろ」と本当に思いました。逆にそれが良かったのかどうなのか、反動が来て、今度は、「楽しまな損やん。楽しんでやれ」という、貪欲に楽しもうという気持ちで、すごくプラスに働いたというか、その後は、いろいろと遊びに行き、仕事もいろいろ経験していますが・・・。

面白いなと思うのは、「時間をもったいないわ。遊ばな。楽しまな」と貪欲になることで、いろんなことにチャレンジするようになったことです。そうす

ると、できないことが多いからこそ、やればやるだけ、できることが面白くなりました。

私は、人前で歌を歌うのは大嫌いでしたが、今は、「木村と言えばカラオケ」と言われるぐらいカラオケが好きです。みんなが選曲に悩んでいるうちに駆けつけ 3 曲は歌います。このように、嫌いだったことが好きになりました。

また、もともと私は、どちらかという、文系というより理数系ですが、川柳とか、詩とか、童話とか、しまいにはシンガー・ソングライターをやってみたりとか、本当に貪欲にどんどん楽しむようになりました。

仕事に関しても、ヘルパー派遣事業所を運営したこともありますし、ヘルパー派遣事業所のコーディネーターの仕事をしたこともありますし、今は、「障害者ならではの仕事を開拓しても面白いやん」ということで、「ガラ（柄）」という当事者団体で代表を務めています。このように、今は仕事でもいろいろと頑張っています。

このような形で、「本当に、障害者になってからのほうが、めちゃくちゃいろんなことで面白いやん」と活動しています。

大谷 木村さん、ありがとうございます。

ここまでが前半部分です。ここで 5 分の休憩を挟んで、5 分後からまた再開します。（休憩）

## こんなこともできるんだ

木村 はい。言葉だけよりも写真や動画を見ながら話ができたらと思っています。

障害があると、何かとできないことばかりが強調されますが、工夫すると、意外といろんなことができます。その部分が結構忘れられています。

これは、何十年も前の当初の頃の写真ですが、今は亡き母が右側に写っています。私は手を全く持ち上げられません。少し見づらいますが、これはベッドの上に杵を組んで、滑車や重りを利用したものです。肩は動くと言いましたが、そこにさらしをくくって手を乗せると、肩の動きで手を上下させることができます。

ボタンが押しづらいですが、これも病院で作ってもらいました。手首を固定して、ペンを持つものを手に付けて、ペンの先にゴムを付けると、全部のキーが押せるわけではありませんが、文章を打つことができます。ですから、最初はゲームを適当にやっていた。こんな感じで、工夫すると、意外といろんなことができます。

こちらの写真は、普段乗っている車椅子ですが、これは背もたれが高く、リクライニング式の車椅子です。こんな形で、起立性低血圧で、体調がちょっとくらくらするときにはこうやって倒すと、それだけで治ります。それこそ血がたまったら、



脚のほうまで上に上げるといふことで、体調管理は、皆さんより確かにいろいろと難しいですが、ここがまたマイナス面とプラス面で、体調管理が難しいからこそ、体調の管理をすごくしています。

例えば、日帰りで京都から東京ディズニーランドへ行くときは、始発に乗り、最後のエレクトリカルパレードを見て帰ってくるというのを車椅子で行っています。それで、別に体調を崩すことはありません。だから、体調管理が難しいからこそ、体調管理をしっかりしているの、目いっぱい楽しめるといふ捉え方もできるのではないかなと思っています。

今、車椅子にはテーブルが付いていますが、これは、実を言うと、自分の手が重たくて肩が凝るといふか、本当にきんきんに張って痛くなるので、自分の腕を載せて、首や肩の負担を減らす目的があります。テーブルで体調を管理しています。

この写真を見てください。どこか分かりますか。これはボウリング場です。板とか置いてあるのは、実は、ボウリングをするにはどうしたらいいだろうといふので、これは板で作ったものです。今でこそ、ボランティアはすごく少ないですが、昔は、ボランティアと一緒にいろいろな企画を楽しんだりとか、こういうものも木を買ってきて横にゴムをはめてボウリングと一緒にやりました。

一緒にといふのは、例えば、「健常者も障害者も一緒にできるやん、これやったら」といふ部分で、車椅子使用者は車椅子でそのまま来て、その板を膝の上に載せる。健常者もパイプ椅子を持ってきて板を載せて、一緒にやってみてといふ部分で、こんなふうにもいろいろ楽しんだりします。これも頸損（頸髄損傷者）連絡会で、活動をしているイベントの一つとしてやっていました。

この映像はグライダーです。みんなは本当にいろいろな遊びや仕事をしていますが、「グライダー乗ってんねん」といふ人がいます。同じ頸椎損傷でも腕とか私よりもっと動く人もいふので、こんな感じで、教官が後ろについて自分で操作します。グライダーはエンジンがなくて、プロペラがなくて、「何なの？ どうするの？」といふのがあります。

この写真は京都ではなくて、車を借りて、岐阜まで行ったときのものです。たこ糸のような感じですが、ワイヤーを付けてローラーでくるくると回して浮力で浮いて、浮いたらワイヤーを外して飛びます。ロバに乗っている感じで、ちょっと怖いといふえば怖いですが、とことこと微妙な揺れが面白くて、「ああ、こんなこともできるんや」と。みんなが楽しいと思ふことを、「ああ、ほな、やってみる」と、だから、そういう意味でも楽しいことが増えてきたといふ部分もすごくあります。

## 貪欲に楽しむ

みんなが、「楽しい」といふと、すぐ手を出してしまいます。必ず楽しいかといふと、そうでもありません。でも、反動で、貪欲に楽しむ精神がすごくプラスになっているのか、結構なことにいろいろチャレンジすると、面白い。すると面白いといふので、趣味が増えてしまっています。

最初の趣味は、事故から10年ぐらいつつ中で、それまで近所のおばさんとあまりつながりはなかったのですが、会話がが増えてきて、「新聞に川柳とかをちょっと投句してみたら」とか言われて、「じゃあ」といふとやってみました。朝日新聞に川柳が4句載っています。

難しいことはできないけれども、時事ネタで、「5・7・5」だったら何か面白いのをいろいろ考えていたら、「は」や「を」や「に」をちょっと変えるだけで違うことに気づきました。例えば、「事件で使われた拳銃を神田川に投げ捨てた」といふ自供をもとに大勢の人が神田川をさらっていたニュース映像を見て、「神田川少しはきれいになったかな」といふのを書いたら新聞に載りました。

「やってみたら面白いやん」といふことがどんどん増えてきて、こういうのをやってみたら、何か文字って書けるんだなど。私はもともと、教科書以外、本当に漫画しか読んだことがないので、川柳とかそういうのは苦手でしたが、「何か詩とかは書けるんちゃう」とか思いました。特に、初期の頃なので、本当にやれることが少ないと思つたので、まず、書くことから、「川柳面白い」、「文字って面白いやん」、「文章って面白いやん」といふ気持ちで詩を書きだしました。

この詩を作ることが結果的にはすごく良かったかなといふのは、今の自分といふのを見つめる、自分の中で何かもやもやしている部分、「こんでええんかな」といふ部分を、自分で詩を書いて、自分に後押しするよな、背中をぽんとたたくよな感じ「こんでええんかな」といふ思いになったことです。

例えば、「だるまとかは倒れても倒れてもすぐに起き上がる、僕は倒れたままだ」といふ詩は、同じ障害のある人でもどんどん活動しているなかで、「ほんま、これでいいんかな」と、自分自身を見つめ直す詩になり、ちょうど良かったのかなと。

また、エレクトーンの先生に出会ったときに、シンガーソングライターに急になってみたいと思つきました。「コード進行って何？」と全然知らないんですけど、もうゼロから始めて、やっぱり道具、パソコンとかがあるとすごく楽といふか、いろいろなことができるなと音符を打ち込んだら、勝手に出てきました。

それで1回、自分で「恋は気まぐれ」といふ歌を作ってみたり、歌詞を書いてみて、鼻歌で歌って、音符

を拾ってみます。音符を拾うのもなかなか難しいけれども、「いや、音、こんだけ離れてるで、もっと離れるで、もっと高いで」とか、アドバイスをしてもらって、歌を作ってみたりとしました。

食欲に楽しむと、「楽しい、楽しい」とどんどん思っていると、「好きこそ物の上手なれ」かもしれないけれども、ヴィックスヴェポラップの「オヤスミ童話集」というのがあって、それに応募して、入選はしなかったけれども、最終選考に残ったということで、ここにも、「消えた赤色（木村善男）」と載っています。何かいろいろ考えたりして、それを形にして作り上げて、本当に面白いです。

## 人とつながることの楽しさ

次に、2分ほどの動画ですが、これも、「ユーチューバーって面白そうやな」という部分があって、2年ほど前からユーチューバーもやっています。過去のデータとかもったいないから、いろいろアップしていました。さっきの歌です。作詞作曲して自分が歌っていますが、ちょっと気恥ずかしいですが、ちょっと聞いてください。

(動画再生)

**木村** といった感じなので、また、チャンネル登録をしていただけるとうれしいです。いろいろ活動をしていると、声がいろいろとかかってきます。これは、NHKのもうなくなっていますが、「きらっといきる」と言う番組に出たことがあります。今、その後、「バリバラ～障害者情報バラエティー～」という番組に続いていると思います。いろいろ活動していると「出てみないか」とお声がかかり、障害者と介助者の関係性というテーマで話しました。

つながっていることの面白さということでは、地域の近所の子どもたちとかと付き合いがあります。この写真はだいたい前になりますが、夏祭りやクリスマス会の時のものです。ホームパーティーとかが好きなので、かき氷を買っていたりとか、たこ焼き、焼きそばとかを作ったりして、みんなで集まってにぎやかに楽しんだりします。地域で暮らすというのが、やはり、こういう近所付き合い、特に、子どもたちの成長を楽しむというのが自分の楽しみの一つになっています。

ただ、去年から（コロナ感染状況により）夏祭りやクリスマス会はやめておこうかという状況です。これまでは地域とのつながりが結構あり、子どもたちと大人で20人以上集まっていました。その楽しみが、今は全然できていないので少し悔しいと思います。

みんなに言われると、つい乗って、いろいろな活動をやってしまいます。スキューバダイビングをやっている人がいて、「やってみたら」と言われ

て、「スキューバダイビングってどうできるの?」というので、でも、そこは探すのも面白いですね。ネットでいろいろと調べて、沖縄のほうでできるみたいだということで、沖縄でやってみようかなと。ほんのちょっとですが動画があります。

(動画再生)

**木村** 実は、これは本当に大変でした。今、立ったような状態で海に入っていました。普段、うつぶせはしないので、うつぶせになると呼吸困難というか、肺が押しつぶされるのではないけれども、何か苦しくて、「ちょっとうつぶせになれないんですよ。立ったままやったら、どうにかいけるんですけど」と言ったら、「じゃあ、立ったままはどうにか海に入ろうか」というので、いろいろとやってみてもらって、立った状態だったら息苦しくもなかったの、参加できました。スキューバダイビングは、今まで2回しています。

これはハロウィンの写真です。渋谷のハロウィンも今から4年前に、「渋谷のハロウィン、面白みたいやん」と言われたら、「あ、そう。1回行ってみるわ」と言って、4年前に1回行って、めっちゃ面白くて、毎年参加していますが、さすがに去年はコロナ禍の関係で行きませんでした。だから、4年前、3年前、2年前と3年連続で行っていますが、去年も今年もちょっと無理かと思っています。

渋谷ハロウィンは、大体アニメ系か、ゾンビ系かという部分で、アニメ系は思い当たらなかったの、ゾンビと。いろいろ調べてみると、ちょっとしたゾンビが多いけれども、リアルゾンビが少なかったの、「どうせやったら、じゃあ、目立ってやれ」と、車椅子使用者なので目立つんですが、リアルゾンビを目指して、この写真がちょうど2年前の最新のものです。

次は、もっともっとリアルにやってやろうと思っていますが、今年もちょっと無理かなとは思っています。というような感じで、本当にごく一部ですが、こんなふう楽しんでます。という感じですが、このところで、1回、質疑応答にそろそろ入ったほうがいいですか。

## 質疑応答

**大谷** そうですね。はい、ありがとうございます。そうしたら、せっかくの機会ですので、質問があれば、この機会にしようと思っていますが、参加している学生の皆さん、この機会に何か聞いてみたいことがあるら、直接、またはチャットのほうに連絡してください。

**木村** 今回の話に関係なしでも、何でも言ってください。答えられるかどうかは分かりませんが。さてさて、どうですか。

**大谷** 今、質問が1つ挙がってきました。「行動力の

秘訣などがあるかを聞きたいです」ということです。

**木村** あえて言うなら、「楽しもう」という姿勢です。一般論的にも、例えば、お笑いを見に行っても、「お金払ったから、さあ、笑かしてくれ」と思うのと、「いやあ、何か楽しもう楽しもう」と行くのと全然違うというのは、自分で何となく思います。だから、どうせだったら楽しもうという思いを持っているのが、すごい原動力かなと思っています。

だから、同じことでも、例えば、趣味の話でもそうですが、「川柳なんて」とか、「ふーん、詩なんて」、「童話なんて」と思わず、「何か楽しいんちゃうの。楽しんでみようか」と思います。「楽しんでみようか」とやるから楽しいです。自分は半世紀以上生きていますが、自分の過去を振り返ってそう思います。だから、「楽しんでやれ」と、「どうせやったら、楽しんでやれ」と思うのがすごく原動力になるかなとは思っています。

**大谷** 次の質問です。

**木村** はい、どうぞどうぞ。

**大谷** 「今、一番夢中になっていることは何ですか」という質問です。

**木村** 本来なら、私の中では渋谷ハロウィンです。今、パワーアップでアイデアばかり浮かんでいます。

あとは、先ほどどちらと言いましたか。障害者ならではの就労というシステム化できたら面白いかなというのがあって、それに力を入れています。力を入れるというより面白いかなと思っています。最近、女性が強くなってきていますが、それは、経済的自立も関係するのかなと思っています。障害者は就労がなかなか難しかったり、「福祉的就労」と言って、時給100円ぐらいのこともあったりもします。

そこで開拓するのに、健常者と対等だとしんどい部分があるので、障害者だからできる仕事をどんどんシステム化していったら、経済的自立ができて、それこそ、障害者に対するマイナスのイメージはかなり減ってくるのかと思っています。そこを死ぬまで頑張りたいというのはあります。

**大谷** もう一つ質問が来ています。

**木村** はい。

**大谷** 「仕事について、現在どのようなことに従事しているか」、それから、「仕事にはヘルパーさんとかも付いていますか」という質問が来ています。

**木村** ここがまた難しいところです。例えば、仕事でヘルパーは使えません。でも、それは問題視されて、今改善されつつあります。例えば、私自身、生きるためにヘルパーを使います。ただ、「生きるためだけに使うんやったら、その生きるために使う時間を仕事してもいいんちゃうの？ヘルパーを使って」という部分があります。

でも、今のヘルパー派遣制度では重度の障害の

方のための重度訪問介護という種類のサービスがあります。重度の障害の方に対しては、いろいろと配慮しようという動きは、今出ているので、使えることもあります。基本は使えません。だから、私がお仕事をしていたのも、ヘルパー派遣事業所を運営したりとか、そんな感じです。

コーディネーターも研修用の資料を作ったりとか、自分自身が研修のモデルになったりといった感じで、基本、ヘルパーは使えません。でも、重度の方には使えるような方向で、今、制度はちょっとずつ作り出されているという感じですよ。

**大谷** ありがとうございます。チャットのほうからの質問はもう一つ、清水先生からの質問です。「心理学を学ぶことについてどのような意味があるとお考えでしょうか。心理学を学んでいる学生にとって、何を考えることが大事でしょうか」ということの意味を聞きたいということです。

**木村** 机上の論理というのは絶対必要だとは思いますが。というのは、リアルに体験したことをじっくり、しっかり考えることはとても大切なことだと思います。ただ、私も考える時間はやっぱり多いです。考えるというのが、いろいろな方向性で見たりするのも大切なことです。逆に言うと、机上の論理だけでは駄目だし、リアルに現実にいるいろいろな体験してというだけでも駄目だと思います。

私も心理学自体よく分かっていないけれども、そういう意味で、リアルにいろいろなことを体験して、体感して、その中でいろいろな方向性で、いろいろな分析の仕方をして、「ああ、なるほど」という部分はとても大切なことだと思います。だから、リアルがあつての心理学だと思つて、心理学だけ学んで、「できましたわ」というのは絶対にあり得ないと思うという答えでいいですか。

**大谷** ありがとうございます。終わりの時間もそろそろ近づいてきました。

私自身もこれまで心理学を学んできた立場として、やはり、人の心について考えていくときに、どうしても自分の想像の範疇でしか相手のことを想像できないという、その限界というか、その部分をととても感じるがありました。やはり、いろいろな立場の人、自分とは違う経験をした人の話を聞くことはさまざまな意味での学びになるなと思つており、この授業の中でも、そういう意味で、木村さんに話していただく機会がぜひ持てたらと思つて、無理をお願いしてこのような機会を持ちました。

とても貴重な機会をいただけたと思つています。木村さん、本当にありがとうございます。秋山先生も本当にご尽力いただいて、ありがとうございました。最後に、あらためて御礼申し上げたいと思つています。

最後に、木村さんに拍手をお願いします。木村

さん, どうもありがとうございました。

木村 ありがとうございました。

(終了)



「神戸学院大学心理学研究」投稿規程

2018年4月1日

制定

改正 2018年12月5日

改正 2019年6月5日

第1条（目的）

神戸学院大学心理学部における教育・研究成果の発表を目的として、「神戸学院大学心理学研究」（以下「心理学研究」という）を発行する。

第2条（編集等の機関・原稿の採択）

1. 心理学研究の企画、原稿の募集及び編集は、心理学研究編集委員会（以下「委員会」）が行い、掲載可否の権限および編集責任をもつ。
2. 委員会は、心理学部専任教員および実習助手から4名で構成され、委員長は互選とする。

第3条（執筆者の資格）

1. 本誌に論文を投稿できる者は以下の通りとする。
  - (1) 心理学部専任教員
  - (2) 心理学部実習助手
  - (3) 心理臨床カウンセリングセンター職員（インターンワークラー・心理カウンセラー）
  - (4) 人間文化学研究科の心理学関連の専攻及び講座の学生
  - (5) 心理学研究科の学生
  - (6) 心理学部教授会の承認を得た者
2. 共著執筆論文の投稿については、筆頭執筆者が(1)～(6)のいずれかである場合に限る。(1)～(6)以外の者も、第2著者以下であれば、共著者となれる。(4)(5)については、専任教員を共著者に含める。

第4条（原稿の要件）

心理学研究に執筆する原稿の要件は、次の各号のとおりとする。

- (1) 他誌に未掲載であり、かつ本誌以外に投稿をしていない論文であること。
- (2) 完成原稿であること。
- (3) 原稿の種類は次のいずれかに該当するものであること。
  - ①原著論文：原則として、問題提起と実験、調査、事例などに基づく研究成果、理論的考察と明確な結論をそなえた研究。査読有。
  - ②研究報告：すでに公刊された研究成果に対する追加、吟味、新事実の発見、興味ある観察、少数の事例についての研究報告、速報性を重視した研究報告、萌芽的発想に立つ報告。査読無。
  - ③海外研究・国内研究報告

- ④人間文化学研究科の心理学関連の専攻及び講座の修士・博士論文の要約
- ⑤心理学研究科の修士・博士論文の要約
- ⑥心理学部優秀卒業論文
- ⑦教員の活動実績（研究実績、教育実績、社会貢献、競争的研究資金獲得実績、大学運営）
- ⑧今年度の主な行事
- ⑨その他、紀要の編集上必要と認められるもので、心理学部教授会の承認を得たもの

第5条（審査）

原著論文は、専門家による3人（神戸学院大学心理学部専任教員より1人以上、学外より1人以上）のレフェリーを設け、その査読の結果をもとに、委員会において採否を決定する。

第6条（倫理的配慮）

論文の内容は、研究対象者や被験体の保護を含め、倫理的配慮が必要である。原稿は、神戸学院大学研究倫理綱領および公益社団法人日本心理学会倫理規程に則ること。

第7条（原稿の形式）

原稿は、別に定める「神戸学院大学心理学研究投稿細則」によるものとする。

第8条（発行）

心理学研究は、年2回の発行とし、各年度の原稿募集・投稿期限・発行日は委員会が決定し、公表する。

第9条（校正）

校正は、2校までとする。その際、大幅な修正は原則として認めない。

第10条（公開方法）

心理学研究の目次および掲載論文等は、原則として心理学部のホームページ及び神戸学院大学機関リポジトリで公開する。

第11条（著作権）

掲載された論文の著作権は神戸学院大学心理学部に帰属する。

第12条（改廃）

この規程は、心理学部教授会の議を経て改正することができる。

【附則】

本規程は2018年4月1日から施行する。

【附則】

本規程は2018年12月5日から施行する。

【附則】

本規程は2019年6月5日から施行する。

「神戸学院大学心理学研究」投稿細則

2018 年 4 月 1 日

制定

改正 2020 年 2 月 21 日

改正 2021 年 10 月 27 日

第 1 条

投稿を希望するものは以下の諸要項にそって、MS Word で作成した原稿を電子メールで「神戸学院大学心理学研究」編集委員会（以下「委員会」という）に送付すること。

第 2 条 論文の種類と原稿枚数

1. 原著論文：原則として、問題提起と実験、調査、事例などに基づく研究成果、理論的考察と明確な結論をそなえた研究。査読有。掲載時、A4 ダブル・カラム約 20 ページ以内。
2. 研究報告：すでに公刊された研究成果に対する追加、吟味、新事実の発見、興味ある観察、少数の事例についての研究報告、速報性を重視した研究報告、萌芽的発想に立つ報告。査読無。掲載時、A4 ダブル・カラム約 20 ページ以内。

原稿枚数は、表題、著者名、所属機関名、要約とキーワード、本文、引用文献、脚注、図表、付録などすべてを含め、論文種類ごとの規定ページ内におさめる必要がある。

第 3 条 論文の形式

1. 提出原稿は A4 用紙を縦に用い、各ページは、上下、左右に 3 cm 以上の余白を取り、30 文字×40 行（1200 字）とし、10.5 ポイント以上のサイズの文字を用いる。
2. 英文は、一般的フォントおよび 10.5 ポイント以上のサイズの文字を使用し、行間はダブルスペースとする。1 ページに入る行数はフォント、サイズにより異なるが、20～23 行を目安とする。
3. 原稿には通しページを付ける。
4. 要約は日本語、英語どちらでも構わない。和文は 400 字程度、英文は 100～200 語とする。
5. 原稿作成上の規定や表記法、文献の引用などについては、日本心理学会の「執筆・投稿の手びき（2015 年改訂版と追加修正）」を参照のこと。

第 4 条 提出様式

投稿にあたっては、以下のものを委員会に電子メールで送付する。

1. 表紙（投稿区分、表題、著者名、連絡先、3 ないし 5 つのキーワード）  
和文原稿の場合は、論文題目の欧文訳と著者名のローマ字表記を併記すること。

2. 本文

3. 引用文献

4. 要約

5. 表・図

6. 図のキャプション

7. 承諾書：教員が指導学生の卒業論文などのデータをもとに論文を作成し、その学生が共著者に含まれない場合は、学生からの承諾書を提出する。

第 5 条 査読の手続き

1. 査読者の選定

委員会は査読者 3 名を選定する。

2. 査読者による査読

受稿論文は査読者 3 名に、著者情報を伏せて依頼され、査読される。査読者名は著者には公表されない。

3. 査読者による判定

査読者による評価に基づき、判定が行われる。

i) このままで掲載してよい

ii) 掲載してよいが、意見を助言する

iii) 意見に基づき訂正すれば、掲載する

iv) 掲載しない

4. 論文の改稿

受稿論文は、査読者のコメントを付けて、期限つきで改稿を求められる。

5. 改稿論文の確認

著者によって修正・加筆され再提出された改稿論文は、委員会が確認する。論文によっては、再度査読され、修正が求められる場合もあり得る。

6. 掲載、不掲載の決定

掲載、不掲載は、すべての査読者からの評価が得られた後、委員会が掲載、不掲載を判定する。

第 6 条

この投稿細則は、心理学部教授会の議を経て改正することができる。

附則

この投稿細則は、2018 年 4 月 1 日から施行する。

附則

この投稿細則は、2020 年 2 月 21 日から施行する。

附則

この投稿細則は、2021 年 10 月 27 日から施行する。

神戸学院大学心理学研究 第4巻 第1号  
Kobe Gakuin University Journal of Psychology,  
Volume 4, Number 1

発行日 2021年12月24日  
編集委員 小久保 香江 清水 寛之  
川瀬 諭 長谷 和久  
査読協力者 岡村 心平 定政 由里子  
竹田 剛 道城 裕貴  
中川 裕美 中村 珍晴  
難波 愛 松島 由美子  
村井 佳比子 山本 恭子  
学外査読協力者 尾崎 拓 (関西福祉科学大学)  
後藤 学 (原子力安全システム研究所)  
向居 暁 (県立広島大学)  
柳澤 邦昭 (神戸学院大学人文学部)  
山本 晃輔 (大阪産業大学)  
編集事務 心理学部長室  
発行者 神戸学院大学心理学部  
所在地 〒651-2180  
神戸市西区伊川谷町有瀬518  
TEL : 078-974-1551  
URL : <http://kobegakuin-psy.jp/>  
制作 交友印刷株式会社  
〒650-0047  
神戸市中央区港島南町5丁目4-5